

# 刑事訴訟法註釋目錄

第一編 總則	自第一	至第二十四條
第二編 裁判所	自第二十五	至第三十九條
第一章 裁判所ノ管轄	自第三十	至第四十五條
第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避	自第四十六	至第四十八條
第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審	自第四十九	至第五十九條
第一章 捜査	自第六十	至第六十六條
第一節 告訴及ヒ告發	自第六十一	至第六十五條
第二節 現行犯罪	自第六十二	至第六十六條
第二章 起訴	自第六十七	至第六十九條
第三章 豫審	自第七十	至第七十五條
第一節 令狀	自第七十六	至第八十六條

第二節 密室監禁

自第八十七條  
至第八十九條

第三節 證據

自第九十二條

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

自第九十三條

第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押

自第一百零一條

第六節 證人訊問

自第一百零二條

第七節 鑑定

自第一百零四條

第八節 現行犯ノ豫審

自第一百零九條

第九節 保釋

自第一百五十條

第十節 豫審終結

自第一百六十一條

第四編 公判

第一章 通則

自第一百七十六條

第二章 區裁判所公判

自第二百一十二條

第三章 地方裁判所公判

自第二百三十五條

第五編 上訴

第一章 通則

自第二百四十一條

第二章 扣訴

自第二百五十條

第三章 上告

自第二百六十七條

第四章 抗告

自第二百九十三條

第六編 再審

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

自第三百一十條

第八編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

自第三百十七條

第二章 復權

自第三百二十三條

第三章 特赦

自第三百三十一條

附 則

自第三百三十四條

# 刑事訴訟法註釋

樋山廣業 著

## 刑事訴訟法

**註釋** 抑モ刑事訴訟法ハ其目的、刑法ヲ實地ニ運用シ其效用ヲ顯ハサシムルモノニシテ單ニ犯罪者ヲ刑罰ニ處スルモノ、ミテ以テ目的トセス併セテ無辜ノ冤枉ニ陥ルモノヲモ防キ敢テ臣民ノ權利ヲ侵害セサルヲ期スルモノトス故ニ本法ハ公益私益ヲ併セテ保護スルモノナルコトヲ記憶セサルヘカラス從テ分類法上ヨリ云ヘハ公法ノ部類ニ屬シ殊ニ内部タリ即チ内國法トシテ刑法ト共ニ研究ヲ怠ルヘカラサル法典トス蓋シ刑法ハ刑罰ヲ定ムルモノニシテ罪ヲ犯シタルモノニアラサレハ支配ヲ受クルコトナシ故ニ其規定ニシテ假令不當ナルニモセヨ罪ヲ犯サ、レハ直接ニ其害ヲ受クルコトナシ故ニ一般良民ニ影響スルコトナシト雖モ本法ハ反テ良民ニ直接ニ害ヲ被ルコトアリ例ヘハ嫌疑者ノ家宅ヲ搜索シ、財産ヲ差押ヘ、身体ヲ拘束セラレ、其他証人ニ參考人ニ時ニ法廷ニ出頭セサルヘカラサル場合ヲ生スヘシ故ニ若シ其規定ニシテ不當ナリトセハ臣民ノ迷惑ナル實ニ喋々ヲ要セス故ニ良民ト雖モ大ニ研究シ我權利ヲシテ保護シ安全ナラシメサルヘカラス

### 第一編 總則

**註釋** 總則ハ刑事訴訟法ノ總體ニ適用スヘキ規則ニシテ公訴、私訴ノ性質、公訴私訴ヲ爲ス人、

期間、送達、書類調製、本法ノ效力等ヲ規定シタルモノトス

### 第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

刑法完備セルモ其刑罰ヲ處スル方法ヲ定メサレハ如何ニシテ刑罰ヲ加ヘ以テ公安秩序ヲ維持スヘキヤ刑法ハ審判ノミ故ニ先ツ犯罪ノ嫌疑アルモノハ果シテ犯人ニ相違ナキヤ否ヤ審理セザルヘカラス其審理シテ罪アルモノナレハ刑罰ヲ科シ罪ナキモノハ無罪トスルコトヲ目的トスル訴之ヲ公訴ト稱シ私訴ニ對スル語トス

本條ニ依レハ公訴ハ「犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノ」ナリト云ヘリ其目的ニアルカ果タ一アルカ從來學者間ニ異議アル問題ナレトモ余ハ其目的ハ一個アリトノ說ヲ主張セルモノナリ夫レ治罪ノ手續ニ於テハ或ハ犯罪ヲ證明スルコトヲ要スルモ直接ノ目的ハ刑ヲ適用スルニ外ナラス蓋シ社會カ公訴權ヲ有スルハ刑罰權ノ實行ヲ爲スニ於テ必要ナリ假令刑法アルモ之カ實行手段ナキトキハ其效ナシ故ニ有效ニ制裁ヲ加ヘントセハ刑ノ適用ヲ爲スニアリトス之レ直接ノ目的ハ刑ノ適用ニアルモノナリ而シテ刑ノ適用ヲ爲サンニハ其犯罪ヲ證明セサルヘカラス此證明アリテ初メテ其刑ヲ適用ス故ニ犯罪ヲ證明スルハ刑ヲ適用スルニ於テ唯一ノ必要ナリト云フヘシ

公訴ハ法律ノ區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ其法律ノ區別トハ其犯罪ノ性質ニ依ル區別タリ從テ檢事ノ職權ニ區別アルコトヲ知ル即チ裁判所構成法ニ於テ重罪輕罪及ヒ違警罪ニ付テハ各其管轄ノ裁判所ヲ定メテ其裁判所ニ檢事ヲ分派シテ各自其管轄スル所ノ事件ヲ掌ル故ニ地方裁判所ノ檢事ハ其地方裁判所ノ管轄スル事件ヲ公訴シ區裁判所ノ檢事ハ其區裁判所ノ管轄スル事件ヲ公訴ス此區別

別ハ即チ本法ノ所謂法律ニ定メタル區別タリ此區別ニ從テ檢事ハ社會ヲ代表シ公訴ノ提起及ヒ實行ヲ爲スニアリ其提起ハ裁判所ヘ公訴ヲ起シ裁判所ヲシテ之ヲ受理セシムル手續ヲ云ヒ實行トハ裁判所ヲシテ公訴ノ目的ヲ達セシムル手續ヲ爲サシムル總テノ行動ヲ云フ彼ノ被告人訊問ノ如キ證據蒐集ノ如キ辨論ノ如キ皆實行タリ

檢事ハ公訴ヲ拋棄スルコトヲ得ヘキヤ屢々實地ニ之ヲ見聞スルニ立會檢事ニ於テ法廷上揚言シテ檢事ハ本件公訴ヲ拋棄スト云ヘリ蓋シ檢事ハ公益ヲ代表シテ公訴ヲ提起シ實行スル權ヲ有スト雖モ公訴權ノ取捨ヲ爲ス權力ナシ故ニ若シモ一旦公訴ヲ起シタルモ其效ナキトキ即チ公訴ノ目的ヲ達スルコトヲ得サル場合ニ於テハ其モノニ對シテ無罪ヲ請求スルヲ至當ナリトス犯罪ヲ證明シテ明ラカナリシトキハ刑罰ヲ加フルコトヲ請求シ之ニ反シテ其ノ證明立タス却テ反對ノ証アルトキハ之カ無罪ヲ請求スルハ當然タリ若シモ拋棄スルコトヲ得ヘシトセンカ檢事ハ公訴ヲ私有スルカ如キ感アリ公訴ハ國家ニ屬ス豈代表者ヲシテ自由ニ爲サシムルコトヲ得ンヤ故ニ拋棄ノ結果ハ犯罪事件ヲ和解スヘク、有罪ノ証アルモ自由ニ止ムルコトヲ得ヘク、上訴權ヲ豫メ拋棄スルコトヲ得ル等實ニ不當ノ結果ヲ生スヘシ之レ檢事ハ拋棄スルコトヲ得エシテ必ラス遂行シ有罪、無罪ノ二個其一ノミヲ主張スル權力アルノミ

其他被害者ノ告訴ヲ待タサルヘカヲサルモノアリ又或ル法規ニ依リテ一ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ公訴ヲ提起スルコトヲ得サルカ如キ場合アリトス

### 第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

私訴トハ公訴ニ對スル名稱ニシテ犯罪ニ原因シタル民事上ノ訴訟ノ名ナリ元來犯罪ハ公益ヲ

害スルト同時ニ私益ヲ害スルモノナリ例ヘハ竊盜ノ如キ一ハ公益ヲ害シ一ハ私益ヲ害セラルトモ  
ノトス左レハ公益ヲ害セラレタル回復ニハ公訴起リ私益ヲ害セラルトモキハ私訴ヲ起シ以テ回復  
ノ途ヲ講セサルヘカラス

私訴ハ犯罪ニ原因スル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノナリ贓物ノ返還モ損害ノ賠償ノ  
一種ナリ只其現品アルヲ以テ之ヲ名ツクルノミ故ニ私訴ハ常ニ左ノ條件ヲ具備スルモノナラサル  
ヘカラス

一、被害者ニ損害アルコト○例ヘハ故ニ人ノ住居ヲ侵スカ如キ單ニ人ノ侵入スルノミニシテ損害  
ノ生セサルトモキハ私訴ヲ起ス原因ナシ

二、其損害カ犯罪タルヘキ事實ニ原因スルコト○故ニ假令損害ヲ生シタルモ其原因カ犯罪ナラサ  
ルトモキハ私訴ヲ起スコトヲ得ス

三、損害カ回復セラレヘキ性質ヲ有スルモノナルコト○名譽ト雖モ之カ私訴トシテ提起スルコト  
ヲ許ス已ニ刑法附則第五十九條ニ於テ明文アリ

四、損害ノ回復ヲ目的トスルモノナルコト○然ラサレハ目的ヲ達スルコトヲ得ス例ヘハ子カ親ヲ  
殺サントシタルヲ以テ相續權ナキモノナリトシ之ヲ排斥スル訴ヲ爲スカ如キハ此條件ヲ欠キタ  
ルモノナリト云フヘシ

贓物ノ返還ニ付テ一ノ注意ヲ要スヘキハ刑法附則第五十四條ニ依レハ犯人ノ手ニアルトモキハ請求  
ナント雖モ還付スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得ヘキモノナリ故ニ此場合ニ在テハ私訴ヲ提起スルコト  
ノ必要ナキモノトス

私訴ハ何人ニ屬スルヤ本條ニ依レハ被害者ニ屬スト故ニ其犯罪ノ爲メニ害ヲ被ムリタル人ナリト  
ス而シテ民法ニ從フトアルヲ以テ民法上ノ權利ヲ伸張スル手續ヲ知ラシムルカ爲メ之ヲ示シ損害

賠償ノ算定方法、所有權ノ證明等ナリ其檢事ト異ナリ代人ヲ以テ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキカ故ニ被  
害者未成年者ナルトモ、禁治産者ノ如キ、法人タルカ如キ、權利ノ讓受人ノ如キ、被害者ノ債權  
者ノ如キ、委任ヲ受ケタル代理人ノ如キ是ナリ

又私訴ヲ受クル人ハ犯人ハ勿論、民事担当者、白痴瘋癲ノ保管者、贓物占有者、犯人ノ相續人等ナリ  
私訴ニ付テハ大審院判決多シ埋葬費ハ人間一度ハ必ラス免ルヘカラサル費用ナルヲ以テ犯罪ニ因  
リ生シタル損害ナレハ之カ賠償ヲ爲スヘキハ加害者又ハ民事担当者ノ責任ナリ(二十四年五月四  
日)騙取セラレタル地所ヲ取戻スニ際シ其地所カ登記セラレ居ルヲ以テ之カ取消ヲ求ムルハ私訴  
ノ範圍内ニ於テ訴求シ得ヘシ(同年十月十二日)贖金ヲ以テ買得シタル物品ハ贓物ニアラサルヲ  
以テ被害者ニ還付スヘキモノニアラス何トナレハ贓物トハ直接ニ犯罪ニ因テ得タル物品ニシテ其  
贖金ヲ以テ買取リタル物品ノ如キハ其性質一變シタルモノナリ(同年十二月十日)損害金ノ利子

ハ元本ヨリ得ヘカリシ利益ヲ填補セシムルモノナレハ犯罪ノ日ヨリ利子ヲ付スヘキハ當然ナリ(一  
二十五年六月廿七日)贓物犯人ノ手裡ニ存在セサルトモキハ犯人ニ關セ直ニ其贓物ヲ受取リタル  
第三者ニ對シテ返還ノ私訴ヲ提起スルコトヲ得(二十六年一月十九日)告訴ノ爲メ警察署ニ出頭  
シタル日當金ノ如キハ直接損害ナラス私訴トシテ請求スルヲ得ス(同年四月廿四日)名譽ニ對スル  
犯罪ノ場合ニ於テハ其名譽ノ毀損アリタルヲ以テ即チ損害アリトス依テ既ニ名譽ヲ毀損シタルモ  
ノト認メタル以上ハ其匡正ノ方法タル新聞紙廣告ノ當否ヲ判定シ若シ相當ナリトスルトモキハ假令  
其廣告ノ費用額ノ未定ニシテ且未來ニ屬スルモノナルモ賠償ノ義務アルコトヲ言渡サ、ルヘカラ  
ス(二十五年九月廿九日)公訴附帶ノ私訴ニ付テハ刑事訴訟法中特ニ規定アル場合ノ外民事訴訟  
法ノ規定ニ適用スヘキモノニアラス(二十六年五月廿五日)被害者カ第三者ニ對シ抵當登記ノ取  
消ヲ請求スルハ加害者ノ犯罪行為ニ因リ他ニ移轉シタル地所ノ抵當權ヲ取戻スニ外ナラサレハ贓

物ノ返還ヲ請求スルモノト看做サ、ルヘカラス(二十九年三月三十日、三十年二月廿三日)

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴、私訴ノ拋棄ニ因

テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

○明治十五年三月廿二日司法省丙第十一号達  
勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勲有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルヲ得此旨相達候事

夫レ公訴ハ社會刑罰權ノ實行ニ必要欠クヘカラスルモノナリ一個人ノ是非スヘキモノニアラス假令之ヲ行フ職務アル檢察ト雖モ左右スルコトヲ得サルニアリ故ニ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルヘキモノニアラス又告訴私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スヘキモノニアラスト爲スナ原則トス故ニ其結果ハ公訴ハ和解スルコトヲ得ス(一)拋棄スルコトヲ得ス(二)取下クルコトヲ得(三)上訴權ヲ拋棄スルコトヲ得ス(四)上訴ヲ取下ルコトヲ得ス(五)

然レトモ法律ノ規定ニ依リテハ被害者ノ告訴ヲ待タサルヘカラスルモノアリ之下同シク消滅スヘキモノアリ彼ノ刑法上既ニ解シタル脅迫罪(刑三二六以下)幼者ヲ略取誘拐スル罪(刑三四一以下)猥褻姦淫罪(刑三四六以下)有夫姦罪(刑三五三)誹毀ノ罪(刑三五八以下)牛馬以外ノ家畜ヲ殺ス罪(刑四二二)公然人ヲ罵詈嘲弄スル罪(刑四二六)ノ如キハ親告罪ト稱シ被害者若クハ親屬ノ告訴ヲ待テ公訴ヲ起シ又一旦起シタル公訴モ取下ノ場合ニ於テ消滅スヘキモノトス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參加スルコトヲ得

私訴ハ刑事事件ノ原因トスルモノナルヲ以テ刑事ノ公訴ニ附帶シテ爲スヲ以テ例外ト爲セリ

此便益ヲ與フルハ公訴事件ト共ニ審理シ、辯護方法ヲ一ニシ、公訴ノ爲メニ私訴事件ヲ中止スル要ナク、裁判互ニ抵觸スルコトナシ等ノ利益アルヲ以テナリ故ニ公訴ト同一ノ裁判所ニ於テ審判セサルヲ得ス從テ本條ノ如ク金額ノ多寡ニ拘ハラズ同一ノ裁判所ニ於テ管轄セシムルヲ便トス而シテ此便宜ハ第二審ノ判決アルマテ之ヲ許スハ未タ確定セサル以前ナルカ故ニアリトス左レハ第一審ニ付テハ未タ私訴ヲ爲サ、ルモ第二審ニ至リテ初メ私訴ヲ起スモ可ナリ

私訴ハ公訴ニ附帶スルモノナレハ公訴サヘ提起セラル、トキハ之ニ附帶スルコトヲ許スカ故ニ彼ノ豫審ト公判トノ區別ナキナリ蓋シ何レモ公訴ナレハナリ故ニ告訴ヲナシタルモノ第六十五條ノ如ク檢事ヨリ通知アルトキハ豫審又ハ公判ニ私訴ヲ提起スヘシ其豫審ニ提起シタルトキ若シ免訴ト爲リントキハ其私訴ハ根元ヲ失ヒタルヲ以テ更ニ民事ニ訴ヘサルヘカラス之レ止テ得サルノ手續トス

第三者ノ參加ヲ爲スハ民事訴訟法第五十一條以下ノ規定ニ依ルヘキモノナリ其第三者トハ民事原告人及ヒ被告人民事擔當人等ヲ除ク外ノ人々ヲ云フ例ヘハ質屋ノ如キ、受托者ノ如キ類ナリ若シ此項ノ規定ナキトキハ第三者ハ更ニ民事ニ訴ヘサルヲ得サル不便アリテ私訴ヲ許シタル效ナキニ至ルヘシ

大審院判決ニ依レハ私訴ハ第二審判決アルマテ之ヲ申立ツルヲ得ヘキモノナレハ第二審ニ至リ其請求ヲ變更スルヲ得、又私訴ニ付連帶ノ請求ヲ爲スト否トハ民事原告人ノ權内ナリトス故ニ裁判官ハ請求ナキニ加害者數人ニ對シ連帶ノ言渡ヲ爲スヘカラス(二十六年六月八日)私訴ヲ原因トシテ申請スル假差押假處分ノ決定命令等ハ刑事部ニ於テ之ヲ取扱ヒ且其申請ニハ訴訟用印紙ノ貼用ヲ要セス(二十五年七月六日)刑事ノ私訴判決ニ對シ強制執行ヲ爲サントスルトキハ判決正本ニ執行文ノ附記ヲ要ス何トナレハ私訴ハ元來民事ノ訴訟ナルニ之ヲ刑事ニ附帶セシムルハ便宜

ヲ主トシタル例外ニ過キス而シテ此例外ハ判決確定迄ナ限リトシ確定後ノ處分ハ通常民事ノ手續ヲ履行セサルヘカラス且民事訴訟法第五百十六條ノ規定ハ概博ニシテ別ニ除外例ヲ設ケサレハ荷モ民事判決ヲ執行セントセハ其民事裁判ノ判決タルト刑事裁判ノ判決タルトヲ問ハス必ラス之ニ加ラサルヲ得サルモノトス(二十五年十二月十五日法曹會決議)

**第五條** 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ

賠償、返還ヲ要ムル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

**註釋** 夫レ免訴トハ豫審ニ於ケル言渡ニシテ證據十分ナラス公訴ノ消滅ノ原由アルトキニ當ル即チ第六十五條ノ場合ナリ公判ニ在テハ第二百二十四條及ヒ第二百三十六條ノ場合ニ言渡スモノナリ又無罪トハ公判ニノミ言渡スモノニシテ證據十分ナラス又ハ被告事件罪トナラサルトキニアリ何レモ被告人ニ對シテ刑事ノ訴追ヲ棄ツルモノトス抑モ被害者ヨリ贓物ノ返還、損害ノ賠償ハ犯罪ニ基因スルヨリ其被告人カ犯罪者トシテ刑罰ヲ受ケサルトキハ之カ請求シ得可カラサルヤノ疑ヲ生スヘシ然レトモ公訴、私訴ハ各獨立シテ請求シ得ヘキモノナレハ敢テ關係セサレハ何レモ成立セスト云フヘカラス故ニ本條ニ於テ假令公訴ノ事件カ免訴若クハ無罪ト爲ルモ賠償、返還ヲ要ムル妨ケト爲ルコトナシト規定シタリ左レハ裁判官ハ本件公訴ニ付テハ免訴無罪ヲ言渡スニ拘ラズ私訴ハ審理判決ヲ爲サ、ルヘカラス大審院ハ判決シテ曰ク假令公訴ニ對シ無罪ヲ言渡シタル場合ニ於テモ之ニ附帶スル私訴ニ付テハ其事實ヲ審究シテ民事原告人ノ請求スル當否如何ノ理由ヲ付シ裁判ヲ爲サ、ルヘカラス、然ルニ原院カ公訴既ニ無罪ニ歸シタル上ハ之ニ附帶スル私訴ニ付裁判ヲ爲スヘカラストシ私訴ノ本案ニ對シ判決ヲ與ヘサリシハ不法ナリ(二十六年十月十九日)ト夫レ然リ公訴ハ或ハ時効ニ依リ、事實ナキニヨリ、確定判決ヲ受ケタルニ依リ免訴、無罪トナ

ルモ被害者ニ對シテ損害ヲ加ヘタルトキノ如キハ賠償セサルヘカラス又贓物トシテ占有スルモノハ返還セサルヘカラス之レ何レモ民法上ノ原則ニ依リ然ルヘキモノナリ此場合若シ豫審免訴ナリシナラハ被害者ハ更ニ民事裁判所ニ訴ヲ起スニアリ公判ナルトキハ右ノ判例ニ依リ其儘審理判決ヲ受クルニアリトス

**第六條** 公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 被告人ノ死去

第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄

第三 確定判決

第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五 大赦

第六 時効

**註釋** 公訴ノ消滅スル場合ヲ列記シタルモノニシテ檢事ハ公訴ヲ起スヘキモノニアラス若シ一旦公訴提起セシ以上ナレハ裁判官ニ向テ免訴ノ言渡ヲ求ムヘシ若シ裁判官ニシテ裁判言渡ヲ爲シタル後未タ確定セサル場合ナレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ確定後ナレハ非常上告ヲ爲シ以テ免訴ノ言渡ヲ爲サ、ルヘカラス元來訴フヘカラサルモノヲ訴ヘ若クハ訴ヲ進行スヘカラサルモノヲ進行シタルニ依ルヲ以テナリ

第一 死去○犯人死スレハ消滅スルコト之レ刑法ノ原則ナリ其犯罪者死スルトキハ刑罰ヲ加フヘキ人ナケレハナリ然レトモ其人ニ對シテノミ消滅スルモノニシテ他ノ正犯、從犯、教唆者ニ及ハズ例ヘハ二人竊盜ヲ犯シ其内一人死亡スルモ殘ル一人ニ付テハ竊盜罪ヲ科スルニ於テ敢テ差支ナシ只議論ノ常ニ生シタルハ有夫姦罪ニアリ元來同罪ハ二人ニテ成立スルモノナレハ其内一人死亡セハ罪成立セストノ誤解ヨリシテ姦夫姦婦ノ何レカ死亡セハ他ノ一人ニ對シテモ公訴消滅スヘシトノ論ヲ爲スニ至レリ現今ニ至リテハ斯ノ如キ愚論ヲ爲スモノナシ人死スルモ事件消滅セズ故ニ一人死スルモ殘ル一人ニ對シテ罰スルモ敢テ不當ニアラス大審院已ニ判例アリ姦通者ノ一方死亡スト雖殘リ一人ハ爲メニ其罪体及ヒ公訴權消滅セズ乃チ姦通罪ハ二者相須テ一罪ヲ構成スト云フト雖其罪ノ成否ハ必ラスシモ二者ノ同存ヲ要セス(二十五年二月四日)

第二 告訴拋棄○拋棄ハ其告訴セシ人ノミニ對スルコトアラステ事件其モノヲ拋棄スルモノナリ故ニ有夫姦罪ノ如キ妻ニ對シテノミ告訴ヲ拋棄スト云フモ能ハス若シ斯ノ如キ場合アリシナラハ姦夫モ亦拋棄セラレタルモノト爲スニアリ又一旦公訴提起シタル上ハ拋棄ノ效ナシトノ論アルモ大審院ハ誹毀罪ニ付テ判例ヲ示セリ即チ誹毀罪ハ親告罪ナリ故ニ第二審判決後ト雖被害者カ公訴ノ取消願ヲ差出シタルトキハ公訴ハ之ニ因テ己往ニ溯リ消滅スルモノナレハ原判決ハ成立スルコトヲ得ス(二十六年五月八日)又法曹會ニ於テハ下ノ如ク議決シタリ告訴ヲ待テ受理スヘキ事件ニ付告訴ノ拋棄ハ單ニ公訴ノ提起權ヲ消滅セシムルモノナルヤ將タ己ニ實行中ナル公訴權ヲモ消滅セシムルモノナルヤハ已ニ實行中ナル公訴權ヲモ消滅セシムト決セリ蓋シ現行法第六條ハ公訴消滅原因ノ發生ノ公訴提起前ナルト否トニヨリテ或ハ公訴ヲ消滅セシメ或ハ之ヲ消滅セシメサル區別ヲ設ケサレハ解釋上告訴ノ拋棄ハ消滅原因ノ一項ノミヲ以テ公訴ノ提起前ニ限ルモノト爲ステ得ス故ニ其結果ハ(一)公訴ノ判決確定スルマテハ有效ニ告訴ノ拋棄ヲナ

スヲ得其拋棄ハ公訴消滅ノ原因トナル然レトモ公訴ノ判決確定シタル後ニ至リテハ告訴ヲ拋棄スルモ刑ノ消滅原因ト爲ルモノニアラス(二)告訴ノ拋棄アルモ其事件ハ當然消滅スルモノニアラス故ニ告訴ノ拋棄アリタルコト理由トシテ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキモノトス(二十六年四月十四日)又告訴ヲ要スル事件ニ付被害者ヨリ特ニ共犯人中ノ一人ニ對シ告訴ヲ爲シタルトキハ他ノ共犯人ニ對シテモ公訴ヲ起スヲ得何トナレハ告訴ハ被告事件其モノニ付キ效ヲ生シ被害者ノ指名シタル被告人ニ對シテノミ效ヲ生スルモノニ非サレハナリ(二十六年六月八日)

第三 確定判決○一旦確定判決ヲ受ケタルトキハ再ヒ公訴ヲ起スモ其效ナシ格言ニ效力ハ事實ニ勝ルトアリテ確定判決ヲ經タルハ假令事實如何ヲ論セス判決ノ如ク事實ヲ認ムルモノナレハナリ例ヘハ甲者アリテ竊盜犯ナリトノ公訴ヲ受ケ公判ノ末無罪ト爲ルトキハ確定ノ後ハ甲者ハ竊盜犯者ニアラスト爲リ事實竊盜セルモ決シテ再ヒ公訴ヲ受ケルコトナシ但豫審ノ終結ニ付キテハ敢テ規定ナシ豫審終結ノ場合ニ在テハ第六十五條ノ規定アリ且但書アリテ再ヒ公訴ヲ提起シ得ヘキ時期アルカ故ニ本條ニハ列記セサルモノトス

第四 刑ノ廢止○法律ニ因リテノミノ廢止ナルカ彼ノ勅令、省令ニ於テモ亦廢止スルトキモ亦同一タリ蓋シ法律ノ委任ニ因リテ發シタル一ノ命令ナレハ法律ト同一ノ效アルモノトス

第五 大赦○刑罰共ニ消滅セシメタルモノナレハ公訴消滅スヘキハ至當トス若シ裁判確定後ノ大赦ナルトキハ刑罰ヲ消滅セシメ裁判ヲ空無ト爲スモノトス

第六 時効○公訴ノ時効ニ付テノ消滅タリ元ト時効ハ社會ノ遺忘ニシテ年月ノ經過スルニ從テ刑罰ヲ加フル必要ナキニ至ルヘク且ツヤ証據ノ湮滅ヲ來タシ審理十分ナラスト云フヨリシテ消滅セシムルモノナレハ再ヒ之カ提起スル必要ナキニ至ルヘシ

第七條 私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス



第一 拋棄又ハ和解

第二 確定判決

第三 時效

註釋 私訴ノ消滅ニ付テハ其數ノ少ナキハ其性質上ヨリ然ルモノニシテ尙ホ此外ニ普通民事ノ訴權ヲ消滅セシムルト同一ノ消滅原因ニ因リテ消滅スルハ當然トス彼ノ辨濟、相殺、混同ノ如シ

第八條 公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス

第一 違警罪ハ六月

第二 輕罪ハ三年

第三 重罪ハ十年

註釋 已ニ刑法ヲ解釋セシトキ略説明シタルカ如ク凡ソ時效ニハ二種アリ一チ公訴ノ時效ト云ヒ一ハ之ヲ刑ノ期滿免除ト稱シ即チ刑ノ時效ナリ其刑ノ時效ニ付テハ再說セサルモ公訴ノ時效ニ付テハ一定ノ時間ヲ經過スルニ因テ犯罪起訴權ヲ取消スモノナリ已ニ公訴權消滅スルカ故ニ裁判官其事件ニ付キ有罪無罪ヲ判決スル途ヲ失ヒ犯罪人ハ罪ヲ犯セシコトナキト同一ノ身トナル而シテ之ヲ設ケタル理間ハ一定ノ時中ヲ經過シタル爲メニ犯罪ノ記念消滅シ之ヲ罰スルノ必要ナシト云フニ外ナラス然レトモ何カ故ニ長日月ヲ經過スレハ罰スル必要ナキカ蓋シ社會カ犯罪ノ記念ヲ消亡スルノ時期ハ定ムルコト能ハサレトモ推察スルニ世人已ニ犯罪ノ記念ヲ消亡シ犯罪ニ因テ毀損セ

ヲレタル事物モ舊ニ復シ得ヘシト考フル程ノ長キ日月ヲ經過スルニモ拘ラス尙ホ犯罪ヲ罰スヘシトノ原則ヲ墨守スルトキハ犯人ノ刑罰ニ處セラル、ヲ見聞スル世人ハ却テ其モノヲ憫然ニ思ヒ憫隱ノ念ヲ生スヘシ然ルトキハ法ノ必要ヲ感スルヨリモ却テ法アルヲ厭フヘキニ至ル若シ之ニモ關セス刑罰ヲ加フヘシトセハ法ノ威信ヲ失ヒ嫌惡ノ情ヲ發シ意外ノ弊害ヲ生スルヲ保セス是レ犯罪ノ記念ヲ消滅スト推測シタル時間カ到着セハ刑ヲ加フヘカヲサレ理由トシテ公訴權ヲ消滅セシメタル所以ナリ而シテ本條ノ如ク三段トナシ各其時間ニ長短ヲ設ケタルハ其罪ノ輕重ニ依リテ記念消亡ニ長短アリ依テ其罪質ニ依リテ三段ノ區別ヲ爲ス又刑ノ期滿免除ノ如ク細別セサルハ未ダ刑ノ言渡アラサレハ刑名ヲシ故ニ細別スル能ハサルニ至ラン之レ罪名ヲ以テ定メタル所以ナリ尙ホ新聞紙法、出版法、版權法等特別ニ時效ノ設ケアリトス

第九條 私訴ノ時效ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時效ト其期間ナ同クス

註釋 私訴ノ時效モ公訴ノ時效ト同一ナラシメタリ殊ニ被害者カ無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セシテ其訴ヲ爲シタルトキモ亦同一タリ故ニ普通民法ノ如ク無能力者ニ對スル時效中止ノ利益(民法第五百五十八條乃至第六十一條)ヲ得ス又普通民事裁判所ニ出訴シタルトキモ民事ノ時效ニ依ラサルモノトス

以上其理由ハ私訴ヲ民事ノ時效ト同シクスルトキハ公訴消滅シタルニモ拘ラス私訴ヲ起スヲ得テ社會已ニ犯罪者視セサルニ私訴ノ爲メニ犯罪者視セラル、ニ至リ不權衡ヲ生ス之レ本條第一項

○刑事訴訟法 第一編 總則 十三

○明治十四年十二月廿八日第七十三号布告  
治罪法ニ於テ無能力者タル人及日民事擔當人ト稱スル者ハ左之通  
無能力者  
一未下年者  
二衰弱者  
三白痴癡癡人  
四治産ノ禁ヲ

受ケタル者  
法律ニ定メ  
タル代人  
一未丁年者ノ  
父若クハ母  
又ハ親屬後  
見人  
二夫タル者  
三白痴癡人  
ノ保管者  
四治産ノ禁チ  
受ケタル者  
民事擔當人  
一未丁年者ノ  
父若クハ母  
又ハ同居ノ  
親屬ニシテ  
監督ヲ爲ス  
者  
二夫タル者  
三白痴癡人  
ノ保管者  
四屋主  
但シ雇人其  
屋主ノ命シ  
タル事件チ  
行フ時

アル所以ナリ其第二項アルハ已ニ刑ノ言渡アリ犯罪人タルコト確定セル上ハ公訴消滅ノ理由ナシ  
殊ニ民事裁判所ニ出訴スルモノニシテ民事ノ性質ナルヲ以テ民法ト同一ノ時効ニ依ルモ可ナリ  
私訴ニシテ時効ニ罹リシナラハ民事裁判所ニモ出訴スルコト能ハサルヤノ問題アリ否決シテ出訴  
ヲ許サ、ルニアラズ私訴トシテ訴フルトキハ本條第一項ニ依リテ時効ニ罹リタリトノ一言ヲ以テ  
敗訴スヘシト雖モ通常民事ノ犯罪准犯罪チ原因トシテ要償ノ訴チ起スハ決シテ能ハサルコトアテサ  
ルナリ已ニ法曹會ハ二十八年一月十七日、同年四月十八日ニ於テ決議セリ

**第十條** 公訴、私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テ  
ハ其最終ノ日ヨリ起算ス

**註釋** 時効ハ犯罪ノ日ヨリ之ヲ起算スト爲シタルハ公訴權ノ發生ト同一ナラシメタリ若シ起算日チ  
異ナラシメタルハ公訴權發生ノ日モ異ナルヘキモノト爲リ不都合チ生スヘシ故ニ其犯罪ノ日ヨリ  
起算スヘキモノトス之レ被告人ノ利益ノミナラス正當ノ理由ナリトス但書繼續犯罪ハ其最終ノ日  
ヨリ起算スルバ其犯罪ノ性質ヨリ然ルモノトス尙ホ大審院ノ判例多シ左ノチ載ス  
犯罪ノ意思繼續シテ所爲ニ間斷アレハ連續犯ニシテ繼續犯ニアラス(十九年十月十八日) 刑法第  
二百八條ノ犯罪ノ公訴時効ハ其偽造又ハ盜捺ハ何時ニアルモ之ヲ使用シタル時ヨリ起算スルモノ  
トス(二十二年一月十五日) 委託金費消ノ罪ハ其金額ヲ領收シ其目的ヲ遂ケタルトキニ於テ成立  
スルモノニ付其時効モ亦其目的ヲ遂ケタル時ヨリ起算セサルヘカラス(二十四年十月五日) 即  
時犯ハ數年間繼續シテ犯シタルノ故チ以テ之ヲ繼續犯ト混スヘカラス即チ即時犯ノ連續シタル者  
ナレハ之レ連續犯ナリ故ニ繼續犯ノ如ク犯罪最終ノ日チ以テ時効ノ起算点トナスヘキモノニアラ  
スシテ一所爲毎ニ各別ニ其時効ヲ算セサルヘカラス(二十六年一月十六日)

**第十一條** 時効ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過ヲ

中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ  
時効ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公訴ノ手續ヲ止メタル日ヨ  
リ更ニ其期間ヲ起算ス

**註釋** 時効ハ社會ノ遺忘ニ基クモノトセハ未タ其遺忘セサルトキハ時効ニ罹ルコトナキハ明瞭トス  
今起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルトキハ之レ社會公衆カ未タ記念ヲ消亡セサル証ナリ蓋シ社  
會ノ代表者タル檢事ニ於テ公訴ヲ起シ裁判官又規定ニ從テ手續ヲ爲セハナリ敢テ本人ノ其手續ヲ  
爲サレツ、アルヤ否ヤハ問フノ要ナシ之ヲ時効ノ中斷ト云フ一旦時効中斷ヲ爲サハ未タ發覺セサ  
ル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ時効ハ中斷セラル、モノタリ蓋シ事件ニ付時効中斷ヲ爲シ  
人ニ對スルモノニアラサレハ其事件ニ關聯スルモノハ皆包含セラル、ニアリトス故ニ假令ハ初メ  
甲ナルモノチ起訴シタルニ人違ヒニ依リ免訴セラル、モ其事件ハ未タ遺忘セス左レハ未タ發覺セ  
サリシ其犯人乙ナルモノニ對シテハ矢張時効中斷セラレタルモノト云フヘシ免訴ノ言渡ヲ爲スト  
有罪ノ言渡ヲ爲ストチ問ハス豫審ノ手續ヲ爲セハ輒チ時効ノ經過ヲ中斷ス(十九年十月八日大審  
院判決)

時効中斷ハ起訴、豫審、公判ノ手續ヲ止メタルトキハ中斷チモ解キタルニ外ナラサレハ更ニ其止  
メタル日ヨリ時効ヲ起算スルモノトス故ニ中斷前ノ經過セシ日月ニ係ラス更ニ六月、三年、十年  
チ起算スヘキモノトス

**第十二條** 起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル

○明治十四年  
十二月廿八日  
第七十三号布  
告  
治罪法ニ於テ  
無能力者法律  
ニ定メタル代  
人及ヒ民事擔  
當人ト稱スル  
者ハ左ノ通り  
無能力者  
一未丁年者  
二妻タル者  
三白痴癡人  
四治産ノ禁チ  
受ケタル者  
法律ニ定メ  
タル代人  
一未丁年者ノ  
父若クハ母  
又ハ親屬後  
見人  
二夫タル者  
三白痴癡人  
ノ保管者  
四治産ノ禁チ  
受ケタル者  
ノ財産管理  
人  
民事擔當人

トキハ時効ノ經過ヲ中斷スル効ナカル可シ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルトキハ此限ニ在ラズ

- 一未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二夫タル者三白痴瘋癲人ノ保管者
- 四雇主但シ雇人其雇主ノ命ジタル事件ヲ行フ時

起訴、豫審、公判ノ手續ヲ爲サハ時効中斷ヲ爲スヘシト雖、其手續カ規則ニ背キタルトキハ中斷ハ全ク無効トナルヘシ假令ハ重罪事件ハ必ラス豫審ヲ經ヘキモノナルニモ拘ラス直チニ公判ヲ爲スカ如キハ之レ起訴ノ手續規定ニ背キタルモノナリ豫審判事ハ告訴ヲ受クル權ナキニ之ヲ受ケ之ニ着手シタルトキハ之レ豫審手續ニ背キタルモノナリ又被告人ノ呼出ヲモ爲サス公判ヲ開キタルカ如キハ公判ノ手續カ規定ニ背キタルモノナリ只手續カ規定ニ背キタリシモ時効中斷ノ防禦トナラサルハ一ニ管轄違ノミ蓋シ裁判管轄ハ初メヨリ判然タラサルコトアリ若シモ管轄ヲモ中斷ノ効ナシトセハ起訴ヲ躊躇シ爲メニ却テ僥倖ヲ得セシムルノ恐レアリ故ニ例外トス

第十三條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告

訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ

民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

犯罪ノ發覺ニ必ラス告訴告發ニ限ルニアラサルモ多クハ是等ノ手續ヨリ發覺スルモノトス而シテ告訴ハ被害者之ヲ爲シ告發ハ何人ニテモ之ヲ爲シ得ヘキコトハ第四十九條以下ニ之ヲ規定ス民事原告人トハ被害者カ私訴ヲ爲ス場合ニ訴訟關係ノ人ト爲ルヲ云フ何レモ被告人ノ方ヨリ觀察セハ實ニ不利益ナル人々タリ其告訴告發又ハ民事原告人ト爲リシ人々ニ於テ被告人ヲ罪ニ陷シ又ハ十分調査セハ決シテ其被告人ニアラサルニモ拘ラス輕卒ニ其人ヲ指シテ被告人ト爲スカ如キコトアリテハ其被告人ト爲リシ人ハ實ニ迷惑ナリト云ハサルヘカラス此場合ニ於テ此人ハ其告訴人告發人又ハ民事原告人ニ對シテ損害ノ償ヲ要ムル權ヲ有セシムヘシ蓋シ當然ニシテ人ニ害ヲ加ヘタルモノナレハ之ヲ償ハサルヘカラスハ民法上ノ原則タリ本條第一項惡意トアルハ認告ノ如キ人ノ罪ナキヲ知リナカラ罪アリト告グルモノナリ重過失トハ恰モ惡意ニ近キモノニシテ何人モ調査セハ其人ニアラサルヲ知リ得ヘキニ拘ラス輕忽ニ其人ナリト告グルモノナリ以上無罪免訴ノ言渡ヲ受ケタルトキナレトモ假令刑ノ言渡ヲ受クルモ爲メニ過實ノ申立ヲナシ刑ノ重キトキニモ亦同一タリ例ヘハ兇器ヲ持セザリシニ彼レハ刃ヲ持チ居リクワリト云フカ如ク持セザリシ刑ヨリ持シタル刑ハ何レモ重シ之レ實ニ過クルノ申立テナレハナリ

民事原告人ニ付テハ尙ホ第三項ノ如キ責任アルモノトス蓋シ上訴ヲ爲スハ十分熟考シテ爲スヘキハ至當ナルニモ拘ハラス輕卒ニ上訴ヲナシテ敗訴ヲナスカ如キハ之レ權利ノ濫用ナリ正當ノ途ヲ盡シタルモノニアラス殊ニ注意ヲ要スヘキハ「損害ノ償」タリ或ハ之ヲ上訴ト比シテ訴訟費用ト誤解スル人アラン此場合ニ於ケル損害賠償トハ決シテ訴訟費用ニアラス前項等ト同シク故ナク獄内ニ呻吟シ爲メニ損害ヲ受クルモノヲ償ハシムルコトアリ而シテ本項ノ場合ハ唯一ノ例アリ公判ノ場合ニ於テ民事原告人ハ裁判官ヲ忌避シタリシニ裁判所ハ不當ナリトシテ却下ノ決定ヲ與ヘタリシ

ニモ拘ラズ民事原告人ハ更ニ上訴ナシメ爲メ第四十三條ニ從ヒ辨論ヲ中止スルコト、爲リシ從テ公判ノ辨論ニモ影響シ同シク中止ヲ爲ス爲メニ被告人ハ未決拘留ヲ爲サル、ニ至レリ然ルニ後日民事原告人ノ上訴ハ不當ト爲リ棄却セラル、トキニ生シタル問題ナリトス此場合ハ被告人ハ故ナク上訴ナシ公判ハ中止セラレ未決拘留ヲ長ク爲ス之レ損害タリ

本項ノ場合ハ惡意又ハ重過失ノ文字ナキヲ以テ必要ナラサルヤノ感ナキニアラス然レトモ第一項之ヲ示シテ他ハ略シタルモノナリ故ニ此場合ニ於テモ民事原告人ニ惡意又ハ重過失ノアルコトヲ必要トスルモノナリ

以上何レノ要償ヲ爲ス場合ト雖モ被告人ハ本案ノ判決マテ豫メ申立テ置キ本案ト共ニ判決ヲ受クル便宜ヲ與フ之レ事實審理スルニ於テ却テ便利ナレハナリ

第十四條

被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

前條已ニ示シタルカ如ク他人ニ損害ヲ加ヘタルモノハ之カ償ヲ爲サ、ルヘカラサルハ原則タリ本條ハ其例外ヲ示ス蓋シ列記ノ官吏ニ對シテモ矢張損害ノ訴ヲ爲シ得ヘシトスルトキハ其職務ヲ斷行シ安心シテ職ヲ執ルコトナキニ至ルヘシ故ニ顧慮スルコトナク職務ヲ全タカテシムルモノトス然レトモ其官吏ニシテ故意ニ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シ例ヘハ收賄シテ事件ヲ曲クルカ如キ所爲アルトキハ格別トス

本條ノ法理ヨリシテ第五十二條ノ如キ告發義務ヲ有スル官吏ニ在テ告發シタル場合ニ在テモ本條ニ準シテ要償ノ訴ヲ受ケサルモノト知ルヘシ

第十五條

此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラス但時効ノ期間ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

時ヲ以テスル條項ハ第六十八條、第六十九條、第五百十三條、第六十條、第六十二條、第一百十五條、第九十條、第二百十七條等ナリトス而シテ其時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇即チ通例、臨時、全國一般、地方一般等ノ休暇ナルトキハ期間ニ算入スヘカラス其休暇トハ尙ホ明治六年第二號布告ノ所謂一月一日ヨリ三日迄及ヒ十二月廿九日ヨリ三十一日マテモ之ニ相當ス(二十九年七月四日法曹會決議)

第十六條

此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

海陸路一日ニ付八里ト爲シタルハ步行里程ニ於テ至當ナリトス其三里以上ナルトキモ一日ト

爲スハ是亦至當ニシテ三里未滿ハ別ニ猶豫日時ヲ付與セス島嶼又ハ外國ハ其猶豫時期ヲ豫定スルコト能ハス風波ノ患ヒト航海ノ定期トニ依レリ故ニ裁判所ニ於テ附加期間ヲ定メ以テ猶豫ス

**第十七條** 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シタルトキハ

特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

**註釋** 特別ノ場合即チ第二百四十七條、第二百七條、第七十三條ノ如キハ之ヲ除キ他ハ法定期間ヲ經過セハ失權ルルモノトス然ラサレハ期間ヲ定メタル效ナキニ至ルヘシ期間トハ抗告、控訴、上告等ノ期間ヲ云フ其日ニ數アルヲ示ス期日ノ如キ一アルトキト區別アリ

**第十八條** 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定

メ裁判所ニ届出ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

**註釋** 訴訟關係人トハ被告人、民事原告人、民事擔當人、代人ヲ許スヘキ事件ニ於ケル被告人ノ代理等ヲ包含ス尤トモ檢事モ訴訟關係人ノ一人ナルモ本條ノ必要ナシ

大審院ハ假住所無届ノ民事原告人ハ呼出狀ヲ發セス直チニ欠席判決ヲ爲スト判決セリ(廿九年四月十八日)然レトモ第一回ハ止ヲ得ス、遠隔地へ送達シ又ハ先方ノ地方ニアル裁判所へ囑托スヘキモ次回ヨリハ本條ノ規定ニ從フヘキモノトス

**第十九條** 書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

○明治十四年十二月五日司法省通第十六号

大審院、裁判所、警廳、府縣、治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ押印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相違候事

**註釋** 準用スト云フモ民事訴訟法第三百十八條第一項ハ準用スルコトナシ蓋シ刑事上被告人ヲ代理スルコトナシ但罰金料ニ當ルヘキモノニ付テハ代人出頭ヲ許スヘキハ勿論トス  
在監人へ送達スル手續ハ第八十四條ノ場合ヲ除ク外本條ニ依リ民訴第四百十條ノ規定ヲ準用スルハ至當トス

**第二十條** 官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ官吏、公吏ノ面前ニ於テ作りタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

**註釋** 官吏ノ作ルヘキ書類ノ調製方法ヲ規定シタルモノニシテ印ヲ用ユルハ資格認證ノ用ニ供シ年月日及ヒ場所ヲ記載スルハ在職中ナルコト時效中斷セシヤ否ヤノコト上訴セシトキ期間内ナルヤ否ヤノコト當時ノ場所ハ何レナルヤ否ヤヲ証明スルカ爲メナリ契印ヲ爲スハ後日ノ分割ヲ防キ前後變更ヲ爲サシメサルニアリ

本條ノ規定ニ背キタル書類ハ其效力ナキヲ明記シタルハ假令其瑕瑾アル一部分ニ止ルト雖モ全

全部之カ爲ニ無効ト爲スニアリ又第二項ニハ無効ノ明文ナシト雖當然反古紙ナレハ明記ヲ要セス  
 大審院ノ判例ニ依レハ判決原本ニ判事ノ署名捺印アルモ官印ノ押捺及ヒ書記ノ署名捺印ナキトキ  
 ハ法律違背タリ(二十五年十月廿日) 契印ナキ豫審調書ヲ斷罪ノ証憑ニ供シタルハ本條ノ規定ニ  
 背キタル不法ノ裁判ナリ(二十六年四月廿四日) 官署ノ印ヲ押捺セス又之ヲ用ユルヲ能ハサル事  
 由ヲ記載セサル調書ハ無効ナリ(二十六年六月五日) 盜難聞届書ハ本法ノ命シテ作ラシムル文書  
 ニアラサレハ其文書ニ官署ノ印ナキモ之ヲ無効ト論スルヲ得ス故ニ之ヲ証憑ト爲スモ不法ノ判決  
 ナリト云フヲ得ス(同年十一月十六日) 合議裁判所ノ判決原本每葉ノ契印等ハ其判決ニ干與シタル  
 判事ノ一人ノ印ヲ以テスレハ法律ニ背カス(同年十一月三十日) 本條ノ規定ハ本法ニ從ヒ作製  
 スル書類ニ適用スヘキモノニシテ夫ノ既決犯罪表ノ如キ書類ニ適用スヘキモノニアラス左レハ良  
 シ該表ニ官印ノ押捺ナキモ無効トナスヲ得ス(二十七年一月十八日) 官吏ノ作ルヘキ書類ハ官吏  
 自ラ署名捺印シ每葉ニ契印スヘシトノ規定アルモ其捺印契印ハ官印ヲ用ユヘシト規定アルニアラ  
 ス故ニ各豫審調書ニ書記某ト記載シ認印ヲ押捺シ其認印ヲ以テ契印ヲ爲シタルハ毫モ不法ニアラ  
 ス(二十七年二月十二日) 捺印ハ所謂印ノ一ナリ故ニ別ニ捺印スル能ハサル理由ヲ付記スル手續  
 ヲ要セス(同年十一月六日)

**第二十一條** 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本  
 ナ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入、削除及ヒ欄外ノ記入アルト  
 キハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其  
 數ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ效ナカル可シ

**第二十二條** 此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス  
 頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

**第二十三條** 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコ  
 トヲ得ス

**第二十四條** 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定  
 ニ從フ

○明治十八年五月廿九日法律第...  
 第一條 陸軍...  
 第二條 海軍...  
 第三條 陸軍...  
 第四條 海軍...  
 第五條 陸軍...  
 第六條 海軍...  
 第七條 陸軍...  
 第八條 海軍...  
 第九條 陸軍...  
 第十條 海軍...  
 第十一條 陸軍...  
 第十二條 海軍...  
 第十三條 陸軍...  
 第十四條 海軍...  
 第十五條 陸軍...  
 第十六條 海軍...  
 第十七條 陸軍...  
 第十八條 海軍...  
 第十九條 陸軍...  
 第二十條 海軍...  
 第二十一條 陸軍...  
 第二十二條 海軍...  
 第二十三條 陸軍...  
 第二十四條 海軍...  
 第二十五條 陸軍...  
 第二十六條 海軍...  
 第二十七條 陸軍...  
 第二十八條 海軍...  
 第二十九條 陸軍...  
 第三十條 海軍...  
 第三十一條 陸軍...  
 第三十二條 海軍...  
 第三十三條 陸軍...  
 第三十四條 海軍...  
 第三十五條 陸軍...  
 第三十六條 海軍...  
 第三十七條 陸軍...  
 第三十八條 海軍...  
 第三十九條 陸軍...  
 第四十條 海軍...  
 第四十一條 陸軍...  
 第四十二條 海軍...  
 第四十三條 陸軍...  
 第四十四條 海軍...  
 第四十五條 陸軍...  
 第四十六條 海軍...  
 第四十七條 陸軍...  
 第四十八條 海軍...  
 第四十九條 陸軍...  
 第五十條 海軍...  
 第五十一條 陸軍...  
 第五十二條 海軍...  
 第五十三條 陸軍...  
 第五十四條 海軍...  
 第五十五條 陸軍...  
 第五十六條 海軍...  
 第五十七條 陸軍...  
 第五十八條 海軍...  
 第五十九條 陸軍...  
 第六十條 海軍...  
 第六十一條 陸軍...  
 第六十二條 海軍...  
 第六十三條 陸軍...  
 第六十四條 海軍...  
 第六十五條 陸軍...  
 第六十六條 海軍...  
 第六十七條 陸軍...  
 第六十八條 海軍...  
 第六十九條 陸軍...  
 第七十條 海軍...  
 第七十一條 陸軍...  
 第七十二條 海軍...  
 第七十三條 陸軍...  
 第七十四條 海軍...  
 第七十五條 陸軍...  
 第七十六條 海軍...  
 第七十七條 陸軍...  
 第七十八條 海軍...  
 第七十九條 陸軍...  
 第八十條 海軍...  
 第八十一條 陸軍...  
 第八十二條 海軍...  
 第八十三條 陸軍...  
 第八十四條 海軍...  
 第八十五條 陸軍...  
 第八十六條 海軍...  
 第八十七條 陸軍...  
 第八十八條 海軍...  
 第八十九條 陸軍...  
 第九十條 海軍...  
 第九十一條 陸軍...  
 第九十二條 海軍...  
 第九十三條 陸軍...  
 第九十四條 海軍...  
 第九十五條 陸軍...  
 第九十六條 海軍...  
 第九十七條 陸軍...  
 第九十八條 海軍...  
 第九十九條 陸軍...  
 第一百條 海軍...

### 第二編 裁判所

#### 第一章 裁判所ノ管轄

裁判所ノ管轄ヲ區別スルトキハ左ノ如シ

- 第一 法定ノ管轄
- 第二 管轄ノ指定
- 第三 管轄ノ移轉

是ナリ其法定ノ管轄ハ之ヲ小別セハ事物ニ因ルモノト身分ニ依ルモノト土地ニ因ルモノトノ三アリ其事物ニ因ルハ裁判所構成法之ヲ規定シ同法第十六條、第二十七條、第三十七條、第五十條ノ如シ其身分ニ因ル場合モ亦構成法第五十條ニ規定ス其土地ニ因ル管轄ハ第二十六條之ヲ規定シタリ

管轄ノ指定ハ第三十一條乃至第三十三條ニ管轄ノ移轉ハ第三十四條乃至第三十八條ニ之ヲ規定スルモノトス

#### 第二十五條 犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

犯罪ノ種類即チ事物ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ニ之ヲ規定スヘシ之レ權限ニ屬スルモノナレハ手續法ニ規定スヘキモノニアラサレハナリ其人ノ身分ニ屬スル管轄モ亦構成法之ヲ規定ス即チ第五十條第二號ノ如シ

裁判所構成法  
中  
第十六條 區  
裁判所ハ刑  
事ニ於テ左  
ノ事項ニ付  
裁判權ヲ有  
ス  
第一 遺囑  
第二 本刑  
五十圓以  
下ノ罰金

ナ附加シ  
若ハ附加  
セサルニ  
月以下ノ  
禁錮又ハ  
單ニ百圓  
以下ノ罰  
金ニ該ル  
輕罪  
第三 刑法  
第二編第  
一章ヲ除  
キ其他ノ  
輕罪ニシ  
テ本刑ニ  
百圓以下  
ノ罰金ヲ  
附加シ若  
ハ附加セ  
サルニ二  
年以下ノ  
禁錮又ハ  
單ニ百圓  
以下ノ罰  
金ニ該リ  
其情第二  
ニ掲ケタ  
ル刑ヨリ  
更ニ重キ  
刑ニ處ス

數罪俱發ノ場合ハ其上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス尤トモ何レモ第一審裁判所トシテ管轄スルニ限ラサルヘカラス蓋シ便益ト被告人ノ利益トヲ謀リタルニ外ナラス若シ何レモ同等ナル裁判所ノ管轄ナルトキハ次條ノ如ク管轄ス

本項ノ場合ニ於テ若シ下級裁判所カ一ノ事件ヲ管轄セシトキハ如何スヘキヤ此場合ハ下級裁判所ハ管轄違ノ裁判言渡ヲナシ上級裁判所ニ併セテ管轄スヘキヲ至當トス

裁判所構成法ニモ規定セス又本法ニモ規定セサル例外ノ裁判管轄アリ即チ小笠原島伊豆七島ノ刑事事件ハ島吏之ヲ取扱フ刑事訴訟手續ハ便宜ニ爲ス(裁判所構成法施行條例第十二條)樺戶、空知、釧路ノ各集治監ノ囚人並ニ假出獄免幽閉者等ノ輕罪以下ノ犯罪ハ各其司獄官吏裁判シ治罪手續ハ適宜取計フヘシ(明治十五年第十六號、第四十一號、十八年第四十二號布告)地方裁判所甲號支部ハ重罪公判ヲ除ク外ノ裁判權ニ屬スル事務乙號支部ハ豫審ヲ要スルモノヲ除ク外ノ裁判權ニ屬スル刑事第一審ノ事務ヲ取扱フ(二十三年司法省令第三號)併シ大審院ニ於テハ地方裁判所ノ本部ハ互ニ獨立シテ裁判管轄ヲ有スルモノニアラス故ニ或ル事件カ其本部タル地方裁判所ノ管轄ニ屬スル以上ハ其支部ハ假令第三號ノ省令アルモ之ニ對シ法律上管轄違ノ判決ヲ爲スヘキモノニアラスト判例ス(二十八年五月廿日)

#### 第二十六條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ

以テ豫審ヒ及公判ノ管轄ナリトス

一人ノ犯罪者カ數個ノ犯罪ヲ爲シ其管轄各異ナルキニ其犯罪ヲ管轄スル裁判所カ同等ナルキ例ヘハ大阪市内ニテ屋外竊盜ヲナシ又京都市内ニテモ屋外竊盜ヲ爲シタルキノ如シ此場合ハ二個ノ管轄ヲ有ス即チ犯罪ノ地(一)被告人所在ノ地(二)ノ裁判所ヲ以テ管轄トス故ニ例示ノ場合ニ於テ大阪區裁判所京都區裁判所各之カ管轄地ナリトス而シテ其理由ハ第一ノ場合ハ證據ヲ蒐集

ルコトヲ  
要セスト  
裁判所若  
ハ其支部  
ノ檢事局  
ヨリ區裁  
判所ニ移  
付シタル  
モノ

同上  
第廿七條 地  
方裁判所ハ  
刑事訴訟法  
ニ於テ左ノ  
事項ニ付裁  
判權ヲ有ス  
第一 第一  
審トシテ

第一 第一  
審トシテ  
第二 第二  
審トシテ  
(イ)區裁  
判所ノ  
判決ニ  
對スル  
抗訴  
決定及  
命令ニ  
對スル  
法律ニ  
定メテ  
抗告

同上  
第三十七條  
扣院ハ左  
ノ事項ニ付  
裁判權ヲ有  
ス  
第一 地方  
裁判所ノ  
第一審判  
決ニ對ス  
ル抗訴  
第二 區裁  
判所ノ判  
決ニ對ス  
ル扣院ニ  
付爲シタル  
地方裁判  
所ノ判決  
決ニ對ス

第二十七條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ、其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

スル上ニ於テ便利トス第二ノ場合ハ本人アルヲ以テ審理ノ都合アリ併シ被告人所在ノ地ハ法律ノ精神ニ於テハ一時通過ノ地ノ如キハ事ノ便宜ヲ計ル点ヨリシテ包含セサルコトモ今日實際ノ取扱ハ假令一時通過ノ土地ト雖逮捕シタルトキハ其地ノ裁判所之ヲ管轄スルモノトス但戸籍アル地ノミカ所在地ナリト誤解スヘカラス大審院ニ於テモ本條ノ被告人所在地トハ被告人ノ現在スル所ノ地ヲ云フモノニシテ其本籍地ト雖被告人現在セサルトキハ所在地ト云フヲ得ス(二十五年二月四日)ト判決シタリ

以上ノ場合二個ノ裁判所ノ管轄ヲ有スルコト付キ若シ事件カ繫屬シタルトキハ次條ノ如ク其管轄ヲ定メ若シ別々ニ公訴起ルトキハ各別ニ裁判シ得ヘク又假令二罪以上共ニ公訴起ルトキハ其内ノ一罪ニ付キ管轄違テ言渡シ殘ル罪ニ付キ刑ヲ言渡スコトヲモ爲シ得ヘキモノトス

第二十七條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ、其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

註釋 犯者其地ヲ去リ、數罪俱發ノ片、繼續犯ノトキ等何レモ數箇ノ裁判所ノ管轄ニ跨カルモノナリ此場合ニ在テハ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ管轄ナリトス之レ其先キニ著手シタル裁判所ハ事實ヲ知ルノ詳細ニシテ且速カニ結了スル望アルカ故ナリ

第二十八條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從

犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

註釋 以上ノ條々ハ皆一人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ豫想シタリシカ本條ハ數人共謀シテ一罪ヲ犯シタルトキナ想像セリ

從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄スルハ事實發見ニ便ニシテ裁判ノ抵觸ヲ防ク便宜アルヲ以テナリ其正犯數名アリテ各地ニ散在セルトキハ第二十七條ノ原則ニ依リテ管轄ヲ定ム若シ其中ノ正犯既ニ裁判ヲ受ケタル後ナルトキハ第二十六條ノ原則ニ從テ裁判管轄ヲ定ムヘキモノトス

以上ノ管轄ハ皇族ノ犯罪ニ付テハ例外アリ即チ正從犯ヲ問ハス身分如何ヲ論セス皆大審院之ヲ管轄ス蓋シ皇族タル身分ノ爲メニ特別管轄アリ事實發見、判決抵觸等ノ故ヲ以テ常人ト雖大審院ニ於テ管轄セシムルモノトス

大審院ニ於テハ數人共犯ノ場合ニ於テ其共犯者ハ同一裁判所ニ集合シテ審判スヘキモノニシテ之ヲ分離スヘキモノニアラスト判決セリ(二十七年十月十六日)

第二十九條 外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリ

トス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

註釋 關席判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最後ノ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

註釋 外國トハ清國及ヒ朝鮮國ハ之ヲ除キタリ蓋シ二ヶ國ハ領事裁判權ヲ有スルモノナレハ各駐在



第三 地方  
裁判所ノ  
決定及命  
令ニ對ス  
ル法律ニ  
定メタル  
抗告  
同上  
第五十條 大  
審院ハ左ノ  
事項ニ付裁  
判權ヲ有ス  
第一 終審ト  
シテ

ノ領事ハ各管轄裁判權ヲ有スルヲ以テ清國並朝鮮國駐在領事裁判規則(二十一年十月勅令第七十  
一號)ニ依リテ各裁判スルカ故ニ例外アリ其二ヶ國ヲ除キタル以外ノ外國ニ於テ罪ヲ犯シタルモ  
ノハ管轄ノ裁判所ナシト云フヘン故ニ先ツ被告人ノ逮捕シタル地ヲ以テ裁判管轄ス例ヘハ長崎港  
ニテ捕ヘタルトキハ長崎ノ裁判所之ヲ管轄スルカ如シ若シ又外國ヨリ送致テ受ケタルトキハ其送  
致ノ裁判所其管轄ナリトス  
欠席裁判ヲ爲スヘキ場合ハ被告人逮捕セス又送致ナシ故ニ日本ニ於ケル最終ノ住所ノ地ヲ以テ裁  
判所管轄セリ何レモ便宜ヲ主トシテ規定ス

**第三十條** 海船内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁  
判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
陸上ニ於ケル犯罪ニアラス船内ノ犯罪ニ付テハ船ノ着シタル地ノ裁判所ヲ以テ管轄ス蓋シ船  
内ノ犯罪ハ船長カ司法警察官ノ職務ヲ執ルコトヲ得ルヲ以テ現行犯ナレハ假豫審ヲ爲シ非現行犯  
ナレハ捜査ヲ爲シ定繫港ニアレハ其港ノ檢事、航海中ナレハ最初着港シタル地ノ檢事ニ其事件ヲ  
送付シ管轄セシムルヲ便宜ナリトスルヲ以テナリ

**第三十一條** 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判  
所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ  
法律ニ依リテ各裁判管轄ヲ規定シタルト雖モ其裁判所カ管轄スルコトヲ得サル場合アリ又管  
轄裁判所ハ甲ナリヤ乙ナリヤ判明セサル場合アルヘシ此トキニ於テハ管轄ヲ指定スル必要アリト  
ス其場合及ヒ決定ヲ爲ス方法ハ裁判所構成法第十條ノ如シ同條ニ依リテ之ヲ詳悉スヘシ

(ロ) 拒訴  
院ノ決  
定及命  
令ニ對  
スル法  
律ニ定  
メタル  
抗告  
第二 第一  
審ニシテ  
豫審トシ  
テ  
刑罰第二  
編第一章  
及第二章  
ニ掲ケタ  
ル重罪并  
ニ皇族ノ  
罪ニシテ  
禁錮又ハ  
更ニ重キ  
刑ニ處ス  
ヘキモノ  
ノ豫審及  
裁判

**第三十二條** 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ  
爲スコトヲ得  
大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ  
命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得  
管轄指定ノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス元ト訴訟關係人トハ民事原告人ヲ包含ス  
ルモノナレトモ本條ニ於テハ包含セシメスシテ解スルヲ妥當ナリトス蓋シ本條ハ公訴ノ裁判管轄  
ヲ定ムル手續ニシテ原告人ハ公訴ニ付テハ容喙スヘキ權利ナキモノナレハ公訴管轄未ダ定マラサ  
ルトキハ私訴スルコトヲ得ス此場合ハ民事裁判所ヘ出訴セハ可ナリ私訴ニ付テ管轄裁判所ノ指定  
ノ規定ナキカ故ニ本條ノ申請ハ民事原告人之ヲ爲スコトヲ許サ、ルモノト解スヘシ  
第二項ハ早ク有效ノ判決ヲ受ケシムル手段ヲ採リタル結果トス

**第三十三條** 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付キ管  
轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ  
裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ  
申請手續ヲ規定シ併セテ決定ノ手續ヲ定ム其管轄權ヲ有スル裁判所トハ裁判所構成法第十條  
ノ所謂接近上級裁判所ヲ云フ例ヘハ大阪區裁判所ト堺區裁判所トノ管轄爭アレハ大阪地方裁判所  
ヲ云ヒ大阪地方裁判所ト京都地方裁判所トノ爭ナレハ大阪控訴院ヲ指シ岐阜地方裁判所ト大津地  
方裁判所トノ爭ナレハ大審院ヲ云フカ如シ

**第三十四條** 犯罪ノ性質、被告人ノ身分員數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

註釋 公安ノ爲メニ事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヘキ場合ニシテ其事情ハ犯罪ノ性質即チ國事犯又ハ兇徒集聚ノ如キ又ハ犯罪人カ地方ノ有力者又ハ大博徒ノ如キ黨類若クハ人民一般ノ奮激ヲ來タシ裁判所ヲ襲撃シ裁判官ヲ脅迫スル等ノ恐レアルトキハ兵力ヲ以テ鎮壓スル規定アルモ決シテ事ノ宜シキヲ得テ却テ無關係ナル裁判所ニ移スヲ以テ地方公安ノ爲メニ必要ナリトス之レ特例アル所以ナリ

**第三十五條** 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

**大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク其申請ヲ決定スヘシ**  
註釋 申請方法ヲ規定ス而シテ申請ハ人民ヨリ之ヲ許サス蓋シ人民ノ爲メニ爲スモノニアラスシテ公安維持ノ爲メニスルモノナレハ檢事總長之カ申請人トナルニアリトス從テ大審院モ訴訟關係人ノ申立ヲ聞クヘキ必要ナケレハナリ

**第三十六條** 被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判

所ニ移スコトヲ得

註釋 本條ハ嫌疑ノ爲メニ事件ヲ移ス場合ナリトス凡ソ判事ニ嫌疑アリテ裁判ノ公平ヲ欠ク恐レアルトキハ第四十條以下ノ如ク忌避セハ可ナルカ如シ然レトモ本條ハ判事全員ヲ忌避スヘキ場合ニシテ若シモ忌避ノ申請ヲ爲シテ正當トナルトキハ結局管轄指定ノ申請ヲ爲スニ至ルヘシ此手數ヲ省キ直チニ本條ノ手續ヲ以テ他裁判所ニ移スヲ以テ簡便ナリトシ特例ヲ設ケタル所以ナリ

**第三十七條** 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

**民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ爲シ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス**  
註釋 前々條ノ場合ト異ナリ人民ノ爲メニ爲スモノナレハ檢事總長ハ干與セス檢事其他關係人ヨリ申請セシムルニアリトス

民事原告人ハ一旦私訴ヲ爲シタルトキハ之レ其裁判所ヲ信用セシモノナリ不公平ナキヲ証スルニ足ルヲ以テ第一項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス其被告人ニ於テ異議ノ申立ヲ爲サス辯論セシトキモ亦同シク偏頗ノ所爲ナキモノト信シタルヲ以テ是亦前同様申請ヲ許サス然レトモ上告裁判所ヨリ事件ヲ破毀シテ移シタル裁判所ナルトキハ民事原告人ハ此申請ヲ爲スコトヲ得ヘキハ論ヲ俟タス蓋シ原告人自ラ私訴ヲ提起シタルニアラサレハナリ

**第三十八條** 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達

アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條 前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其

申請ヲ決定ス可シ

申請手續ヲ規定シタリ

### 第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避回避

裁判所ノ職員トハ判事及ヒ裁判所書記ヲ云フ但檢事モ亦裁判所ノ職員ニハ相違ナキモ

本章ニ與ラサルハ裁判ヲ爲ス人ニアラス原告ノ地位ニ立ツ人ナレハ自ラ被告人ニ對シテ有

罪ノ論告ヲ爲ス不利益ニ對スル人ナリ被告人ヨリ云ヘハ公平ナル偏頗ナキ人ナリト云フテ

得ス隨テ假令公平ノ心ナク偏頗ナリトスルモ裁判官ヨリ公平無私ヲ以テ裁判スルカ故ニ被

告人ハ満足スルコトヲ得故ニ假令檢事ニ云々アルモ決シテ之ヲ斥クルノ必要ナシ之レ本章

ニハ檢事ヲ包含セサルコトヲ知ルヘシ

除斥トハ法律上裁判ヲ爲ス能力ヲ奪フモノニシテ絶對的ナリ即チ裁判權ヲ制禁セラレタル

モノト云フヘシ

忌避トハ訴訟關係人ヨリ其人カ事件ニ干與スルコトヲ拒絶スルモノニシテ相對的殊ニ他動

的ナリ

回避トハ職員自ラ其事件ニ干與スルコトヲ辭スルニアリ相對的ナレトモ自動ナリ何レモ其

性質原因ニ於テ同シカラサルモ其人カ事件ニ關係セサル點ハ同一ナリト知ルヘシ

第四十條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セララル可

第一 判事被害者ナルトキ

第二 判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬

ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ

被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ

前審ニ干與シタルトキ

本條列記ノ各號ハ何レモ私情ヲ挾ミ犯人ヲ嚴罰ニ處シ又ハ之ニ好意ヲ表シ不知不識ノ間ニ公

平ヲ欠クコトアルヲ以テ法律ハ之ヲ斥ケタリ其判事其人ニシテ斯ノ如キ私意ナシトスルモ世人

ノ嫌疑ハ免ルヘカラス

大審院判例ハ前ニ豫審又ハ公判ニ干與シタル裁判官カ其事件ノ欠席裁判ニ對スル故障ノ裁判ニ干

與スルハ法律ノ禁スル所ニアラス(二十一年二月廿三日)豫審判事ノ職務執行ヲ妨害シタル事件

ニ付テハ其豫審判事ハ被害者ナレハ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル、モノトス(二十五年一月廿一

日)豫審ノ一部ヲ爲シタルモ其終結ヲ爲サ、ル判事ハ公判ニ參與スルモ妨ケナシ(二十六年一月

十九日)第一審判決ニ干與シタル判事、第二審裁判所ノ囑托ヲ受ケ証人訊問ヲ爲シタルハ違法ナリ(同年八月廿一日)等アリトス

**第四十一條** 判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレ、場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情况アル場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

**註釋** 忌避ヲ爲スヘキ場合ハ第四十條列記ノ外尙ホ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ルヘキ情况アルトキニアリ而シテ第二ノ場合ハ裁判官ノ判定如何ニアリトス例ヘハ判事ノ妾ノ如キ朋友故舊ノ如キ類ナリ

**第四十二條** 忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

**註釋** 忌避ノ申請及ヒ裁判手續ヲ定ム其手續ハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ニ列記アリ而シテ其第二十四條ニ於テハ忌避スヘキ時期ヲ定メ第三十五條ハ申請方法ヲ第三十六條ハ裁判方法ヲ第三十七條ハ判事ノ意見ヲ聞ク手續ヲ第三十八條ハ抗告手續ヲ規定スルニアリ

**第四十三條** 忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

**註釋** 忌避ノ申請アルトキハ公判ノ手續ハ之ヲ中止スヘシ豫審手續ハ急速ヲ要スルモノハ成ルヘク進行セシム蓋シ公判ト異ナリ證據蒐集ニアレハ一日後ル、トキハ一日ノ害ヲ増スヘシ故ニ中止セサルヲ以テ原則ト爲シタリ

**第四十四條** 判事自カラ第四十條ニ定メタル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲スコシ其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ

**註釋** 本條ハ回避タリ其原因ハ第四十條列記ノ場合及ヒ自ラ回避スヘキモノト思料シタルトキニアリ而シテ果シテ回避カ正當ナリヤ否ヤハ裁判所ノ判定ニ讓ルヘシ

**第四十五條** 本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス可シ

**註釋** 準用トアルハ第四十條第四ノ如キハ適用スルコトヲ得サルカ如シ即チ立會タルトアラス干與トアリ又裁判ヲ爲ス職ニアラサレハナリ故ニ適用トセステ準用ト爲シタルニアリ

### 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審 第一章 捜査

〔註釋〕

捜査ハ法律上ノ下調處分ノ一タリ夫レ捜査トハ犯罪ニ關係アル事物ヲ取調フルヲ云

フ例ヘハ犯罪ノ原因、性質、方法、情狀、目的、日時、場所、被害ノ現況、多寡、犯人ノ數、氏名、年齢、職業、住所、原籍、身分、品行、前科、証人、証據物件等是ナリ而シテ之ヲ司法警察ノ處分ト云ヒ檢事カ公訴ヲ提起シ實行スルニ於テノ資料ヲ得ル爲メニアレハ檢事之カ總轄ヲ爲シ司法警察官ヲシテ之ヲ爲サシム其發生ヤ公訴權ト相伴隨シ公訴權ノ發生スルヤ捜査權モ發生ス公訴權ノ消滅スルヤ捜査權モ亦消滅ス從テ公訴ノ提起アリタルトキハ最早捜査權消滅スト云フハ非ナリ公訴提起後ト雖モ十分捜査ヲ爲シテ証憑ヲ聚集シ之ヲ裁判官ニ出シ又ハ集取ヲ裁判官ニ請求スル等公訴ノ維持ヲ爲サ、ルヘカラス但第二審ノ判決アリシ以上ハ捜査權ハ必要ナラス蓋シ捜査ハ事實ナリ第二審判決後ハ又事實ヲ左右スルコトヲ得サレハナリ

捜査權ハ公訴ノ提起實行ノ材料ヲ集ムル者ナレハ檢事之カ本官ニシテ未ダ豫審判事ノ干與スヘキモノニアラス從テ公力ヲ用ユルコトヲ許サ、ルノミナラス秘密ニ屬スト知ルヘシ又捜査權ハ公訴權ト其發生ヲ同クスルモ公訴權ノ停止ノ場合ニ於テハ相伴フコト能ハス彼ノ親告罪ノ如キハ捜査モ亦停止スヘシ然ラサレハ一家内ノ隱微ヲ發キ公訴權ノ發シタルト同一ニ歸シ不當ナリトス故ニ捜査權ノ發生ハ告訴アリタル後ニアリトス又勅委任官華族等ノ犯罪ノ如キハ上奏裁可ヲ經ルカ爲メニ公訴權ハ一時停止スルモ捜査權ハ發生ス蓋シ捜査ノ結果犯罪アルコトヲ知リ上奏裁可ヲ經ル手續ヲ爲スニアレハ捜査ハ却テ必要ナルモノトス併シ未ダ公訴權ノ發生セサル内ハ秘密ヲ守リ苟モ其身分ニ對シテ傷ツクル

カ如キナキニ注意セサルヘカラス而シテ捜査ヲ爲スヘキ場合ハ第四十六條ニ之ヲ規定セリ順次説明セントス

### 第四十六條 檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證憑及ヒ犯人ヲ捜査ス可シ

〔註釋〕

告訴、告發、現行犯其他ノ理由例ヘハ新聞、風説等ニ因リ犯罪アルコトヲ知り又ハ犯罪アリト

思料シタルトキハ茲ニ捜査權ヲ生シ其犯罪ノ証憑及ヒ犯人ヲ捜査スルニアリ而シテ檢事之ヲ掌ル檢事ハ一々手ヲ下シテ捜査ヲ爲サ司法警察官ヲシテ之ヲ爲サシム而シテ一々之ヲ指揮スルニアラス平常ニ於テ之ヲ爲サシメツ、アレハ特ニ必要ナル場合ノ外ハ一々指揮セサルヲ常トス

犯罪ヲ認知スト思料スルトハ大ニ差アルヘシ認知トハ之レ確實ニ知り得タル場合ヲ稱シ彼ノ告訴告發現行犯ノ如シ思料ストハ其感シアルノミニシテ彼ノ風説、新聞、民事訴訟上立會ノ如キ場合ニ之ヲ知ルヲ云フ而シテ其捜査スル上ニ於テハ決シテ區別ナシ

証憑ハ証據ト徹悉トテ併稱シタルモノナルヘシ結局確ト據リ所アルノミナラス斯クアルヘシト推定ヲ下シ得ヘキ場合ヲ云フ彼ノ血カ付キタル刃物、証人ノ陳述、盜人ノ如キハ其足跡、置去リ品等ノ如シ

- 一 身体ノ處分ニシテ強制ニ涉ルモノ
- 二 家宅ヲ侵ス處分
- 三 所有權ヲ犯ス處分

四 死体、解剖、墳墓發掘處分  
等是ナリ

大審院ハ非現行犯ノ場合ニ於テ犯罪捜査ノ目的ニ出ツルモ檢事ハ被告人ヲ訊問シ調書ヲ作ルコトヲ得サルモノトス何トナレハ檢事ハ犯罪ヲ捜査シ起訴ヲ爲スヘキモノニシテ被告人ヲ訊問シ調書ヲ作ルハ一ニ刑事ノ職權ニ屬スレハナリ故ニ檢事ノ職權外ニ作リタル違法ノ調書ハ斷罪ノ證據トシテ判決シタルハ失當トス(二十六年四月十日)然レトモ犯罪自首ノ場合ハ檢事調書ヲ作ルモ違法ニアラス(二十七年十一月廿九日)

第四十七條

警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ

犯罪ヲ捜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

- 第一 警視警部長、警部、警部補
- 第二 憲兵將校、下士
- 第三 島司
- 第四 郡長

○明治十四年 司法省丙第十 三號 新法實施ノ後 ハ司法警察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡査ナシテ警部ノ代理ヲ庶サシメ不替候補此旨相違候事但代理ヲ命ス可キ巡査ノ姓名ヲ豫メ裁判所へ通牒致シ置候義ト心得

○明治十五年 第二十三号布告

第五 林務官

第六 市町村長

警視總監、府縣知事ノ如キハ檢事ト同一ノ權ヲ有スト雖モ平常ニ於テハ決シテ然ルニアラス其精神ハ地方暴動ノ如キ國事犯ノ如キ外患罪ノ如キ非常ノ場合ニ於テ實際ノ便宜上臨機ノ處分ヲ爲サシムルカ爲メノミ其第二項ノ各號ニ於ケル官吏公吏ハ何レモ平常司法警察事務ニ從事スルモノニシテ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受クルモノトス裁判所構成法第十八條第八十四條之ヲ示ス司法警察官カ犯罪ヲ捜査スルニ付テ大審院ノ判例多シ司法警察官ハ現行犯ノ場合ニ於テノミ被告人及ヒ關係人ヲ訊問シ其調書ヲ作ルノ職權アルモ非現行犯ノ場合ニ於テハ其名稱ノ如何ニ拘ハラズ之ヲ作ルノ權ナシ即チ非現行犯ノ場合ニ於テ司法警察官ノ作リタル調書ヲ斷罪ノ証トナシタルハ違法ノ裁判ナリ(二十五年六月三十日、二十六年四月十七日、十二月十八日)司法警察官カ被告人等ノ陳述ヲ錄取シ其警察官ノ署名捺印シ被告人等ヲシテ署名捺印セサル以上ハ其開取書ハ無効ノ書類ト云フヲ得ストナレハ單ニ被告ノ陳述ヲ錄取セシニ止マリ被告ヲ訊問セシ事跡ナキモノナレハ警部ニ於テ其職權ヲ超越シテ豫審ノ一部ニ屬スル手續ヲ履行シタルモノト云フヘカラス(二十七年八月十六日)

第四十八條

海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節 告訴及ヒ告發

告訴及ヒ告發ハ其犯罪事件ヲ官ニ申告スルニ付テハ一ナリト雖モ其人ヲ異ニス告

○刑事訴訟法 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査トシ同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

○明治十四年 十二月十五日 第六十五号布告

商船内犯罪 取扱規則 第一條 何人タリトモ船内ニ於テ重罪輕罪アルヲ知ルハ重罪シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スト得

第二條 船長  
告訴發シ  
受ケタル時  
又ハ重罪輕  
罪ノ現行犯  
アルトシ知  
リタル時ハ  
其事件ニ付  
假ニ訊問檢  
證ノ處分ヲ  
爲シ且證憑  
及ヒ事實參  
考ト爲ルヘ  
キ事ヲ集  
取シ調査チ  
作ルベシ但  
一能ハサル  
時ハ第三條  
ニ記載シタ  
ル官更ニ申  
立テ爲スヘ  
シ前項ノ場  
合ニ於テハ  
立會人二名  
以上アルヲ  
要ス  
第三條 船長  
ハ證憑及ヒ  
事實參考ト

爲ルヘキ事  
物ヲ取獲メ  
被告入ト共  
ニ該船碇泊  
又ハ若港ノ  
地ノ檢事又  
ハ司法警察  
官更ニ引渡  
スヘシ若シ  
外國ノ港埠  
ニ若シタル  
時ハ其地駐  
在ノ領事ニ  
之ヲ引渡ス  
ベシ  
○明治十八年  
九月廿四日第  
三十一号布告  
違警罪即決  
例  
第一條 警察  
署長及ヒ分  
署長又ハ其  
代理タル官  
吏ハ其管轄  
地内ニ於テ  
犯シタル違  
警罪ヲ即決  
スヘシ但私  
訴ハ此限ニ

訴ハ被害者之ヲ爲シ告發ハ被害者以外ノ人之ヲ爲スニアリ而シテ必ラス何レモ爲スノ  
公義務アルコアラズ之ヲ爲スト否ラサルトハ全ク其人ノ任意ニアリ  
古來告訴及ヒ告發ニ付テハ學者ノ論スル所三説アリ  
第一説 ○告訴及ヒ告發ハ之ヲ禁止スヘシ即チ曰ク告訴告發ハ公訴權人民ノ手ニ存ス  
ル時代ニ於テハ自ラ原告ノ地位ト爲リ審理ニ干渉シ犯罪ノ証憑ヲ提出スルヲ以テ其  
任ヤ重大ニシテ不實ノ申告ヲ爲スモノ少シト雖モ公訴權カ官吏ノ手ニ移リシ以降ハ  
告訴告發ハ單ニ密カニ犯罪事件ヲ申告スルノミコシテ審理ニ與カラス大任ナシ然レ  
トモ其告訴告發力起訴ノ原由ト爲ルヲ以テ姦猾ノ徒ハ之ヲ利用シ誣告脅迫起リ私利  
ヲ覓メ却テ公安ヲ害スルヲ以テ法律ハ之ヲ禁止スルヲ以テ上策トスルニアリトノ説  
ナリシ此説ハ私訴權ノ必ラス告訴告發ニ限ルトノ制限ヲ立テ且惡意重過失ノ責ヲ其  
告訴告發者ニ負ハシムルニ於テハ敢テ危險ナシ決シテ禁止スルノ必要ナク却テ之ヲ  
利用セハ犯罪者ノ洩ル、コトヲ防ク利益アリトス

第二説 ○告訴及ヒ告發ハ之ヲ命令スヘシトノ説ナリ曰ク犯罪ノ發覺ハ常ニ告訴告發  
ノ效多キニ居ル然ルニ未ダ犯罪ノ發覺スルモノ少ナキハ告訴告發ヲ義務ト爲サ、ル  
ニ之レ由ル人民ニシテ害ヲ加ヘタルモノアルコト知ルニ於テハ必ラス之ヲ申告セサ  
ルヘカラス然ラサレハ之レ公ノ義務ニ背クモノナリ若シ自由ナリトセハ終ニ一人ノ  
告訴告發ヲ爲スモノナキニ至ラン故ニ之カ告訴告發ハ之ヲ命令的ニ規定スヘシト云  
ヘリ然ルニ此説ニ依ルトキハ命令ヲ奉セサルトキハ制裁ヲ加ヘサルヘカラス若シモ  
告訴告發ヲ爲サ、ルトキハ命令ニ違背シタルモノナルヲ以テ罰セサルヲ得ス然ルト  
キハ罰ヲ恐レテ罪ヲ發キ官ニ申告スルニ至リ又其反對ニ立テタルモ其モノ、罪ヲ許

キ官ニ申告スルノ止テ得サルニ至ルヘシ若シ然ルトキハ罪ニ罪ヲ出シ却テ公益ヲ攪  
亂スルニ至ルヘシ極端ニ論セハ劇場ニ於テ一犯人アレハ見物數千人皆告訴及告發ス  
ルニ至ラン若シ一人ニテモ洩ル、トキハ罰セラル、カ故ナリ實ニ實際爲シ得ラレサ  
ルモノト云ハサルヘカラス結局第二説モ不當ナリト云ハサルヘカラス  
第三説 ○告訴及ヒ告發ハ任意ニ爲スヘシトノ説ナリ之レ現今歐洲各國ノ採用スル所  
ニシテ我法律モ之ヲ採レリ蓋シ非難スヘキ點ナク却テ被害者ハ之ヲ告訴シ其以外ノ  
モノニアリテハ之ヲ告發シ自ラ公益ヲ保護シ私益ヲ謀ルニアリトス然レトモ官吏ニ  
對シテハ第二説ヲ採用ス蓋シ公益上職務ノ爲メニ正當ナリト云ハサルヘカラス

第四十九條

何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被  
告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速  
カニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

何人ニ限ラストハ未成年者、禁治産者、外國人等其他男女老幼等ヲ論セス苟モ犯罪ニ因リテ  
損害ヲ受ケタル者ハ告訴スル權利ヲ有ス蓋シ畢竟犯罪ノ速カニ發覺センコトヲ欲スルカ故ナリ  
告訴ヲ受ケヘキ人ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ナリトス司法警察官ハ  
第四十七條ノ規定ノ如ク列記スルモ多クハ其地ノ警察署分署若クハ憲兵屯所ニ爲スモノナリ市町  
村長等ヘ爲スハ稀レナリトス  
司法警察官ニ於テ告訴ヲ受ケタルトキハ其告訴狀ハ之ヲ管轄ノ裁判所ノ檢事ニ送致スヘシ而シテ

在ラス  
第二條 即決  
ハ裁判ノ正  
式ヲ用ヒス  
被告人ノ陳  
述ヲ聽キ證  
憑ヲ取調ヘ  
直チニ其言  
渡ヲ爲スヘ  
シ

又被告人チ  
呼出スコト  
ナク若クハ  
呼出シタリ  
ト雖モ出廷  
セサル時ハ  
直チニ其言  
渡ヲ本人  
又ハ其住所  
ニ送達スル  
コトヲ得  
第三條 即決  
ノ言渡ニ對  
シテハ違背  
罪裁判所ニ  
正式ノ裁判  
ヲ請求スル  
コトヲ得但正  
式ノ裁判チ

其罪ノ違背罪ナリシトキハ司法警察官ハ即決ヲ爲ス權ヲ有スルヲ以テ直チニ即決處分ヲ爲スヘキ  
モノトス其手續ハ上欄即決例ノ如シ

第五十條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

翻譯 告訴ヲ爲スニハ成ルヘク其証憑及ヒ事實參考トナルヘキコトヲ申立テ發覺ノ速カナランコトヲ欲セシムルモノトス

第五十一條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

翻譯 告訴ヲ爲ス手續ヲ定ムルニアリトス告訴ハ苟モ人ヲ犯罪者視シ自己ノ損害ヲ訴フルモノナレハ十分正確ナルヲ良シトスルヨリシテ書面ヲ以テ爲サシメ且其書面モ署名捺印シテ確實ナルコトヲ示スヘキモノトス  
然レトモ事急速ニ出テ又ハ書面ヲ認ムルコト能ハサルトキハ口述ヲ以テ爲スコトヲ得セシム此場合ニ於テ司法警察官又ハ檢事ハ告訴調書ヲ作ルヘシ之レ告訴ヲ確實ナラシムルカ爲メナリ  
非現行犯ノ事件ニアリテハ司法警察官及ヒ檢事ハ被告人其他訴訟關係人ヲ訊問スルコトヲ得サルハ既ニ屢々判決例ヲ以テ示シタリシカ本條口述告訴ノ場合ニ在テハ其聞取調書ヲ作ルニ際シ不明

釋スシテ正  
式ニ上訴ヲ  
爲スコトヲ得  
ス

第四條 即決  
ノ言渡書ニ  
ハ被告人ノ  
氏名年齢身  
分職業住所  
犯罪ノ場所  
年月日時罪  
名刑名及ヒ  
正式ノ裁判  
ヲ請求スル  
コトヲ得ヘキ  
期限並ニ其  
言渡ヲ爲シ  
タル警察署  
年月日警察  
官ノ氏名ヲ  
記載スヘシ  
第五條 正式  
ノ裁判ヲ請  
求スル者ハ  
即決ノ言渡  
ヲ爲シタル  
警察署ニ申  
立書ヲ提出  
スヘシ但其  
期限ハ第二

瞭ノ點アルトキハ訊問スルモ可ナリ從テ之ヲ調書ト爲スモ決シテ違法處分ニアラス(二十八年二月七日大審院判決)

第五十二條 官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ  
告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

翻譯 官吏公吏カ其職務ヲ行フニ因リテ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料スルトキハ必ラス告發スル義務アリトス蓋シ其官吏公吏主管ノ事務ニ付テハ一切ノ責任アリテ且専心以テ事務ニ執掌シ事務ヲ舉ケントセハ此義務ヲ負ハシメサルトキハ終ニ職務ハ擾亂シ弊害ヲ來スカ故ナリ  
本條ノ場合ハ司法警察官ニ告發スルニアラスシテ檢事ナリ之レ其職務ニ於テ然ルノミ人民ハ之ト異ナリ可成的便利ヲ與ヘサルヘカラサルモ官吏公吏ハ可成的本則ニ從ハシムルモノトス又職務ノ地ト爲シタルハ犯罪ノ地又ハ被告人ノ所在地ヲ知ルコト難キコトアリ

實際速カニ告發ヲ爲サ、ルヘカラサレハ斯ノ如キ捜査ヲ爲スヘキ場合ニ至ラサレハナリ  
又官吏公吏ハ人民ト異ナリ書面ヲ認ムルコト能ハサルモノナリ故ニ口述告發ノ手續ヲ爲スヲ許サス  
司法警察官ハ非現行犯ノ場合ニ於テ犯人ヲ訊問シ其調書ヲ作ルノ權ナキモ其犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ之レヲ檢事ニ告發スルハ當然ノ職務ナリ故ニ其告發書ヲ以テ斷罪ノ證據ト爲スモ不法ニアラス(二十六年七月十日大審院判決) 巡査ノ告發書ノ如キハ第二十



條ニ依リ所屬官署ノ印ヲ捺捺スルニ及ハス單ニ第五十二條ノ規定ニ從ヒ署名捺印スルヲ以テ足ル  
(二十六年十一月十六日同上)本條ノ官署中ニハ司法警察官ハ包含セス司法警察執務心得第五十二  
條ニ依リ送致スルノミ(廿八年十一月十六日法曹會議決)

**第五十三條** 何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル

トキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事  
又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

**註釋** 第四十九條ノ規定ト同一ニシテ只其異ナルハ告訴ニ付テハ被告人所在地若クハ犯罪ノ地ナレ  
ルハ告發ニ在テハ告發人ノ所在地、犯罪地ニアリ而シテ其被告人ノ所在地ヲ告發人ノ所在地ト汎ク  
爲シタルハ告發人ハ被害者ニアラス告訴人ノ所在地ハ通例犯罪ノ地ナリ故ニ犯罪ノ地ト爲シタル  
上ハ更ニ告訴人ノ所在地ヲ規定スルハ重複ナリ之ニ反シ告發人ノ如キハ其身ハ犯罪ニ關係ナキモ  
ノナレハ必ラス犯罪ノ地ニアリト云フヘカラス故ニ犯罪ノ地ニアラスト雖モ現在地ニ於テ告發ス  
ヘキコトヲ規定シ以テ發覺ニ便宜ヲ與ヘサルヘカラス此点ヨリ云ヘハ告訴人ト雖モ亦必ラス犯罪  
ノ地ニ限ルニアラス或ハ他所ニ行キテ事實ヲ知ルコトアリ此時ニ當リテ告訴スルノ途ヲ設ケサル  
ハ不便ト云フヘシ  
告發ハ告訴ト同シク義務ニアラス故ニ之ヲ爲スト否トハ其人ノ自由トスルニアリ然レトモ爆發物  
取締罰則第八條ニ依リハ常人ニ告發義務ヲ負ハシタリ之レ其性質ニ於テ特例ヲ設ケタルニ外ナラ  
ス

條第一項ノ  
場合ニ於テ  
ハ言渡アリ  
タルヨリ三  
日內第二項  
ノ場合ニ於  
テハ言渡書  
ノ送達アリ  
タルヨリ五  
日內トス  
第六條 警察  
署ニ於テ前  
條ノ申立ヲ  
受ケタル時  
ハ二十四時  
內ニ訴訟ニ  
關スル一切  
ノ書類ヲ違  
警署裁判所  
檢察官ニ送  
致スヘシ  
第七條 第五  
條ニ定メタ  
ル期限內ニ  
正式ノ裁判  
ヲ請求セザ  
ル時ハ即決  
ノ言渡ヲ以  
テ確定ノモ  
トス

**第八條 科料**

拘留ノ言渡  
ヲ爲シタル  
時必要ト認  
ムル場合ニ  
於テハ後ノ  
條條ニ定メ  
タル處分ヲ  
爲スコトヲ  
得  
第九條 科料  
ノ言渡ヲ爲  
シタル時ハ  
其金額ヲ假  
納セシムヘ  
シ若シ納メ  
サル者ハ一  
圓ヲ一日ニ  
折算シテ之  
ヲ留置ス其  
一円ニ滿サ  
ル者ト雖モ  
仍ホ一日ニ  
計算ス  
第十條 拘留  
ノ言渡ヲ爲  
シタル時ハ  
一日チ一円  
ニ折算シ其

博奕ヲナシタルコトヲ告發スルトキハ如何抑モ賭博ハ現行犯ナリ而シテ此現行犯ハ他ノ現行犯ト  
異ナリ犯罪成立ノ要素ニシテ相當官吏ノ面前ニアラサル以上ハ犯罪成立セス故ニ假令告發スルモ  
其效ナシ刑事訴訟法ノ現行犯ト區別アル所以ナリ

**第五十四條** 告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ

場合ハ此限ニ在ラス  
無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其效アリトス  
**註釋** 告訴、告發ハ代理人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノナリ必ラス本人ニ限ルニアラス殊  
ニ被害者ノ場合ニ在テハ自ラ出頭スルコト能ハサルトキアリ傷ヲ受ケタルトキノ如キ病氣ノトキ  
ノ如シ若シ必ラス本人ナリトセハ告訴告發ヲ爲スモノアラス然ルトキハ事實發覺スルコト難ク從  
テ法律之ヲ許スモ反テ禁スルカ如キ有様ト爲ルニ至ルヘシ尤トモ第五十二條ノ官吏告發ノ場合ハ  
代理人ヲ許サス若シ之ヲモ許ストセハ恰モ職務ヲ代理スルモノト云フヘシ之レ決シテ官制ノ許サ  
ル所ナリ

告訴告發ハ何人ニ限ラサルヲ以テ假令無能力者ト雖モ自己ノ名ヲ以テ爲スコト敢テ妨ケナラス然  
ルニ其告訴ハ被害者ノ地位ニ立チタルモノニシテ財産ノ管理ヲナス法律上代理人アリ故ニ其代理  
人之ヲ爲スモ決シテ妨ケナシ之レ第二項ノ規定アル所以ナリ

**第五十五條** 告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場

合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ  
○刑事訴訟法 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審  
四十五

刑罰ニ相當ノ金額ヲ保  
留トシテ差  
出サシムヘ  
キ若シ差出  
サハル者ハ  
第五條ニ定  
メタル期限  
内ニテ留置  
ス但刑罰五  
日以内ナル時  
ハ其日數ニ  
過クルコト  
ヲ得ス  
第十一條 保  
留金ヲ差出  
シタル者ハ  
刑ノ旨渡確  
定シタル後  
直チニ出廷  
シテ其執行  
ヲ受クヘシ  
若シ出廷セ  
サル時ハ保  
留金ヲ没入  
シテ本刑ニ  
換フ  
第十二條 留  
置シタル者

告訴告發ハ之ヲ取下ケ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得セシム其告發ニ在テハ其取下又ハ申立  
ノ變更ハ本件ニ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシト雖モ告訴ニ付テハ大ニ注意スヘキモノナリ彼ノ親  
告罪ヲ告訴シタルトキハ檢事ハ公訴權ヲ提起スルニ於テ材料ト爲ルヲ以テ檢事ハ其告訴ニ依リテ  
公訴權ヲ提起シ併セテ實行スルニアリ此場合ニ於テ其告訴ヲ取下ケ又ハ變更ノ申立アルトキハ檢  
事ハ其取下ケニ付テハ公訴權消滅ノ原因ニ依リ無罪若クハ免訴ノ請求ヲ爲スヘク又申立變更ナル  
トキハ其變更ニ從テ公訴ヲモ變更セサルヘカラス其他ノ犯罪ニ付テハ取下ケ又ハ變更ノ申立ハ何等  
ノ效力ナシ例ヘハ委託金費消セラレタルノ告訴ヲ爲シタル末之ヲ取下ケタルトスルモ公訴權ハ依  
然トシテ進行スルモノナリ其告發ニ付テハ親告罪ノトキハ檢事ハ公訴權ヲ提起スルコト能ハスト  
云フニ外ナラズ故ニ一旦告訴告發ニ依リテ成立シタリシ親告罪ハ假令後日告發ヲ取下ケルモ告訴  
ヲ取下ケタルニアラサレハ公訴ハ消滅セサルモノト云フヘシ之レ親告罪ニ於ケル二者ノ差異ナリ  
告發、告訴ハ假令之ヲ取下ケ又ハ申立ヲ變更スルモ第十三條ノ要價ノ訴ハ免ルコトヲ得ス之レ至當  
ナリトス  
取下若クハ申立變更ヲ爲ス手續ハ第五十一條、第五十二條ヲ準用スヘキモノナルコト勿論ナリ

### 第二節 現行犯罪

現行犯罪ノ名ヲ付シテ他ニ非現行犯アリト區別シタルハ其犯罪ノ發覺ノ模様ニ依  
リテ觀察シタル區別ナリ即チ第五十六條ニ其現行犯罪ノ定義ヲ示シタリ  
而シテ現行犯ニ付テハ之カ特別ノ處分ヲ爲スコトヲ許シタレハ決シテ無罪ヲ罰スルノ  
恐レナク却テ犯罪者ヲシテ法網ヲ脱セシメス直チニ捕縛スルヲ得テ犯罪ノ證據ハ明瞭  
ノミナラス處分ヲ速カニ社會ノ害ヲ除ク利益アルヲ以テナリ其處分ハ左ノ如シ

- 一 令狀ナクシテ何人ト雖モ被告人ヲ逮捕シ得ヘシ
  - 二 檢事又ハ司法警察官ハ豫審判事ノ處分ヲナスコトヲ得ヘシ故ニ家宅搜索、差押、  
訊問等ヲ爲ス
  - 三 檢事ハ總テノ令狀ヲ司法警察官ハ拘留狀以外ノ令狀ヲ發スルコトヲ得ヘシ
  - 四 檢事ノ起訴ナキモ豫審判事ハ豫審ニ着手スルコトヲ得ヘシ
- 其他ノ實益ハ國會議員ヲ逮捕スルニ付テ現行犯ナルトキハ議院ノ許可ヲ要セサルカ如  
キコトアルヘシ

### 第五十六條 現行犯罪トハ現行ニ行ヒ又ハ現行ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪 ヲ謂フ

現行犯ノ定義ヲ下シタルモノニシテ其現行ニ行ヒタル際發覺シタルモノヲ現行犯ナリト云フニ  
付テハ敢テ異ナキ所ナリシカ其現行ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタルモノヲ現行犯ト爲スニ付テハ  
議論アリト雖モ法律トシテ茲ニ示ス以上ハ現行犯ト云フヲ得ヘキモノトス然レトモ純理上ヨリ云  
フトキハ決シテ現行犯ト云フヲ得サルモノナリ只其處分ノ速カニ爲サハルヘカテナル点ニ於テハ  
現行ニ行ヒタル際ニ發覺スルト敢テ異ナルコトナシ例ヘハ人ヲ殺シツ、アルモノヲ目撃スルト已ニ  
殺シ終リテ其場ヲ立退カントスル際ニ目撃スルト敢テ區別スルノ必要ヲ見サルヘシ故ニ其現行ニ行  
ヒタルトキト行ヒ終リタルトキトノ間幾干ノ時間ヲ要スヘキヤ否ヤニ付テハ標準ナシト雖モ之レ  
當該官ノ心裏ニ於テ現行ニ行ヒ終リタル際ナリトセハ可ナリ要スルニ犯罪決行ノ後空シク時間ヲ經  
過シタルトキハ格別未タ多クノ時間ヲモ經ス且罪跡顯然トシテ現存シタルトキハ之レ現行犯ノ區  
域内ナリト爲スニ於テ妨ケナシト云ハサルヘカラス而シテ此場合ニ於テハ實際急速ノ處分ヲ要ス

正式ノ裁判  
ヲ請求シ因  
テ押出狀ノ  
發達アリタ  
ル時ハ直チ  
ニ留置ヲ解  
クヘシ  
第十三條 留  
置ノ日數ハ  
一日チ一四  
ニ折シテ科  
料ノ金額ニ  
算入シ又ハ  
拘留ノ刑罰  
ニ算入スヘ  
シ  
○明治十四年  
十二月二十八  
日第七十三号  
布告  
治罪法ニ於テ  
無能力者法律  
ニ定メタル代  
人及ヒ民事控  
當人ト稱スル  
者ハ左之通  
無能力者  
一未丁年者  
二妻タル者

三白痴瘋癲人

四治産ノ禁ヲ

受ケタル者

法律ニ定メタ

ル代人

一未丁年者ノ

父若クハ母

又ハ親屬檢

見人

二夫タル者

三白痴瘋癲人

ノ保管者

四治産ノ禁ヲ

受ケタル者

財産管理人

民事擔當人

一未丁年者ノ

父若クハ母

又ハ同居ノ

親屬ニシテ

監督ヲ爲ス

者

二夫タル者

三白痴瘋癲人

ノ保管者

四雇主

但シ雇人其

雇主ノ命シ

タル事件ヲ

行フ時

第五十七條 重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セララル、トキ

第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

註釋

本條ハ現行犯ニ準スヘキモノニシテ現行犯ト同シク急遽處分ヲ要スヘキ場合ナリ即チ犯罪アルコトヲ確認スルニ足ル形跡顯然タルノミナラス目前ニ於テ犯人ナルコトヲ推認スルニ足ルヘキモノナレハナリ本條列記ノ各場合ハ何レモ之ニ適當スルモノナリトス

第一ノ場合ハ犯人トシタルコト(一)一人又ハ數人ヨリスルコト(二)追呼セララル、コト(三)ノ三條件ヲ具備セサルヘカラス故ニ只單ニ甲走り乙之ヲ追フニテハ準現行犯ニアラス必ラズヤ盗人々々トノ呼聲アルヲ常トセリ○第二ノ場合ハ犯罪ノ痕跡アルコト(一)犯人ト思料スヘキトキ(二)ノ二條件ヲ具備スヘシ而シテ其一ハ兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶スルトキノ如キ又ハ身體、被服等ニ顯著ナル犯跡アルトキノ如キ即チ血痕ノ如キ、泥濘ノ如キ破裂セルカ如キ皆此類ナリトス而シテ已ニ贓物ヲ他人ニ預ケ又ハ質入シタル以上ハ贓物ヲ携帶スル場合ニ非サルヲ以テ現行犯ニ準シテ處分スヘキモノニアラサルコトハ(二十七年七月四日)法曹會決議ニアリ○第三ノ場合

ハ家宅内ニ犯シタルコト(一)檢證ノ爲メ又ハ逮捕ノ爲メナルコト(二)戸主ヨリ處分ヲ求ムルトキ(三)ノ三條件ヲ要ズヘシ而シテ戸主トハ必ラズシモ戸籍上戸主名義ノモノニアラサレハ效ナシト云フニアラス戸主ニ代ルヘキモノモ包含ス只一家ノ安寧ヲ害セサランカ爲メニ外ナラス

第五十八條 司法警察官及ヒ巡查、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮

ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタルトキハ令狀ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違輕罪ニ付テハ即次ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

註釋

司法警察官及ヒ巡查憲兵卒等職務ヲ行フニ當リ例ヘハ巡廻中ナルトキ又ハ捜査ニ從事中ナルトキニ於テ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ルヘキ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタルトキハ令狀ヲ待タス其モノヲ逮捕スル權利ヲ有ス蓋シ公害ヲ除クカ爲メニ必要ナリトス

罰金又ハ科料若クハ拘留ニ該ルヘキモノハ元來拘引スルコトヲ得サル性質ノモノナリ假令現行犯ナリト雖モ輕忽ニ引致スルコトヲ得ス故ニ先ツ氏名住所ヲ問ヒ後ニ相當官署ニ告發スルノミ引致スヘキ場合ハ氏名住所不明ナルトキ又ハ逃亡ノ恐レアルトキニアリトス

第五十九條 巡査、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

前條第一項ノ如ク逮捕シタルトキハ之ヲ司法警察官ニ引渡スヘシ同時ニ事件ヲ告發スルモノトス此時司法警察官ハ逮捕及告發ニ付テ調書ヲ作り不法行為ニアラサルコトヲ証明シ置クニアリ若シ前條第一項ノ司法警察官自ラ逮捕シタルトキハ如何爲スヘキヤ第四百四十七條ノ手續ヲ爲スモノトス

巡査カ現行犯ニ非サル被告人ヲ強テ同行セントスルハ職權外ノ行為ニシテ法律規則ノ執行ト云フヲ得サルニ依リ其行為ニ對シ抗拒シクレハトテ官吏抗拒ノ罪ヲ組成セス(二十七年五月十八日大審院判決)

第六十條 何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直ニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

現行犯ニ付テハ常人モ司法警察官ト爲ルトノ法諺アリシカ如ク何人ニテモ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ルヘキ輕罪ノ現行犯アルトキハ直ニ逮捕ヲ許ス若シ第五十八條第二項ノ如キ罰金又ハ違警罪ノ現行犯ナルトキハ決シテ逮捕權ヲ生セス蓋シ官職アル人ト雖モ逮捕權ナキニ常人ニ之ヲ許ス理ナク只告訴告發ヲ爲スニ止マルノミ

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業、住所及ヒ其

逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求めルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

何人ニ限ラス犯罪人ヲ逮捕シタルトキハ本條ノ手續ノ如ク司法警察官ニ引致シ引渡スヘシ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ巡査、憲兵卒ニ引渡シ自己ノ氏名等及ヒ逮捕ノ理由ヲ陳述シ不法逮捕ニアラサルコトヲ証スヘシ其被告人即チ逮捕セラレタルモノ又ハ巡査、憲兵卒等同行ヲ求めタルトキハ同行スヘク決シテ故ナク之ヲ拒ムヘカラス

巡査、憲兵卒ハ引渡サレタル被告人ハ之ヲ司法警察官ニ引渡スヘシ其逮捕シタル人ハ假令巡査、憲兵卒ニ引渡スモ尚ホ其事柄ニ付テハ告訴人ハ告發ヲ爲スヘキモノトス

### 第二章 起訴

起訴ハ公訴ヲ起スノ意味ナリ即チ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料スルトキハ捜査ヲナシ其捜査ノ終リタルトキハ之ヲ區別シ起訴スヘキモノト起訴スヘカラサルモノトヲ定ム其起訴スヘカラサルモノトハ公益上起訴ヲ却テ不利ト爲スモノ若クハ犯罪ヲササル場合ニ於テ爲スモノトス

起訴ヲ爲スヘキモノトスルトキハ其道ニ二途アリ即チ一ハ豫審ヲ求メ一ハ公判ヲ求ムル

ニアリ何レモ之ヲ公訴ト云ヒ第六十二條以下之ヲ規定ス

### 第六十二條 地方裁判所檢察犯罪ノ捜査ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

- 第一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ
- 第二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直テニ其裁判所ニ訴テ爲ス可シ
- 第三 裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢察ニ送致ス可シ

(明治十五年司法省丙第十一號達)  
 今般太政官ヨリ別紙ノ通御覽相成候條此旨相達候事  
 (別紙)二十五  
 年三月二十二日  
 日太政官達  
 敕任官禁錮ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シ及ヒ委任官禁錮帶敕有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタルハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分ス可シ但申行犯罪ニ該ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルコトナラズ得此旨相達候事

起訴ハ管轄ノ檢察官ニ於テ爲スモノニシテ區裁判所ノ檢察官ト地方裁判所ノ檢察官トニ依テ區別ナ生ス本條ハ地方裁判所檢察官ノ起訴ヲ規定セリ地方裁判所檢察官ニ於テ捜査ヲ終リタルトキトアルヲ以テ是ヨリ以後捜査ナキカ如キ感アルモ決シテ然ルコトアルニ論セシカ如ク捜査權ハ公訴權ト其發生消滅ヲ共ニ公訴權ノ消滅セザル間ハ捜査權消滅セズ故ニ終リタルモ決シテ捜査權ノ消滅シタル時ト云フニアラス即チ捜査權進行シ起訴ノ處分ヲ爲スニ熟シタルトキチ意味スルモノト云フヘシ故ニ起訴ノ手續ヲ盡シタル後ト雖モ尙ホ捜査權ヲ實行シ犯罪証明ニ係ル書類ハ何時ニテモ檢察官ヨリ裁判官ニ廻送スルモ可ナリ裁判官モ捜査處分ナリトシテ之ヲ斥クルコトヲ得サルモノ

ナリ

夫レ斯ノ如ク起訴ノ處分ヲ爲スニ熟スルトキハ檢察官ハ其罪ノ種類ニ依リテ三段ニ區別シテ本條規定ノ如ク處分ヲ爲スモノトス

其第二ニ輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審ヲ求メ又ハ公判ニ付スル等檢察官ノ隨意ナリト雖モ裁判所構成法第十六條第二號第三號ノ輕罪ニ付テハ豫審ヲ求ムルコトヲ得ス若シ性質上輕キモノト認メ法律カ規定シタルニアレハ自由ニ左右スルコトヲ許サ、ルヲ以テ原則トセリ

起訴ハ事件ニ對シテ爲スカ又人ニ對シテ之ヲ爲スカ若シ事件ノミナリトセハ人名ナシト雖モ起訴スヘク人ニ對シテノミ爲ストセハ人名ノ知レザル間ハ起訴スルコトヲ得サルニ至リ大ニ不都合ヲ生スヘシ大審院ハ判決シテ曰ク

檢察官ヨリ起訴セザル被告ニ對シ公訴不受理ノ判決ヲ爲シタルハ當然ナリ何トナレハ元來起訴ハ被告ノ氏名ヲ指示スヘキコトハ法規ナキモ被告事件ノ主体ナルヲ以テ必ラ被告タル一定ノ人ヲ示スヲ要ス故ニ其詳ナラザルトキハ人相替ヲ以テ之ヲ標示スヘキナリ然レハ已ニ公訴ヲ受ケタル被告ノ共犯者ト雖モ之ニ對シ特ニ起訴セザレハ豫審判事ハ其豫審ニ著手スルヲ得ス刑事訴訟法第六十二條ハ起訴ノ手續ヲ區別シタル規定ニシテ被告事件ハ事件ヲ主トシ人ヲ主トセザル旨ヲ示シタル法條ニアラス(二十八年二月八日) 檢察官ヨリ豫審判事ニ豫審ヲ請求スルニ付一定ノ形式ヲ具ヘタル書類ヲ必要ナリトスル法規ナシ電報ニテモ之カ請求ヲ爲スコトヲ得(二十八年三月五日)

### 第六十三條

區裁判所檢察犯罪ノ捜査ヲ終リタル上裁判所構成法第十六條第一號第二號ニ記載シタル事件ト思料シタルトキハ其裁判所ニ訴テ爲ス可シ

本條ハ區裁判所ノ檢察官起訴ヲナス手續トス

第六十四條 檢事ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

起訴スヘキコ付テハ各檢事ニ管轄アリ地方裁判所ノ檢事ハ其地方裁判所ノ管轄ニ係ル事件ヲ起訴シ區裁判所檢事ハ其區裁判所ノ管轄ノ事件ヲ起訴ス然ルニ其檢事ニ於テ管轄ニ屬セサルトキハ如何スヘキヤ之レ其管轄裁判所ノ檢事ニ送致スヘキモノトス其事件カ罪ト爲ラス又ハ公訴受理スヘカラサルモノト思料スルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スヘカラス之レ亦至當トス

區裁判所ノ檢事ニ於テハ重罪事件、公訴受理スヘカラサルモノ自己ニ屬セサル輕罪等總テ上級ノ裁判所檢事ニ送付スルニアリ決シテ不起訴ノ決定ヲ爲スヘカラス(二十七年十一月七日法曹會決議)

第六十五條 前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

被害者ニ通知ヲ爲スハ告訴者ヲシテ私訴ヲ爲スニ便ナラシムルニアリ其他官署又ハ公署ヨリ特ニ檢事ニ照會アルトキハ一々通知スルハ當然タリ

第六十六條 檢事豫審ヲ求ムルトキハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所、逮捕ス可キ人名及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

檢事ニ於テ豫審ヲ求ムルトキノ注意スヘキ手續ナリトス必ラスシモ要件ニアラス此事項具備セサレハ起訴成立セスト云フヘキモノナラテハ可成的檢事ヲ指示セシメ豫審判事ヲシテ審理上便宜ヲ與フルノミ

公判ニ付テハ例ノ如キ注意スヘキ點ナキヤト云フニ本條ト同一ノ法條ナシト雖モ第二百十三條ノ如キハ其手續ナリト云フヲ得ヘシ

### 第三章 豫審

豫審ハ事實發見ノ爲メニシテ諸般ノ証憑ヲ集取スル爲メ行フ所ノ下調處分ナリ豫審判事モ亦裁判官ナリ訴ナキ以上ハ審理スルコト能ハス若シ請求ナクシテ處分ヲ爲シタルトキハ其處分ハ無効ニ屬スルコト勿論ナリトス

豫審ハ事實發見ヲ目的トスルモノナレハ其處分ヲ秘密ニシ世人ニ之ヲ知ラシメサルニアリ若シモ之カ公行ヲ爲サンカ事實發見上妨害ト爲リ終ニ其犯罪ノ証憑ハ不十分ト爲リ犯罪者ヲ洩スニ至ルヘシ現今大ニ豫審ノ秘密ノ不法ヲ唱ヘ公行スヘシト論スルモノ多シ然レトモ之レ大ニ非ナリ豫審ノ公行ハ却テ証憑ノ湮滅ヲ助クルモノニシテ奸惡者ヲシテ益々奸惡ヲ逞フセシムルニアリ只現今ノ制度ニ加フルニ辯解セシムル方法ヲ以テセハ可ナリ外國人雜居ノ曉果シテ如何ニ訂正スヘキヤ注意スヘキ點ナリトス而シテ豫審ヲ爲ス目的ハ左ノ三個ニ外ナラス

第一 証據不備ヲ以テ有罪者ナルニモ拘ラス無罪トスルトキハ社會ニ害ヲ加フル少クナラス故ニ法律ハ之カ証憑ヲ集取セシムルニアリ

第二 公判ニ付スルトキハ公延上名譽ヲ毀損スルコト少々ナラス況ヤ其身無罪ナリシトキノ如キハ實ニ回復スルノ難キヲ知ルヘシ故ニ豫審ヲ設ケテ有罪無罪ヲ區別セシムルヲ以テ可トス

第三 證據集取スルノ速ナルヲ要セシム公判ニ在テハ證據ハ集取セサルニアラサルモ時期ヲ失ス殊ニ合議制ニ在テハ一々會議ノ決議ヲ要スルヨリ拮取テス故ニ一人ヲシテ證據ヲ集取セシムルヲ以テ其速カニ局ヲ結フヲ得ヘシ

以上豫審ヲ設ケタル目的ニシテ且ツ一人ノ判事ヲシテ二者ヲ爲サシムルトキハ先入主タルノ弊ヲ生スヘキヲ以テ豫審判事タル事務ヲ設ケ以テ區別ヲ立テ彼此容喙セシメサラシムルニアリトス

第六十七條

現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非サルハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

現行重罪輕罪ハ別ニ起訴ナシト雖モ當然豫審判事ニ於テ取調ヲ爲スコトハ第四百四十二條ノ規定スル所ナリ故ニ現行犯ニ付テハ例外ナリシカ非現行犯ノ場合ニ於テハ必ラス檢事ノ請求アルニアラサレハ豫審判事ハ豫審ニ取掛ルコトヲ得サルモノトス之レ原則ノ所謂「告ケサレハ理セス」トノ適用ナリトス若シモ此原則ニ背キ豫審ニ取掛リタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ハ效ナカルヘシトセリ效ナカルヘシトハ無効ト云フ意味ナリ無効ニハ二種アリ一ハ當然タルト一ハ取消シ得ヘキモノトス而シテ此場合ハ無効ナリト斷言セサルヨリ見レハ取消シ得ヘキ無効ナリト云ハ

サルヘカラス故ニ訴訟關係人ヨリ無効ノ申立アリテ初メテ無効ト爲スヲ以テ精神ナルヘシ例ヘハ豫審判事ニ於テ被告人ヲ訊問スルニ於テ初メテ檢事ノ請求ナキコトヲ發見スルトキハ更ニ檢事ノ請求ヲ求ムルカ爲メニ照會スヘキモノナリ其請求アリタル後ニ於テ被告人ヲ訊問スルニ際シ其被告人ニ於テ第一回ノ訊問ハ無効ナリトノ異議申立ナキトキハ有效ナリトシ第二回訊問トシテ取調ヲ爲スヲ得ヘキモノトス而シテ此異議申立ハ絕對ニ爲シ得ヘキモノト云フヘシ故ニ第一審第二審共ニ何時ニテモ無効ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘキナリト思考ス

第六十八條

檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

又必用ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

檢事ハ社會ノ代表者ナリ公益ノ爲メニ公訴ヲ起シ其實行ヲ爲スヘキ責任アルヘキモノナリ故ニ豫審中ノ出來事ハ一々之ヲ承知シ其犯ノ有無又ハ手續ノ違犯等爲メニ事件ニ影響ヲ及ボスヘキ事項ハ注意スヘキモノナレハ何時ニテモ訴訟記録ヲ檢閱スル權ヲ有ス但豫審判事ノ取調ヲ妨害スルコトヲ得ス之レ還附スヘキ時ヲ示シタル所以ナリ

豫審事項并ニ假令豫審終結後免訴トナリシトキノ如キハ一件記録ヲ何人ニテモ閱覽セシムルコトヲ得ヘキヤ否ヤ既ニ議論アリト雖モ豫審ハ密行ヲ主旨トスルモノナレハ豫審中ハ何人モ法規ニ定ムル外ハ一切檢閲スルヲ許サズ其免訴トナリシ場合ノ如キ一件落着後ニシテ秘密ニ存スルノ必要ナキカ如キモ其後日新証憑ノ爲メ第七十五條ノ如キ規定アルヲ以テ決シテ閱覽ヲ許サ、ルモノトス之レ法曹會既ニ議決スル所ナリトス(二十八年五月十六日)

### 第一節 令狀

令狀トハ豫審判事カ罪ヲ犯シタル嫌疑者ニ對シテ呼出又ハ勾禁ヲ命スル書面ナリ而シテ訊問ヲ爲スカ爲メ又ハ逃走ヲ防クカ爲メニ外ナラス

令狀ニ三種アリ召喚狀(一)拘引狀(二)拘留狀(三)是ナリ其召喚狀及ヒ拘引狀ハ被告人ヲシテ裁判所ニ出頭セシムル目的ニシテ拘留狀ハ被告人ヲ拘禁スル目的ナリ元來人ハ自由ナリ然レトモ其自由ニシテ無制限ナリトセハ彼我互ニ抵觸チ生シ却テ自由ナキニ至ルヘシ我憲法第二十三條ハ自由ヲシテ法律ノ爲メニ制限ヲ爲スコトヲ定メタル所以ナリ其法律ノ定メタル場合トハ刑事訴訟法ニ依リテ被告人タルヘキ場合ニ生スルモノニシテ第七十一條第七十二條第七十五條ノ如シテ此處分タル實ニ公益上ノ爲メニ止テ得サル必要ノ爲メニ外ナラス其必要ハ大畧左ノ如シ

- 一、公安保護上ノ爲メ○人ノ罪ヲ犯スヤ其原因種々アリ怨恨、憤怒、嫉妬、功名、利慾等アリ各自目的ヲ達スルトキハ格別或ハ未ダ遂ケサルトキニ在テハ進ンテ目的ヲ達セント欲スルコトアルヘク又數罪俱發一ノ重キヲ以テ處斷スルカ爲メニ尙ホ自禁自棄益兇惡ヲ逞フスルノ虞アリ殊ニ夫等奸惡ノ徒ヲシテ世ノ中ニ出沒スルニ於テハ世人大ニ危懼ノ念ヲ懷キ安然タルコトヲ得ス之レ國家公益上殊ニ良民保護上被告人ノ自由ヲ停止スルハ實ニ已テ得サラシムルニアリ
- 二、事實發見ノ爲メ○被告人ヲシテ自由ニ爲ラシムルトキハ其犯罪ノ証憑ハ之ヲ湮滅セシメ無罪ヲ示シムルノ材料ヲ造ルニ至リ事實發見ヲ妨クニ至ル而シテ終ニ奸惡ノ徒ヲシテ益々兇惡ヲ逞フスルニ至ルヘシ之レ已テ得サルニ出テタル處分ナリ

トス

三 裁判執行上ノ爲メ○刑ヲ言渡スモ其執行ナキトキハ刑罰ヲ加ヘタル效ナキニ至ル從テ其懲戒ヲ示スニ足ラサルナリ其目的ヲ達センニハ其身ヲ勾束シ執行ノ爲メニ自由ヲ停止スルニアリトス之レ亦已テ得サルニ出テタルモノトス  
以上逮捕監禁ヲ命スル必要ニ付キ一々略説シタリ

### 第六十九條

豫審判事ハ檢事ノ起訴ニ因リ重罪、輕罪ノ事件ヲ受理シタルト

キハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

豫審判事カ召喚狀ヲ發スヘキ場合ヲ示シタリ而シテ同質ノモノアリ彼ノ証人ノ呼出狀若クハ公判ノ被告人ニ對スル呼出狀ノ如シ其區別タル別ニ他ノ理由アルコトヲ示ス只豫審ト公判トハ區別シタルノミ召喚狀ヲ出スハ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時間ノ猶豫ヲ與フ蓋シ他用ヲ便セシムルカ爲メニ餘地ヲ有セシムルニアリ第二十五條ノ猶豫時間ト長短アリ其主旨異ナルヲ見ルヘシ

召喚ニ應シ出頭シタル被告人ハ豫審判事ハ即時之ヲ訊問スヘシ若シ假令他用ノ爲メニ遅クナルト雖モ必ラス出頭ノ日即チ午後十二時ヲ過クルコトヲ得ス之レ出頭セシメタル主旨ニ違ヘハナリ以



上期日ニ於テ若シ出頭セサルトキハ第七十一條ニ其制裁アリ即チ拘引狀ヲ發セラル、モノトス

**第七十條** 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

**註釋** 豫審判事ニ在テモ其管轄外ニ權力ノ及フヘキモノニハアラサルナリ即チ自己ノ管轄内ニ於テ其職權ヲ行フノミ其管轄外豫審判事ノ在職セル地方裁判所ノ管内ハ同一ナリトス故ニ召喚狀ヲ受クヘキ被告人カ其管轄内ニ住セサルトキハ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ヲ囑託スルコトヲ得ヘシ又豫審判事アラサル地ナルトキハ其管轄セル區裁判所判事ニ囑託スルモノトス尤トモ何レニ於テモ豫審判事ノ任意ニアレハ必ラス囑託スヘシト云フニアラス其囑託スヘキモノトセハ訊問スヘキ條件ヲ明示シ十分受託判事ヲシテ了解セシムルコトヲ要ス

囑託ハ訊問ノミニ限ラス拘留護送ヲモ囑託スルコトヲ得ヘシ而シテ事急ナルトキハ書面ヲ以テ爲スコトヲ得ス法曹會ハ左ノ如ク決議ヲ爲シ現今ノ取扱ハ一致シタリ(裁辨一三一)  
被告人ノ訊問及ヒ拘留護送ハ電信ニテ之ヲ囑託スルコトヲ得蓋シ本法中特ニ文書ヲ作ルヘキコト命シタル場合ヲ除ク外ハ必スシモ文書ヲ用ユルコトヲ要セス而シテ囑託ノ事タルヤ之ヲ委囑スル者ト之カ囑託ヲ受クル者トノ間ニ其意志ヲ通傳スルヲ以テ足レリトシ其方法ノ如キハ電信ニ依ルモ可ナリ又電話ニ依ルモ可ナリ何レモ事機ノ須要ニ應ジ適當ノ手段ヲ取ルチ宜シトス況ヤ從來一般ノ慣例ニ於テ之ヲ許シタルニ於テチヤ(二十五年三月二日)

**第七十一條** 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭

セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

**註釋** 被告人其召喚狀ヲ受ケナカラ出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得セシム之レ出頭セラル制裁ナリトス第六十九條ニ依レハ其罪質ノ如何ヲ問ハス召喚狀ヲ發ス其重罪輕罪然ニ罰金ノ刑ニ該ルモノト雖モ同一タリ而シテ本條ノ制裁モ亦同一ニシテ自由刑ト財産刑トハ區別セス故ニ本條ニ依レハ假令罰金ノ刑ナリト雖モ出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ヘキハ論テ俟タス然ルニ第五十八條第二項ノ如キ第七十八條ノ如キ其精神ヨリ見ルトキハ罰金ノ如キハ決シテ勾引狀ヲ發スルコトヲ許サ、ルニアリ蓋シ法律ノ明文ハ區別ナキモ立法ノ精神ニ依リ豫審判事ニ於テモ輒ク勾引狀ヲ發セサルチ可トス

**第七十二條** 豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

- 第一 被告人定リタル住所アラサルトキ
- 第二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ
- 第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アルトキ

**註釋** 本條列記ノ場合ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ヘキモノナリ即チ第六十九條ノ例外ニ屬ス蓋シ其各號ニ付テハ一々理由アリ第一ハ無益ノ手續ヲ爲スチ省キタリ被告人ノ定マリタル住所アラサルニ先ツ召喚狀ヲ發スト云フモ發スル目的ナシ初メヨリ無益ノ手續ヲ爲ス必要ナシ第二ハ公

益ノ爲メニ害ヲ生スルヲ防クナリ直チニ拘引セサレハ回復スルコトヲ得サラシム第三ハ召喚狀ヲ發スルカ如キ迂遠ノ手續ヲ爲シ居ルトキハ被告人ヲシテ兇行ヲ逞フセシムル恐レアリ之ヲ防クニハ直チニ拘引狀ヲ發スルニアリトス

前條ト同シク本條ニハ罪質ノ區別ナキモ彼ノ罰金ノ刑ノ如キハ實ニ不當ノ處分ト云フヘシ

第七十三條

勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間

ヲ經過スルトキハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

拘引狀ハ巡查、憲兵卒之命ヲ受ク故ニ巡查、憲兵卒ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引

致スヘシ豫審判事ハ被告人ヲ四十八時間内ニ訊問スヘシ若シ其時間ヲ經過シタルトキハ拘留狀ヲ

發スルニアラサレハ當然之ヲ釋放スヘシ左レハ拘引狀ノ効力ハ四十八時間ニアリ故ニ假令如何ニ

長カ引ク場合ト雖モ右時間ヲ經過スヘカラス必ラス放免スルカ又ハ第七十五條ノ規定ニ從ヒ拘留

狀ヲ發スルカ何レカ一途ニ出テサルヘカラス

第七十四條

豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾

病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ被

告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

被告人病氣等其他正當ノ事故アリテ召喚狀又ハ拘引狀ニ應スルコト能ハサルトキハ被告人ノ

所在ニ付テ訊問スルコトヲ得ヘシ此方法アラサレハ豫審處分ヲ爲スコトヲ得ス

第七十五條

勾留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト

思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス但被告人逃亡シタル場合ニ於テ

ハ其訊問ヲ爲サスシテ之ヲ發スルコトヲ得

拘留狀ヲ發スル場合ハ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノト思料スルトキニアリ而シテ此思料ハ被

告人ヲ訊問セサルトキハ知ル能ハサレハ勾留狀ハ必ラス訊問後ニ發スルヲ原則トス即チ召喚狀ニ

應シテ出頭訊問ヲ受ケ又ハ勾引狀ニ依リ引致セラレテ訊問ヲ受ケタル後ニアリトス然ラサレハ果

シテ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノナルヤ否ヤ知ル能ハサレハナリ

其被告人逃走シタルトキハ其訊問ヲ爲サスシテ勾留狀ヲ發スルコトヲ得ヘシ之レ必要處分ノ制限

ナリ

勾留狀ノ効力ハ召喚狀及ヒ勾引狀ト異ナリ實ニ至大ノモノナリ豫審ヨリ公判、公判ヨリ上訴、上

訴ヨリ判決確定執行ヲ始ムルマテ効力ヲ有ス

第七十六條

總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス

可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等ヲ明示ス可

又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可

召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾引狀、勾留狀ハ巡查、憲兵卒  
ヲシテ之ヲ執行セシム

令狀ノ書式及ヒ送達、執行方法ヲ規定ス其召喚狀ト勾引狀及ヒ勾留狀ト異ナルハ勾引狀勾留  
狀ノ執行ハ公力ヲ要スルヲ以テ巡查、憲兵卒ヲシテ執行セシムルニアリトス

第七十七條 勾引狀、勾留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查、憲兵卒數人  
ニ分付スルコトアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其贖本ヲ下付ス可シ此場合  
ニ於テハ其正本、贖本ニ執行ノ場所、日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺印  
セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ  
犯人ヲ捜査スルニ於テ四方ニ徘徊スルノ疑アルトキ諸方ヘ執行セシムルカ爲メニ數通ヲ作ル  
ニアリ

第七十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他  
人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルト  
キハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ  
前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り

立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店、割烹店其他夜間ト雖  
凡衆人ノ出入スル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限り何時ニテモ搜索ヲ爲ス  
コトヲ得

令狀即チ勾引狀、勾留狀ノ執行手續ヲ示ス而シテ末項但書公開トハ旅店、割烹店、劇場、寄  
セ席等包含スト雖モ假令彼等ノ店舖ト雖モ家人ノ爲メニ設ケタル居間ハ決シテ公開ニアラス下宿  
人ノ如キ室モ亦同シ

大審院ハ通常ノ家宅ニ於ケル夜間ノ搜索ハ不法ナルカ故ニ其搜索ニ因リ成立シタル檢証調書ハ無  
效ナリト判決セリ(二十七年四月卅日)

第七十九條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛  
匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡查、憲兵  
卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡查、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ  
示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

豫審判事ノ職權ハ其管轄地内ニ限ルヲ以テ本則トスルモ本條ノ場合ハ其特例ヲ示セリ之レ潛  
匿シタルヲ知り且事件ノ急速ヲ要スルカ故ナリ

巡查憲兵卒ハ令狀ノ執行ニ付テ本條第二項ノ如ク爲スヘキモノトス之レ執行スルニ付テモ各管轄

アリ漫リニ他ノ管轄内ニ於テ執行スルコトヲ許サ、レハナリ故ニ令狀ヲ示シ執行ヲ求ムルニアリトス

**第八十條** 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ各檢事

長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲スコキコトヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲

サシム可シ此場合ニ於テ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效ヲ有ス

註釋 本條ノ場合ハ實ニ重大ナル犯罪ニ適用セル規定ナリ故ニ常ニ之ヲ用ユルコト稀ナリ

**第八十一條** 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對シ令狀

ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示スコシ其長官又ハ隊長

ハ己ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可

シ

註釋 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬トハ即チ現ニ軍籍コアルモノヲ云フ此等ノ軍

人軍屬ハ何レモ軍旗ノ下ニ居ラシメ隊伍編制上變更ヲ生スルコト勿カラシムルカ故ニ所屬ノ長官

又ハ隊長ニ令狀ヲ示シ應スルヤ否ヤノ處分ヲ爲サシム而シテ本條ノ場合ハ營中ニアルトキト行軍

中トナ問ハサルナリ

**第八十二條** 勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ引

致スコシ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡スヘシ

註釋 拘引狀ニ依リ引致シタルモノハ其令狀ヲ發シタル判事ニ引渡ス之レ四十八時間内ニ訊問ヲ爲

ス要アレハナリ勾留狀ニ依ル人ハ其制限ナク且明文上某々ノ監獄ニ留置スル旨ヲ記載スルモノナ

レハ其記載シタル監獄署ニ送致シ入監セシムルニアリ若シ其記載ノ監獄署カ隔タリシトキハ假ニ

最近ノ監獄署ニ引致シ置キ漸次其記載ノ監獄ニ轉送スルニアリトス

**第八十三條** 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲兵卒ハ之ヲ執行シタルコト又

執行スルコト能ハサルトキハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載スコシ

巡查、憲兵卒ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出スコシ

註釋 令狀執行者ハ令狀ノ正本ニ一々事由ヲ記載シ取扱ヲ明ラカニシ之ニ關スル書類アルトキハ之

ヲ檢事ニ差出スコシ

**第八十四條** 勾留狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ

之ヲ本人ニ送達セシム可シ

註釋 本條ノ場合ハ公力ヲ要セス故ニ送達スルニアリ

○刑事訴訟法 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

第八十五條 密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬、故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得

書翰、書籍其他ノ書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告入ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

接見手續及口書翰、書類其他ノ書類授受手續ヲ定メタリ尙ホ之ニ關聯スルハ監獄則ニ規定スルヲ以テ參照スヘシ

第八十六條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾留狀ヲ取消ス可シ

勾留スヘキ必要ナキトキハ速カニ之ヲ取消スハ當然トス

第二節 密室監禁

未決監ニ入ルモノハ一人一房ニアラス必ラス今日ノ制度ハ一房數人ヲ混居セシム故ニ事實發見ヲ妨グルコトアリ例ヘハ放免セラル、モノアルトキハ放免後ノ証據湮滅ヲ囑托シ又ハ陳述ノ方法ヲ習ヒ得ル等弊害多シ故ヲ以テ本節ヲ設ケ事實發見ニ必要ナラシム殊ニ注意スヘキハ判事申中此制度ヲ以テ白狀ヲ促ズノ用具ナリト誤解スル人アリ甚タ危險ナリト云フヘシ

第八十七條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタルトキハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得

密室監禁ヲ爲ス場合ヲ規定シタリ

第八十八條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

密室ニ監禁スル主旨ハ交通ヲ遮斷シ且内部ノモノト雖モ成ルヘク近ツカサ、ルヲ主トスルニアレハ接見ハ勿論書類其他ノ物品ノ授受ヲモ許可ヲ要セシム

第八十九條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得

言渡ヲ更改スルトキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ  
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問ス可シ

人ハ社交的動物ナリ故ニ一人獨居セシムルトキハ精神錯亂スルヲ恐ル故ニ十日ヲ以テ期限トシ之ニ超過スルヲ許サス若シ尙ホ此處分ヲ必要ナリトセハ更改ヲ許ス其事由ヲ所長ニ報告シ監督

ノ責ヲ守ラシム其何レモ十日内ニハ少クトモ二度訊問スヘシ事實發見ノ爲メナレハ其發見ノ爲メニ必要ナリトス  
十日ノ日數ハ第十五條ノ期間ニ相當ス故ニ初日ヲ算入セサル原則ヲ適用シ言渡ノ翌日即チ即時監禁セハ其監禁ノ翌日ヨリ起算スヘキモノトス

### 第三節 證據

釋義

裁判上ノ處分ハ一ニ事實ノ真相ヲ得ントスルニ外ナラス然レトモ吾人ハ神ニアラス故ニ必ラス事ノ眞實ヲ發見シタリト云フヲ得サルノミナラス又必ラス其眞實ヲ得ルコト難シ只心裏ニ於テ眞實ナラント確信スルノミナリ故ニ確信ハ必ラス眞實ニアラス

刑事訴訟上ニ於ケル事實發見モ此確信ニ依リテ眞實ナリトスルノミ最モ眞實ヲ得ント欲スルモノ之レ到底望ムテ得ヘキコトニアラス歐洲各國中或ハ陪審官ノ制ヲ設ケテ眞實ヲ得ントスル汲々タリ然レトモ之レ決シテ眞實ヲ得ルニアラス矢張一ノ確信ノミ我邦其陪審ノ制ナシト雖モ地方裁判所以上ニ在テハ合議制ヲ採リ以テ陪席ヲ設ケ虛心平氣可成的事ノ眞實ヲ得ントスルニアリ其方法ハ他ナシ証據ニ依テ眞實ナラント確信スル迄ニ外ナラス

其証據ト爲スヘキモノハ如何ナルモノヲ以テスルカ我邦古昔ハ彼ノ探湯盟仲(和名抄ノ「クガダチ」是ナリ)ト云フモノアリ或ハ斧ヲ火色ニ燒キテ掌ニ置キタルコト(日本書記允恭天皇ノ部)アリ又歐洲中古ノ神裁ノ如キ又ハ裁判上ノ決闘ノ如キ何レモ罪斷ノ証據ト爲セリ然レトモ之レ宗教的ノ迷信ニ出テタルモノニシテ決シテ確信ヲ得ル正當ノ道ニアラサルナリ  
後世行ヒタル拷問ノ如キモ亦文明的証據ニハアラサルナリ

我邦ニ於テモ文明ノ域ニ進ムニ及ンテ証據ノ方法ヲ採用スルニ注意シ法律ヲ以テ之ヲ示シ疑ナカラシム是レ本節ノ規定アル所以ナリ

## 第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徵憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

註釋

適法ノ証據トナルヘキハ本條列記ノ諸般ノ事項タリ然レトモ裁判官ヲシテ此諸種ヲ以テ必ラス罪ヲ斷スヘシト命シタルニアラス之ヲ採ルト否トハ裁判官其人ノ腦裏ニアリ只此内ノ一若クハ二ヲ以テ又ハ二以上ニ依リテ有罪又ハ無罪ヲ判斷セシムル所謂材料ニ供シタルノミ其取捨スルニ至リテハ裁判官ハ虛心平氣以テ判斷スヘシ  
証據ト徵憑ト區別アルカ如何ナルモノカ証據ニシテ如何ナルモノヲ徵憑ト名ツケタルヤ此問題ハ法曹會議ニ於テ明ラカニ答ヘタリ即チ左ノ如シ

事實參考人ノ供述ハ証據トシテ採用シタル判決ハ破毀ノ原因ト爲スヘキモノニアラス証據ト云フモ徵憑ト云フモ承審官ノ心証ニ及ス所ノ影響ハ必ラス其間差別アルヘキモノト斷定シ難シ然レトモ法律上ニ於テハ特ニ証據ト徵憑トヲ書キ分ケタルヲ以テ其混同スヘカラサルハ論ヲ俟タスト雖モ(被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人、鑑定人ノ供述ハ証據ニシテ被害者ノ告訴狀、盜難届書、被告人及ヒ共犯人ノ供述、參考人ノ供述其他諸般ノ事實ハ徵憑ナリ而シテ証據ト徵憑トノ集合之ヲ証憑ト云フ九〇、二二三、二二四等)徵憑モ亦証據ノ部類タルコト疑テ容レサル所ナレハ參考人ノ供述ヲ証據ト沈稱シタリト爲メニ破毀ノ原因トナスヘキモノニアラス(二十六年九月廿一日)又証憑ノ取捨ニ付テハ大審院ノ判例多シ  
事實承審官ハ証據ヲ取捨採擇スルノ特權ヲ有スルモ判官自ラ其眞偽ヲ決スルニ狐疑スヘキ事物

ヲ取テ確証トナスコトヲ得ス(二十一年二月廿四日)豫審判事ノ命ニアラスシテ醫師若クハ私立醫院ノ名稱ニテ作リタル診斷書ハ裁判上直チニ之ヲ無効トシテ心証ノ資料ニモ供スヘカラストノ法條及法理ナケレハ之ヲ採用スルモ違法ニアラス(二十六年五月十一日)假令勾留狀ハ不法ナリトスルモ已ニ公庭ニ於テ正當ナル手續ヲ以テ審問ヲ受ケ爲シタル供述ナレハ之ヲ採テ證據トナスモ敢テ妨ケナシ(二十七年八月十六日)証人訊問調書ニシテ改竄挿入ノ部分ノ無効ニ歸シ其他全部有效ナル場合其有效ノ調書ヲ斷罪ノ資格ニ供シタリト認ムルハ當然ナリトス(二十七年十月廿五日)檢事ノ起訴ナキ被告人ノ調書ヲ證據トシタルハ不法ナリ(同年十一月廿七日)巡査ノ復命書ハ一定ノ方式ナシ斷罪ノ資料ニ供スルコトヲ得(二十九年二月六日)

**第九十一條** 豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

〔註釋〕 豫審判事ノ證據蒐集スル職務ナルコトヲ明テカニセリ

**第九十二條** 豫審判事臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

〔註釋〕 調書作成方式ヲ定ム蓋シ立會人ヲ要スルハ其專横ヲ防キ處分ノ適法ヲ証スルカ爲メナリ其法式ヲ欠キタルモノハ之ヲ無効トス

大審院ノ判例ニ曰ク立會人ナクシテ作りタル檢証調書ハ無効ナリ隨テ之ヲ以テ斷罪ノ證據トナシタル裁判ハ不法ナリ(二十六年八月三日)檢証處分ヲナスニ際シ其實地見聞ニハ立會ヒタルモ檢証調書調製ノ際ニ立會ハサルモノヲ立會人トシテ署名捺印セシメタルハ不法ナリ(二十七年三月十五日)逮捕及告發調書ハ立會人ヲ必要トスル調書ニ非サレハ立會人ナシト雖不法ノ調書ト云フヘカラス(二十七年十月廿五日)

**第四節** 被告人ノ訊問及ヒ對質

**第九十三條** 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

〔註釋〕 被告人ヲ第一着ニ訊問スルハ全ク自白ヲ得ントスルニ外ナラス加之事件ニ付テノ辨解ノ機會ヲモ得セシムルニアリ若シモ急速ヲ要スルトキハ被告人訊問後ニシテ檢証ヲナシ又ハ証人ヲ訊問スルコトヲ得ヘシ之レ證據湮滅ノ恐レアルトキ証人ノ旅行セントシ又ハ死ニ瀕スルトキノ如キ場合ナリトス

**第九十四條** 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユ可カラス

**註釋** 被告人ノ訊問ハ從來彈劾方法ニシテ時ニ拷問ヲ爲シタリシカ文明ノ世決シテ斯ノ如キ殘酷ノ所爲ヲ許サズ被告人ノ自狀ヲノミ斷罪ノ資料トセサルヲ以テ決シテ強迫的訊問ヲ爲スノ必要ナキニ至レリ加之恐嚇又ハ作言ヲモ用ユルコトヲ許サ、ルモノトス例ヘハ共犯人ハ既ニ服罪シタリ又ハ何々ト申立タリ証人ハ何々ト云ヒタリト云ヒ事實ニ反スルコトヲ強ユルカ如シ方便ハ之ヲ用ユルモ可ナリトノ學者アリ然レトモ方便モ一種ノ詐欺ナリ方便ヲ以テ自白ヲ促スカ如キハ裁判官タルモノ、威信体面ニ關シ正當ノ訊問ナリト云フヘカラス既ニ事實ニ反スル以上ハ其方法ノ如何ヲ問ハス之ヲ用ユルハ不當ナリト云ハサルヘカラス

**第九十五條** 裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

**註釋** 訊問ノ方式ヲ定メタリ本人無筆ニ付キ書記代書スル旨ノ附記アルモ本人ノ捺印ナク又捺印スルコト能ハサル旨ノ付記ナキ調書ハ本條ノ要式ヲ欠キタル者ナレハ之ヲ以テ斷罪ノ資料ニ供スルヲ得ス(二十七年二月十九日大審院判決)

**第九十六條** 被告人其供述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

**註釋** 被告人ヲシテ供述ニ付増減變更ヲ爲スコトヲ許スモノナリ何人モ時ニ間違ヒテ申立ツルコトアルヘシ之レ本條ニ於テ更ニ訊問ヲ爲スヘキ規定ヲ設ケタルニアリ大審院ハ初メ被告人ヨリ此申立アルトキ豫審判事ニ於テ之ヲ爲サ、ルトキハ全部調書ヲ無効ナリト判決シテ一時判例トシタリシカ明治二十八年四月廿六日之ヲ改メ左ノ如ク聯合判決シタリ

豫審判事ニ於テ被告カ其供述ニ付増減變更ノ申立ヲナシタルニ豫審判事ハ更ニ訊問ヲ爲サズ直チニ豫審終結シタルトスルモ此申立ハ豫審調書完成以後ニ係リタルモノナルヲ以テ既ニ完成シタル豫審調書カ爲メニ無効ニ歸スル理ナシト云フニアリ

**第九十七條** 被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

**註釋** 辯護ノ材料ヲ與フ但シ他ノ書類ノ謄本ヲ求ムルコトヲ許サ、ルハ密行ニ係ルカ故ナリ

**第九十八條** 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

**註釋** 事實發見ノ爲メニ必要ナリトシ豫審密行ノ主旨ヲ緩ニシタリ

**第九十九條** 書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

**第九十五條第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス**



對質ニ付テハ別ニ調書ヲ作ルヘキモ密行主義ハ之ヲ守リ單ニ對質ニ關スル部分ノミ讀ミ聞カスヘキモノトス

**第一百條** 被告人又ハ對質人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ  
被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ

聾ナルトキハ聽官ヲ失ヒタルヲ以テ耳、聽ク能ハス故ニ書面ヲ以テス啞ナルトキハ聲ヲ發スルコト能ハサルヲ以テ書面ヲ以テ答ヘシム若シ文字ヲ知ラサルトキハ書面ヲ以テ問答スルコト難シ故ニ通事ヲ用ユ即チ常ニ其モノニ接シテ知ルコトヲ得ヘキ人ヲ用ユルヲ可トス  
其國語ニ通セサルトキモ亦同シ通セサルコトハ一ナレハ通事ヲシテ譯セシム(裁判所構成法第百十五條以下參照)

**第一百一條** 通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ  
書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

**第三十六條** 第三百二十七條第百四十一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
通事ハ本人ノ良心ニ誓ハシメ正實ニ通譯セシムルニアリ

**第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押**

**第二百二條** 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ

場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

事實發見ノ爲メニ必要ナリトスルトキハ檢證ヲ爲スコトヲ許ス蓋シ一見百聞ニ如カスト云テカ如ク其犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ實地之ヲ目撃スルトキハ其犯罪ノ性質摸樣狀況ヲ知ルコト尤トモ多シ然レトモ臨檢ハ費用ヲ要ス故ニ必要ナルトキノ外ハ漫リニ爲スヘキモノニアラス本文ノ必要ヲ十分味フヘキモノトス

**第二百三條** 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法、日時、場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ  
又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

摸樣ニ付テハ勿論總テ之ヲ調書ニ作ルハ後日裁判官ヲシテ實地ハ斯ノ如シト感動セシムル材料ナレハ成ルヘク其詳密ヲ要ス所謂犯罪場所ノ寫眞ト云フヘシ

**第二百四條** 豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得  
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス

**第七十八條** 第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
家宅ハ一個人ノ城廓ナリ之ヲ漫リニ侵ストキハ人民ハ安全タルコトヲ得ス故ニ憲法ハ之ヲ保

障シタル所ナレトモ公益ノ爲メニ法律之ヲ許可シ搜索ヲ爲サシムルモノナリ即チ本條ノ如シ  
藏匿トハ文字其モノヨリ見ルトキハ必ラス隠蔽スル所爲ナカラサルヘカラサルカ如キモ本條ノ意  
味ニ於テハ占有スルナラント思料セハ可ナリ即チ所持セシナラントセハ搜索スルコトヲ得ヘシ又  
住居トアルモ官廳ハ勿論建造物ハ皆包含ス

令狀執行ノ場合ニ於ケル家宅搜索ト本條ノ家宅搜索トハ差異ナルコトヲ知ル可シ彼レニアリテハ  
市町村長又ハ隣佑ナレハ二名以上ノ立會ヲ要スルモ此ハ被告人又ハ同居ノ親屬若シテサルトキ  
ハ市町村長ノ立會ヲ爲スモノナリ蓋シ此差異アルハ其搜索スル人ノ身分ニ高下アルノミナラス本  
條ハ書記ノ立會アリ殊ニ本條ハ物件ノ藏匿ニ止マリ被告人ノ潛匿ニアラス從テ逃遁ノ恐ナキモノ  
ナレハ一刻モ忽ニスヘカラサル程ノ急迫ナル場合ニモアラス又物件ノ搜索ハ被告人ノ搜索ト異ナ  
リ財産ヲ搜索シ往々間違テ生シ易キモノナレハ隣佑ノ立會ハ未タ以テ充分ノ保護ナリト云フヘカ  
ラス故ニ宜シク法律ノ規定ヲ守リ他ニ便利ノ方法ヲ求ムヘカラサルモノトス(二十五年三月二日  
法曹會議決)

第二百五條 豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者

ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得  
人身ヲ漫リニ検査スルハ亦爲スヘカラサルカ如キモ公益上已ヲ得サルニ出ツ本條ハ物件ヲ藏  
匿スル疑アルトキノミ規定スト雖モ然ラサル場合モ多シ毆打創傷セラレタルトキノ如キ強姦セラ  
レタルトキノ如キ墮胎シタルトキノ如キ皆局部ノ検査ヲ要スヘシ

第二百六條 豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ

足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其

物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

臨檢、搜索ノ結果發見シタル物件アルトキハ之ヲ差押ユル權アリ蓋シ證據物件ナレハナリ其  
物件ノ官私ヲ論セサルコトハ疑ヒナシ只注意スヘキ點ハ官廳殊ニ裁判所ノ如キハ證據トシテ差出  
シタルモノナレハ豫審判事ノ必要トシテ差押ユルト同シク官廳又ハ裁判所モ亦必要アルヘシ互ヒ  
ニ官權ノ衝突ヲ爲スコトアルヘシ故ニ豫審判事ハ可成的必要ニ迫マラル、マテハ差押ヲ爲サル  
ヲ以テ正當トス  
本條ノ規定ハ憲法第二十七條ノ規定ニ依ル法律ノ定メタル所ノ一ニ係レリ

第二百七條 豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルト

キハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得  
物件ノ散逸ヲ防キ現場ノ變更ヲ防クニ外ナラス看守者ハ巡查、憲兵卒ヲ以テ可ナリトスルモ  
或ハ事件ニ關係ナキ人民ヲ置クモ可ナリ

第二百八條 被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立

會ハシムルコトヲ得  
若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ  
立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

被告人ハ自己ノ權利ヲ保護スル點及ヒ辨解ノ材料トシテ立會スル權ヲ有ス其自ラ爲ス能ハサ  
ルトキハ代理人ヲ立會ハシムルコトヲ得ヘシ但勾留セララル身ハ自身立會フコトヲ得サルハ勿論  
○刑事訴訟法 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及豫審

敢テ立會ヲ請求スル權利ナキヲ示ス

**第百九條** 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其

物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

**第百十條** 豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要

ナリトスルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

**第百十一條** 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得ス

シテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スル

コトヲ得

**第百十二條** 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、物件差押

ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

**第百十三條** 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵

道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ

發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコ

トヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

**第百十四條** 證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默秘ス可キ義

務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押へ及ヒ開披スル

第二百二十五條ノ意味ト同一ニシテ一ハ供述ニ係リ一ハ物件ニ係ル故ニ其黙秘スヘキ義務アル點ニ於テハ同一タリ左レハ本人ノ承諾ナキニ強テ之ヲ爲スハ却テ弊害アリ之レ本條アル所以ナリ

第六節 證人訊問

西譯ニ曰ク証人ハ裁判上ノ耳目ナリト宜ナル哉証人ノ供述ニシテ眞實ナリトセハ其證據ハ第一位ニシテ他ニ及フモノナシ然レトモ証人モ亦人ナリ情慾ニ陷イテザルコトナシトセス愛憎畏懼ノ念ニ誘ハレサルコトナシト云フヘカラス故ニ其實ノ適合スルヤ否ヤヲ審案シテ之レカ採否ヲ決セサルヘカラス之レ證據方法ニ於ケル所謂裁判官ノ自由ニ放任シタルモノト爲シタル所以ナルカ

大審院ノ判例ニ於テモ証人喚問ノ請求ヲ許否スルハ判事ノ職權ナリ(二十四年五月十五日)トシ又豫審判事ニ於テモ故ナク証人ヲ訊問スルコトヲ許サス必ラスヤ法律ノ規定ニ於ケル場合ナラサルヘカラス殊ニ法廷ノ外ニ於テハ最モ然リトス同判例ニ豫審判事ハ法律ノ規定アル場合ノ外法廷外ニ証人ヲ呼出シ訊問スルヲ得ス(二十八年四月十八日)ト決シタルカ如シ

少シク注意スヘキハ或ル論者ニ於テハ附帶ノ私訴ニ付テハ証人鑑定等總テ民事訴訟法ノ規定ヲ適用シ本節及ヒ次節ヲ準用スヘキモノニアラスト此論決ハ刑事附帶ノ私訴ニ付テハ參考人タルヘキモノナシ何レモ証人タルモノナリ又費用ヲ豫納セサルトキハ証人鑑定人等ヲ呼出サ、ルモノナリ以上ハ民事訴訟法ヲ適用スルカ爲メナリ

然レトモ此論ヤ實ニ法外ナルモノニシテ決シテ本法ヲ解釋スルニ於テハ許サ、ルモノトス何ントナレハ私訴ハ刑事公訴ニ附帶シテ便利審理スルモノナレハ何レモ刑事ノ訴訟法ノ規定ニ依リテ審理スヘキモノトス故ニ本法中特ニ民事訴訟法ノ規定ヲ準用スト

ノ明文ナキモノニ付テハ總テ本法ヲ適用スヘキヲ至當トス左レハ証人モアルヘク參考人モアルヘシ又敢テ豫納金ヲ要セサルノミナラス干渉主義ヲ以テ裁判官自ラ証人ヲ呼出シ得ヘキハ勿論ナリトス其証左ハ彼ノ故障上訴ノ期間ノ如キ書類調製方法ノ如キ辨論順序ノ如キ言渡手續ノ如キ皆公訴ト同一ノ主義ヲ採レルヲ以テ知ルヘシ

第一百十五條 證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時、場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

証人ヲシテ如何ナル事件ノ爲メニ呼出テ受クルヤヲ知ラシメ且拘引云々ノコトヲ記載スルハ一ハ法律ヲ知ラシムルノミナラス一ハ告知ニ因リテ出頭ヲセシムルカ爲メニアリトス

第一百十六條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

証人ハ必ラス出頭スヘキナ正則ニシテ之レ公義務タリ然レハ病氣ノ如キ又ハ正當ノ事故等例  
ヘハ傳染病ノ爲メニ交通遮断ヲ受ケタルモノ、如キハ到底出頭スルコト能ハサルモノナレハ例外  
トシテ豫審判事其所在ニ就テ訊問スヘキモノトス其出頭スル能ハサルコトハ之ヲ疏明スヘキモノ  
タリ而シテ其疎明トハ裁判官ヲシテ信實ナリト思料セシメ直チニ立証シ得ヘキ場合ヲ云フ必ラス  
証據ヲ提出セサルヘカヲサルモノニハアラサルナリ

第一百七七條

証人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナル  
トキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ  
即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル  
トキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ  
証人トシテ裁判所ニ出頭スルハ公義務ノ一ニシテ何人ト雖モ之ヲ免カル、コトヲ得サルモノ  
ナリシテ証スルハ本條ニ於テ之ヲ見ル即チ軍人軍屬ト雖モ証人タル義務ハ免ル、コトヲ得サルナ  
リ只普通ノ場合ト異ナリ軍紀謹肅ナルヨリ長官ノ許可ヲ得セシムルコアルノミ

第一百八條

豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應  
セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓  
以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ  
得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チ  
ニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可  
シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍  
事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引ニ付テモ  
亦同シ

出頭義務ヲ免カレス又出頭ノ延期ヲ與ヘラレサルモノニシテ其呼出ノ日時ニ出頭セサルトキ  
ハ本條ノ處分ヲ受クルモノトス

借罰金ハ輕罪コシテ裁判法上ノ一大變例ナリ蓋シ罰金ハ輕罪ノ一ニシテ必ラス公訴ヲ提起セサル  
ヘカラス公判ヲ開カサルヘカラス判決ヲ言渡サ、ルヘカラス然ルニ此場合ハ檢事ノ公訴アルニア  
ラス公判ヲ開クニアラス欠席ノ處對席ト同一ニ判決ヲ言渡ス等實ニ變例ナリ其所以ハ蓋シ事實發  
見ヲ速カニ若シ正規ノ如ク罰金ヲ言渡スカ如キハ時日淹滞証據集取上至大ノ不便ヲ來タスカ爲  
メニ外ナラス

事實參考人ト雖モ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ科ストノ論アリシカ証人ト明記セル点ヨリ見レハ  
參考人ハ包含セサルコト勿論タリ法律ノ精神ハ或ハ如何ナルモ法文上如何トモ爲ス能ハサルモノ  
ナルヘシ

**第一百十九條** 豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セサリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

**註釋** 純然タル刑罰ノ如ク上訴ヲモ爲サズシテ後日取消スカ如キモノニアラス其送達ヨリ三日内ニアリテハ辨解ヲ以テ決定ヲ取消スコトヲ得セシム之レ其主旨トスル所事實發見ノ爲メニ加ヘタル制裁ニシテ出頭シテ訊問ヲ受クルトキハ敢テ罰スコキコト程ノ必要アルモノニアラス故ニ正當ノ理由ナルコトヲ辨解セハ其決定ヲ取消スヘキモノトス

**第一百二十條** 證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ疏明ス可シ

**註釋** 証人ニ於テ呼出狀ヲ持參シタルトキハ其呼出シタル人物ト同一ノモノナリト推定シ証人トシテ訊問ヲ爲スヘキモ何ノ疑フ所アラサルヘシト雖モ其呼出狀ナキトキハ其人果シテ呼出シタル人ナリヤ否ヤ認メ難シ故ニ其人違ナキコトヲ疏明シ以テ訊問ヲ受ク可キモノトス若シ然ラザルトキハ或ハ偽証ヲ爲シ犯罪人ヲシテ無實ノ難ニ陷ラシメ又ハ法網ヲ脱セシムルニ至ルヘシ

**第一百二十一條** 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第一百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

ガ爲メナリ

**第一百二十二條** 豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

**註釋** 宣誓セシムルハ良心ニ對シテ正當ノ事ヲ陳述スヘシト誓フモノナリ其事項ハ何事ヲモ默秘セスト即チ其見聞シタル事ハ細大トナク之ヲ供述シ寸毫モ脱漏スルコトナキヲ意味シ何事ヲモ附加セサルトハ自己ノ妄想臆斷ヲ交ヘス敢テ針小棒大ノ供述ヲ爲サストノ意味ナリ

右ノ宣誓後供述スルモノヲ以テ証人ノ陳述ト云フ故ニ宣誓前ノ訊問供述ハ証人タル供述ニアラスト云フヘシ從テ證據トシテ採用スヘカラス大審院ハ宣誓前ニ訊問シタル証人ハ正當ノ証人ト認ムルコトヲ得ス(二十六年十二月十八日)ト判決シ又宣誓書ハ讀聞ケタル上署名捺印セシムヘキモノナレハ其讀聞ケタルコトヲ調書ニ記セサルモ記名調印アル上ハ不法ノモノニアラス(二十八年一月九日大審院判決)ト云フヘシ

**第一百二十三條** 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルト

キト雖モ亦同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

証人タル資格ナキモノヲ列記シタリ

本條列記ノ人々ハ何レモ被告人ニ對シテ不利益ナル供述ヲ爲シ又ハ反對ニ利益ナル供述ヲ爲スモノニシテ罪ヲ斷スルニ於テ信實ナリトシテ信用スルコトヲ得サルモノニアリトス法律ハ供述ノ公平無私ヲランコトヲ欲スルモノナレハ少シニテモ嫌疑アル人々ハ之ヲ避ケサルヘカラス然レトモ事實參考人トシテ聴クカ如キハ之ヲ許ス之レ事實發見ノ爲メ必要ニシテ真相ヲ得ルコトナシトモス而シテ証人トシテ資格大ニ異ナリ宣誓ヲ爲スコトナク犯罪事實ニ付テハ直接ニ効力アリト爲スコトヲ得サルモノトス

被害者ノ如キハ証人ト爲ルコトヲ得ヘシ之レ或ハ自ラ害ヲ受ケタルヲ以テ其怨事實ヲ構造スルヤノ疑ナシト雖モ被害者カ犯人ノ刑罰ヲ受ケタルヤ否ヤニ付テ直接ニモ間接ニモ關係ヲ及ボスコトアラズ若シモ其疑アリトセハ他ノ証人ニ於テモ或ハ生スルコトアルヘシ之レ本條列記中被害者ヲ除キタル所以ナリ

大審院ノ判例多シ本條第四項ニ所謂雇人ナル者ハ被告事件ニ付取調ヲ受クル當時現ニ雇人タルモノヲ指スモノトス故ニ現在此關係ナキ者ハ當然証人タルノ資格ヲ有ス(二十二年九月廿六日)内情ノ關係民事原告人タル地位ニアルモ民事原告人ト爲リ居タル事實ナキニ於テハ之ヲ証人トナスモ違法ニ非ラス(二十四年十月十八日)銀行頭取カ告訴ヲシタル被告事件ニ付テハ其銀行ノ取締役ノ如キ役員ハ証人トナルノ資格ナシ之レ頭取ト同レク民事原告人ノ地位ニ立ツヘキモノナレ

ハナリ(同年十月十九日)刑事訴訟法ニハ民事原告人ノ代人ニ証人タルコトヲ許サ、ル規定ナキテ以テ其証言ヲ證據トスルモ不法ニアラス(二十五年六月二十七日)妾ナルモノハ一種ノ雇人ナルカ故ニ雇主タル者被告タルトキハ其妾ヲ以テ証人トナスコトヲ得ス(二十六年六月十九日)被害者ノ兄弟分トカ子分トカニ爲リタルモ法律上親屬ノ關係ナキモノハ証人タルノ資格ヲ有ス故ニ此等ノ者ノ証言ヲ取リテ斷罪ノ資料ニ供スルモ不當ニ非ラス(二十七年三月二十九日)共犯人ノ親屬ヲ証人ト爲スモ不法ニアラス(同年五月十八日)共犯者數人アル被告事件ノ証人ニ對シテハ其共犯者全体ニ付テハ証人ノ資格アルヤチ問フヘキニ之ヲ問ハサル証言ヲ共犯者全体ノ證據トシタルハ不法ナリ(同年十月九日)

第二百二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一 十六歳未満ノ幼者

第二 知覺精神ノ不十分ナル者

第三 瘖啞者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據十分ナラサル

ニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

本條モ亦証人ノ資格ニ付テノ規定ナリ其第一乃至第三ノ如キハ之レ智識十分發達シタルモノニアラサレハ其供述ハ十分信用ヲ措ク能ハス第四ノ如キハ此公權ヲ行フコトヲ得サルハ勿論第五第六ノ如キハ信用ヲ失ヒツ、アル身分ナレハ其供述ハ確實ナラサルニアリトス而シテ第六號ノ免訴トアルヲ以テ無罪ト混スヘカラス公判上無罪ト爲リシモノハ青天白日ナリ決シテ疑ヲ容ルコトナキモノナレハ証人タル資格十分アリト云フヘシ

第二百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶其身分、職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

証人トシテ證言ヲ爲スハ公義務ナリト雖モ此義務ハ場合ニ依リテ履行ヲ強ユヘカラサルモノトス即チ本條ノ如キ場合はナリ蓋シ各自ノ職務上ノ義務ト證言スヘキ公義務ト抵觸スルニアレハ一方其義務ヲ免レシメサルヲ得ス即チ此場合ハ其職務ヲ以テ重シトシ公義務タル證言ヲ爲ス義務

ヲ免レシムルニアリ殊ニ第二ノ如キハ人身保全ノ爲メ醫師、藥商、穩婆等權利伸張ノ爲メニ辯護士公證人等舊惡懺悔等ノ宗教儀式ノ爲メ神職僧侶等ヲシテ拒ムコトヲ得セシムルニアリトス證言ヲ拒ムハ故ナク之ヲ許サス必ラス拒絕タル原因ノ事實ヲ開示シ且之ヲ疏明スヘキハ當然トス

第二百二十六條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサルトキハ豫審判

事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備 後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ

證人ノ資格アリ其人違ナキトキハ之カ宣誓ヲ爲シテ証言スルヲ以テ正當トス然ルニ宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓ハ之ヲ爲スモ供述ヲ肯セサルトキハ之レ証言義務ヲ拒絕スルト一般ナリ故ニ之カ制裁ヲ加ヘサルヘカラス其制裁ハ呼出狀ヲ受ケ故ナク出頭セサルトキト同一ナリトス

第二百二十七條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムル



コトヲ得

証人ノ供述ハ其目撃セシ所ヲ眞實有ノ儘ヲ爲スニアリ必ラス雷同スヘキコトヲ防カサルヘカ  
ラズ若シ雷同ヲ爲シ又ハ故サヲニ抵觸スルガ如キ供述ヲ爲スカ如キコトアリテハ事實發見ニ苦  
ムヲ以テナリ故ニ其訊問ハ之ヲ各別ニナシ雷同ヲ防キ故意ニ抵觸セザランコトヲ避クルニアリ  
ス殊ニ被告人ノ面前ニアリテハ証人ハ後日ノ思ヒチ恐レ眞實ノコトヲ供述セサルヤヲ疑フヘシ之  
レ各別ヲ爲スヲ以テ其策トス尤トモ事實發見ノ爲メニ對質セシムルコトアルヘキハ勿論トス即チ  
人違ヒナキコト共犯ナルコト等大ニ事實上必要ナリト云フヘキモノトス

本條ハ証人トアルモ事實參考人モ包含スルニアリ蓋シ事實參考人ハ証人ノ一部ニシテ証人ノ外ニ  
事實參考人ナルモノアルコトナシ故ニ事實參考人モ亦本條ノ規定ヲ適用スルニアリトス

第二百二十八條 豫審判事ハ証人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル

トキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ証人同行スルコトヲ肯セザルトキハ第一百十八條ノ規定ニ從フ

供述ヲ確定ナラシムル爲メニ必要ナル處分ナリトス

第二百二十九條 第一百條ノ規定ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

別ニ論スルコトナシ

大審院判決ニ參考人タル外國人訊問ニ付通譯者ヲ宣督セシメサルモ其調書ヲ無効トナスコトヲ得  
ストアリ(二十八年四月二十六日聯合判決)

第二百三十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在ス  
ルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ  
帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於  
テ之ヲ訊問ス可シ

本條ハ出頭スヘキ義務アル場合ノ例外ナリ蓋シ皇族ハ其身分ヲ重ニスルヨリ大臣ハ國家ノ樞  
機ニ與カルモノナルヨリ又國會議員ニ付テハ其開會中ハ國務ニ執掌スルヨリ其人々ノ所在地ニ於  
テ訊問スヘキモノトス其大臣又ハ議員ハ所在地ノ裁判所ニ於テ訊問ヲ爲シ皇族ハ其邸ニ出張シテ  
訊問スルモノトス

第二百三十一條 豫審判事ハ証人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ

裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

証人ハ其供述ヲ變更増減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコ  
ト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ証人共ニ署名捺印ス可シ若シ証人署名捺印ス  
ルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

供述ノ確實ヲ示シ且適法ニ取調ヲ爲シタルコトヲ證明スル手續ナリトス

第九十五條ニ大審院判例ヲ列記シテ參看スヘシ

**第三百三十二條** 豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

豫審判事ニ於テ證人ヲ呼出スハ其證人ニ於テ不便ヲ蒙ラシメサルヲ要ス故ニ其證人カ裁判所所在地内ニ住スルトキハ直チニ呼出スヘキモ若シ遠隔地ナルトキハ其住居地ノ區裁判所判事ニ囑託シテ訊問セシムルヲ以テ便利ナリトス

其管轄地外ニアルトキモ亦同シ蓋シ豫審判事ハ各地方裁判所ト同一ノ管轄内ニ於テ職權ヲ有スルモノナレハナリ最トモ其裁判所ヘ呼出シテ事實取調ヘサレハ詳細知ル能ハサルトキハ假令遠方ナリト雖モ之ヲ呼出スコトヲ得ヘキハ論ヲ俟ダス

囑託ヲ受ケタル判事ハ更ニ其受託事件ヲ他ノ裁判所ヘ轉囑スルコトヲ得ヘキヤ否ヤノ問題ハ本文ニ明文ナキヲ以テ轉囑ヘ之ヲ許サスト云ハサルヘカラス殊ニ其囑託スヘキヤ否ヤ及其訊問事項ノ如キハ本件ノ豫審判事ノ權内ナレハ受託判事ハ其囑託ヲ受ケタル事項ノミヲ取調ハ可ナリ故ニ轉囑ヘ之ヲ許サ、ルヲ正當トス

**第三百三十三條** 第一百八十八條第一百九十九條及ヒ第二百二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

受託判事ハ豫審判事ト同一ノ權内ヲ以テ訊問スルヲ以テ豫審判事ノ權ハ總テ受託判事ノ事ヲ爲

スコトヲ得ヘキハ勿論ナリ

**第三百三十四條** 證人ハ出頭ニ付テノ旅費、日當ヲ要ムルコトヲ得

證人トシテ義務ヲ盡ス以上ハ爲メニ生シタル損害ヘ之ヲ償ハシメサルヘカラス之レ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得ヘキモノトス其金額ニ付テハ刑法附則第四十九條ニアリ參看スヘシ

**第七節 鑑定**

鑑定トハ學識技藝職業ニ依リ經驗アルモノ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ檢査考査スルヲ云フ而シテ證據蒐集ノ一方法タリ例ヘハ犯罪ノ性質ニ付テ云ヘハ毒殺ノ如キ死體ヲ解剖シ吐瀉物ヲ分析シテ果シテ毒殺ナリヤ病死ナリヤヲ明ラカニシ又毒物ナリトセハ死ヲ致スニ足ル分量ナリヤ否ヤ等鑑査スル必要アリ其他紙幣、印章、証文等總テ其經驗ノモノヲシテ鑑定セシムルニアリトス即チ印章ノ如キハ印判師ヲシテ鑑定セシメ証書ノ如キハ筆蹟ヲ鑑定セシムルカ如キ又傷ノ如キハ醫師ヲシテ鑑定セシムルノ類ナリトス結局判事ノ心証上影響ヲ及ボスヘキモノト云フヘシ

**第三百三十五條**

豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

鑑定ヲ爲スハ其犯罪ノ性質、方法、結果ヲ分明ナラシムル爲メニアリ又鑑定ハ學術、職業ヲ爲スモノニ於テ爲スモノナリ即チ犯罪ノ性質トハ殺人罪ナルトキハ謀殺、毒殺、毆打殺ナリヤ否ヤニシテ其方法ハ毒殺ナレハ如何ナル藥品ヲ用ヒシヤ否ヤ謀殺ナレハ刀劍ナリヤ棍棒ナリヤ銃砲ナルヤノ如シ又結果トハ致命ノ原因ハ如何、疾病休業セルヤ否ヤ其日數ハ如何等ヲ云フ其内部ニ影響ヲ及ホスヘキモノナルトキハ解剖ヲ爲スヘク其埋葬シタルモノナルトキハ之ヲ發掘スルコトアルヘシ

而シテ鑑定モ證據ノ一ナレハ之ヲ許スト否トハ裁判官ノ自由ナリ大審院モ鑑定ノ請求ヲ許否スルハ承審官ノ權内ニ屬ス故ニ筆跡鑑定ノ請求ヲ聽許セザリシトテ不法ニ非ラス(二十四年十一月十二日)ト判決シタリ

第三百三十六條 鑑定ニ付テハ第五百十五條第五百十八條乃至第二百一十一條第二百二十三條乃至第二百二十五條及ヒ第二百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第三百三十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第三百二十二條ノ式ニ從フ

第三百三十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

大審院判例ニ宣誓ノ式ヲ履行セサル鑑定人ノ鑑定書ヲ證據ト爲シタルハ不法ナル裁判ナリ(二十六年七月三日)

第三百三十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

○刑罰法 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

【註釋】鑑定書ヲ作ルハ其確實ヲ証スルカ爲メニテ其時間ヲ詳記スルハ鑑定ノ當否ト日當計算ノ用ニ供スルカ爲メナリ

鑑定書ハ必ラス各別ニ作ルヘシト云フニアラス異見アルトキハ各別ニ之ヲ爲スヲ良シトシ又一個ノ鑑定書ニ列記スルモ可ナリ

**第四百十一條** 鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得

【註釋】第三百四十四條ト同一ニシテ立替金トアルハ藥品、其他分析用、解剖用等ノ費用ナリトス

**第八節 現行犯ノ豫審**

【註釋】本節ハ現行犯ニ付テノ特別ノ豫審手續ヲ規定シタルモノナリ本節モ亦證據蒐集ノ一方法ニシテ元來現行犯ハ其罪跡明白ニシテ證據ヲ蒐集スル速カニ且豫審處分ヲ速ニ爲サ、ルトキハ折角明白ノ證據ヲ湮滅スルノ恐レアリ故ニ速カニ豫審處分ヲ爲サシメ證據ノ湮滅ヲ防キ犯人ノ逃走ヲ防クニ外ナラス

**第四百十二條** 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タス直ニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

【註釋】判事ハ訴ナケレハ審理セサルヲ原則トス然ルニ現行犯ニ在テハ此原則ノ例外トシテ檢事ヨリ

先キニ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタルトキハ檢事ノ要求ナキモ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得ヘキモノトシタリ

如何ナル場合ニ於テ豫審判事ハ爲シ得ヘキヤ其豫審判事カ職務執行中例ヘハ臨檢處分中現行犯ヲ知ルトキ又ハ私宅若クハ遊歩中ニ生シタルカチ問ハサルナリ

豫審判事現行犯アルコトヲ知りタルトキハ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヘキハ前段既ニ之ヲ述ヘタリシカ其豫審ニ取掛ルトハ即チ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ被告人ヲ訊問シ証人ヲ訊問シ證據物件ヲ差押スル等總テノ處分ヲ爲スモノトス

現行犯トシテ處分スルニハ必ラスシモ犯人ノ誰ナルコトヲ知り得タル場合ノミニ限ラス準現行犯トシテ處分スルニハ刑事訴訟法第五十七條第三號前段ノ場合ノ外犯人ト思料スヘキモノアルコトヲ要ス(二十九年六月十三日法曹會決議)

**第四百十三條** 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

【註釋】現行犯ノ豫審ニ付テハ起訴アリタリトスルニハ其時機ハ如何ナルカ本條ニ於テハ豫審判事カ檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス故ニ豫審判事ハ現行犯アルコトヲ知ルニ於テハ直チニ犯所ニ臨檢シ其調書ヲ作ルヘキモノトス

豫審判事カ檢事ニ書類ヲ送致スルハ其爾後公訴權ヲ實行セシムルカ爲メナリ檢事ヨリ假令繼續スヘキモノニアラザル意見アルモ豫審判事ハ必ラス通常ノ規定ニ從ヒ終結セサルヘカラス蓋シ既ニ公訴ヲ受理シタルモノナレハナリ

**第四百四十四條** 地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

**註釋** 檢事ハ豫審判事ノ職務ヲ行フコトヲ許サ、ルハ其職權ノ性質上當然ナリト雖モ現行犯ニ於テハ特別ニ變例ヲ設ケ檢事ヲシテ豫審判事ノ職務ノ一部ヲ行ハシム蓋シ犯狀明白證據確然アレハ檢事之ヲ爲スモ決シテ危險ノコトナク却テ證據ヲ集取スルノ速カニシテ犯人ノ法網ヲ脱スルコトナカラシムルノ利益アリトス

犯所ニ臨檢シタルモノ之レノミナラス只一例ヲ示セルノミ他ノ豫審處分ヲモ爲シ得ヘキコト勿論ナリ

併シナカラ罰金費用賠償ノ言渡又ハ宣誓ヲ爲シムルコトヲ許サ、ルハ一ハ裁判ニシテ假令現行犯ナルモ之ヲ許スヘカラス犯罪其モノハ現行ナルモ証人等ノ處分ハ敢テ急速ヲ爲スヘキモノニアラス又宣誓ノ如キハ裁判上ノ儀式ニシテ檢事ノ爲スヘキモノニアラス故ニ右ノ二者ニ付テハ適用セシメサルナリ

前條ニ於テハ豫審判事カ臨檢調書ヲ作ルトキハ公訴ヲ受理シタルモノト爲スモ本條ハ假令犯所ニ臨檢ヲ爲シ調書ヲ作ルモ公訴受理セラレタルモノト爲ス蓋シ檢事ハ公訴ヲ起スコトヲ本職トシ假令處分ヲ爲スモ公訴ヲ起ス手續ヲ爲シ得ヘシト雖モ豫審判事ハ元ト公訴ヲ受ケサレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得サルモノナレハ公訴ヲ受理シタルモノト看做サ、レハ豫審處分ノ無効ヲ生スルヲ恐ル、カ故ニ便宜上之ヲ許シタルモノトス

**第四百四十五條** 前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

**註釋** 前條ノ場合ニ於テ檢事ノ爲スヘキ手續ヲ定メタリ地方裁判所檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ナルトキハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致スヘキモノトス蓋シ自己ノ管轄内ニアラサレハナリ

區裁判所檢事ヨリ送致ヲ受ケタル地方裁判所檢事ハ第四百四十八條ノ規定ニ從ヒ意見書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致スルモノトス

若シモ之ニ反スル手續ヲ爲ストキハ違法處分タルコトヲ免レサルナリ大審院判例ニ曰ク地方裁判所ノ管轄ニ屬スル重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テ區裁判所檢事カ犯罪者ヲ地方裁判所檢事ニ送致シタル後之ヲ訊問シ又地方裁判所檢事カ之ヲ豫審判事ニ送致セスシテ訊問シタルハ共ニ是レ違法ノ處分ニシテ其訊問調書ハ法律上何等ノ效力ナキモノトス(二十七年二月廿二日)

第四百十六條 區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ第四百十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲スコトヲ得

區裁判所檢事ニ於テモ亦現行犯ニ付豫審處分ヲ爲スコトヲ得ヘキモノニシテ變例ノ第三位ニアルモノナリ(第四百十二條カ第一位、第四百十四條カ第二位ニ當ル)處分ヲ爲ストハ犯所ニ臨檢シ其他豫審判事ニ屬スル處分ヲナスコトヲ得ルニアリ  
拘留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲サ、ルヘカラス之レ永ク拘留狀ヲシテ起訴前ニ置カシメサルニアリトス

第四百十七條 第四百十四條第四百十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

豫審處分ヲ許シタル第四位ハ本條ニアリ即チ司法警察官カ檢事又ハ豫審判事ヨリ先キニ重罪又ハ輕罪アルコトヲ知リタルトキニ外ナラス此場合ハ司法警察官ハ檢事ト同一ノ職務ヲ執行スルコトヲ得ヘシ之レ大ニ便宜トス但拘留狀ノミハ發スルコトヲ得サルニアリ之レ其性質上鄭重ナラ

シメサルヘカヲサルヲ以テナリ其他ノ令狀即チ召喚狀又ハ拘引狀ハ發スルコトヲ得ヘシ  
司法警察官ハ速ニ檢事ニ送致スルコトハ恰モ檢事ヨリ豫審判事ニ送致スルト同一タリ

地方裁判所檢事カ司法警察官ヨリ送致テ受ケタルトキハ第四百十八條第二項ニ從ヒ訊問スヘシト雖モ若シモ區裁判所檢事カ司法警察官ヨリ送致テ受ケタルトキハ如何スヘキヤ法律上明文ナシ故ニ一應ノ訊問ハ之ヲ爲スモ可ナリト雖モ拘留狀ヲ發スルカ如キハ之ヲ起訴ノ上ニ爲スヨリ外ナシ即チ第四百十八條ニ從フヘキノミ蓋シ第四百十八條第四百十九條ノ規定ハ地方裁判所檢事ノミニ關スルモノナレハナリ(二十五年六月十六日法曹會決議)司法警察官カ假豫審處分ヲ爲スニハ特別ノ場合ヲ除ク外立會人ヲ要セス(二十九年三月七日同上)

大審院判決ニ曰ク現行犯ノ場合ニ於テ司法警察官カ犯所以外ニ於テ被告人及ヒ關係人ヲ訊問シ調査ヲ作ルハ不法ニ非ラス(二十六年六月廿六日、同年十月十九日)司法警察官カ假豫審ヲ行フニ當リ立會人ナクシテ訊問シタル調書ハ其效ナキモノナルニ(第九十二條)之ヲ採テ以テ斷罪ノ資料ニ供シタルハ不當ナリ(二十七年四月九日)犯罪ヲ行ヒ終リタル際直チニ發覺シタル事件ハ犯人ノ誰ナルヤヲ知ルコト能ハサル場合ト雖モ刑事訴訟法ニ所謂現行犯ナレハ司法警察官カ其犯所ニ臨檢シテ作リタル檢証證書ハ之ヲ無効トナスヲ得ス(二十九年十一月廿四日)

第四百十八條 地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ  
若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ前項ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第四百十五條及ヒ第四百十七條ニ依リ區裁判所又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルト

キハ豫審判事ニ送致シ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時間内ニ訊問シ拘留状ヲモ發シ得ヘク又發セシテ送致シ了スルコトヲ得ヘシ

注意ヲ要スルハ「事件」ノ文字ナリ此場合ニ於テ送致スル事件ハ總テ現行犯ノモノナラサルヘカラス故ニ假豫審ノ起ラサルモノナルトキハ決シテ被告人ヲ訊問スルコトヲ得ス只本條ノ被告人ヲ訊問シ得ヘク又之ニ拘留状ヲ發シ得ヘキハ現行犯ニシテ假豫審起リタル場合ナルコトヲ忘ルヘカラス

**第四百十九條** 地方裁判所檢事ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留状ヲ發シタルト否トニ拘ハラス直ニ其裁判所ニ訴テ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スコカラス

起訴ヲ爲スハ檢事ノ職務内ニシテ事件ノ難易ニ依リ豫審ヲ求メ又ハ直チニ公判ヲ請求スルモノナリ即チ本條ノ場合ニ於テモ自由ナルコトヲ示シタリ殊ニ罪トナラス又ハ公訴受理スヘカテヤルモノト思料シタルトキハ假令區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ送致シ來リシ事件ナルト自己自ラ假豫審ノ手續ヲ盡シタルトテ問ハス起訴ノ手續ヲ爲スヘカラス之レ却テ無益ノ手數ヲ爲スガ故ナリトス

**第九節 保釋**

保釋ハ被告人ヲシテ自由ヲ得セシムル寬典處分ナリ蓋シ此處分ヲ設クルハ未ダ犯

罪人タル證據ヲ得シテ未決ニ拘留スルハ徒ラニ人ヲ苦シムルモノナリ去レトモ亦之ヲ釋放スルトキハ再ヒ捕フルコト能ハサルニ至リ殊ニ拘留ハ證據湮滅ト本人逃走トヲ憂ヒタルモノナレハ若シモ此二個ノ場合カ減少スルモノナリトセハ徒ラニ身ヲ拘束シ置クヘキ理由ナン故ニ或ル條件ヲ加ヘテ一時出獄セシムルニアリトス

**第一百五十條**

豫審判事ハ豫審中勾留状ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ

意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

保釋ヲ許スニ付テノ條件ハ左ノ如シ

- 第一 拘留状ヲ受ケタルモノナルコト
- 第二 被告人ノ請求アルコト
- 第三 檢事ノ意見ヲ聽クコト
- 第四 何時ニテモ呼出ニ應シ出頭スヘキ證書ヲ出サシムルコト
- 第五 保證ヲ立ツルコト

是ナリ而シテ此條件ヲ具備スルトキハ必ラス之ヲ許スヘシト云フニハアラス豫審判事ノ判斷ニ於テ審ナントセハ許スヘキノミ只保釋ヲ願ヒ得ヘキモノナルコトヲ示スニ外ナラス

本條ニ依レハ保釋ハ豫審處分ノ一ニシテ豫審判事ノ外ハ許可權ナキカ如シ然レトモ決シテ然ルニ

アラス公判々事モ亦保釋ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス只爲スヘキノ時機ハ何時ニテモト云フヘカ

ヲス第一審判決ノ後控訴申立ノ前ノ如キハ之ヲ爲スモ許サス蓋シ未タ何レカ定マラサルニアリ又上告中ノ保釋願ハ控訴裁判所ニ爲スヘク其他ノ場合ハ何レモ事件カ繫屬セル裁判所ニ爲スモノトス其若シモ第一審裁判ヲ受ケ之カ不服ニ付キ控訴ノ申立ヲナシ同時ニ保釋願ヲ差出ストキハ何レノ裁判所之カ許否ヲ爲ス權アリヤ

夫レ保釋ヲ許スト否トハ現ニ其事實ノ審理ニ當リタル判事ノ判定ニ一任セサルヘカラス今被告人カ第一審ノ裁判ニ服セス控訴ヲ爲ストキハ其事實ノ審理ニ當ルヘキモノハ控訴裁判所ナリ左レハ第一審裁判所ハ許否スルノ權ナキモノトス故ニ原判決言渡ノ日ヨリ第二百五十六條ノ手續ヲ爲スマテハ被告人ハ保釋ノ許否ノ決定ヲ受クル道ナキモノトス之レ事件ノ移付ノ爲メニ自然ニ生スル結果ナリト知ルヘシ

**第二百五十一條** 保釋ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

註釋 保證金額ハ豫審判事ニ於テ之ヲ定ムルモノナレハ保釋ヲ許ス言渡書ニ之ヲ記載シ保釋ヲ立テサルトキハ出獄セシメサルノミ

**第二百五十二條** 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價證券ヲ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

註釋 保證ノ種類ハ必ラス金錢ノミニ限ラズ有價證券例ヘハ公債證書ヲ以テ爲スモ可ナリ尙ホ信用アルトキハ金額ヲ差出スヘントノ證書ヲ提出シテ金錢又ハ有價證券ニ代ユルコトアリ彼ノ土地ノ金満家ヨリ爲ス類ナリ

**第二百五十三條** 保釋人被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報告ヲ爲ス可シ

註釋 保釋人ヲ呼出スヘキトキハ二十四時間ノ餘地ヲ與フヘシ之レ準備セシムルニアリ

**第二百五十四條** 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

註釋 保證ヲ立ツル主旨ハ何時ニテモ出頭セシムルニアリ故ニ故ナク出頭セサルトキハ沒收スルハ當然ナリ即チ違約ナレハナリ

**第二百五十五條** 保證金ヲ沒收スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

註釋 最初檢事ノ意見ヲ聽キタルヲ以テ其保證金ヲ沒收スヘキトキモ亦意見ヲ聽クハ至當トス而シテ其沒收セル金額ノ執行ニ付テハ檢事ノ職掌ナリ故ニ有價證券ノ如キハ執達吏ヲシテ公賣セシムルカ如キ又金満家ノ證書ナルトキハ執達吏ヲシテ徵收セシムルカ如キ手續ヲ爲スニアリトス

**第二百五十六條** 豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルトキハ檢事ノ意見ヲ聽



キ其言渡ヲ取消ス可シ

【註釋】 保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ヲ取消スヘキモノトス之レ命令的注文ナレハ豫審判事ハ必ラ  
ス保釋ヲ取消スヘキノ義務アリトス其他ノ場合ハ只必要アルトキニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡  
ヲ取消スヘキノミ

茲ニ保釋ヲ受ケタル被告人アリ國會議員ナルヲ以テ國會開ケタルヨリ其席ヘ出頭シタルニ裁判所  
ハ尋問ノ爲メ之ヲ呼出シタリシカ被告人ハ開會ヲ名トシテ呼出狀ニ應セス此場合ニ於テハ如何爲  
スヘキヤ

此答辨ニハ二説アリ一ハ言渡ヲ取消シ拘留狀ヲ發シテ拘留スヘキモノナリト云ヒ一ハ開會中ハ拘  
留狀ヲ發スルコトヲ許サス保釋ヲモ取消スコトヲ得ストノ説ナリ

然レトモ保釋ヲ許ス上ハ再ヒ之ヲ取消スコトヲ許サストノ精神ハ毫モ法文上見ルヘキモノナリ  
ニ國會開會中ニ於テ尙ホ然リト云フヘキ理由モナク又憲法上其例外ヲ示サス然ラハ議會ノ如何ヲ  
論セス其被告人ハ呼出ニ應スル義務アリ抑モ保釋中ノ被告人ヲ何時ニテモ出頭スヘキ契約アルモ  
ノナレハ議會ニ出ツルハ其モノ、自由ナリトスルモ其約ニ背クヘキ理由ナシ故ニ若シモ出頭セザ  
ルトキハ其言渡ハ之ヲ取消シ直チニ拘留狀ヲ發スルコトヲ得ヘキハ當然ナリトス拘留狀ハ國會ノ  
爲メニ無効トナル理由ナケレハナリ

第五百五十七條

豫審判事保證金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金

ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽  
キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

【註釋】

保釋ヲ許シ又ハ保證金ヲ沒收シ再度拘束スル等ハ皆其被告人カ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノ  
ニシテ尙ホ且有罪タルヘキモノナリ左レハコソ拘束スル必要ヲ生スヘキモノナレトモ若シモ被告  
人ヲ拘束スヘキ必要ナキ場合又ハ罪トナラサル事件ナルトキ例ヘハ違警罪ノ如キ罰金刑ノ如キ又  
ハ免訴ノ言渡爲テスヘキ事件ノ如キニ至リテハ元ト拘束スヘキ必要ナキモノナレハ從テ保釋ヲ取  
消シ更ニ拘留スヘキモノニアラス其爲メニ金額ヲ沒收センハ不當ナルコアリ之レ本條ニ於テ其沒  
收金ヲ還付スル手續アル所以ナリ

第五百五十八條

豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ

公判ニ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保證金ヲ還付ス可  
シ

【註釋】

前條ト理由ハ同シク保證金ノ必要ナキヲ以テ之ヲ還付スルモノトス

第五百五十九條

豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ

被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシ  
ム可キ證書ヲ差出サシムヘシ

【註釋】 責付トハ釋放ノ一種ニシテ保釋ト異ナルハ一ニ保證金ヲ差出サシメサルコアリ又保釋ノ如ク  
被告人ノ請求ヲ俟タサルコアリ而シテ法律カ望ム所ハ親屬又ハ故舊ニ預クルヲ以テ此等ニ累テ及  
ホサ、ソレコトヲ恐レテ逃走等ノ患ヒナント認メタルニ外ナラス

第六十條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消ス可シ

責付人ヲ呼出ス手續及ヒ責付言渡ヲ取消ス手續等ハ保釋ノ場合ト敢テ異ナルコトナシトス

第十節 豫審終結

豫審判事已ニ十分證據ヲ集取シタルトキハ下調ハ已ニ終結ヲ爲スモノナレハ其言渡ヲ爲サルヘカラス其結局ハ管轄違ナルヤ否ヤ免訴スヘキモノナルヤ否ヤ公判ニ移スヘキモノナルヤ否ヤノ三區別トス而シテ公判ニ移スヘキモノナルヤ否ヤハ有罪無罪ノ判ル、所ニシテ罪アリトスルトキハ之ヲ公判ニ移スヘキタリ又假令罪アルモ刑ヲ科スヘキ必要ナキモノハ豫審判事ノ手元限リ放免スルニアリ其詳細ノコトハ各本條ニ規定セリ

第六十一條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致ス可シ

檢事ハ公益ノ代表者ナレハ其意見ヲ聽クヲ必要トス檢事モ亦公益ノ爲メニ公平ニ意見ヲ陳述スヘキモノトス

檢事ニ於テ取調不十分ナリトセハ次條ノ如ク更ニ取調ヲ求ムルコトヲ得ヘシ何様一件記録ハ三日内ニ之ヲ返付スヘシ蓋シ終結ヲ爲ス必要アルカ爲メナリ

第六十二條 檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルトキハ判事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

公益上代表者タル檢事ハ取調不十分ナリト思料スヘキトキハ更ニ取調ヲ求ムル權利ヲ有ス之レ公益ノ爲メナレハナリ豫審判事モ亦或ハ必要ナル點ニ於テ取調落チアルヤ知ルヘカラサレハナリ若シ豫審判事ニ於テモ敢テ取調ル必要ナシトシ其請求ヲ肯セサルトキハ檢事ハ相當ト思料スル意見例ヘハ何々ノ點カ不明ナリトノ意見ヲ付シテ還付スヘキモノトス而シテ二十四時内トシタルハ此猶豫ニ於テ十分爲シ得ヘキモノトシタルヲ以テナリ

第六十三條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス即チ有罪無罪ハ勿論取調ノ不十分若クハ管轄ノ有無等ニ拘ラス次條以下ノ規定ノ如ク言渡ヲ爲スヘキモノトス

茲ニ豫審中私訴ノ請求ヲ爲シ來リシモノアルトキハ豫審判事ハ如何ニ決定スヘキヤ已ニ私訴ハ公

訴起リシ上ハ何時ニテモ爲スコトヲ得ヘキモノニシテ豫審モ亦公訴ノ一ナレハ私訴ヲ豫審ニ向テ爲スモ之レ違法ニアラサレハナリ

豫審判事ハ私訴ニ付テハ審理セス只間接ニ證據ヲ蒐集セルノミ即チ裁判權ナキモノナレハナリ故ニ若シモ私訴ノ請求アリトスルモ私訴ハ其儘何等ノ言渡ヲモ爲スコトナシ所謂私訴ニ付テハ裁判ヲ爲スコトヲ得サルモノトス(二十一年六月廿九日大審院判決)果シテ然ラハ私訴ハ如何ナル地位ニアルモノナルヤチ疑ハシムルモ私訴ハ公訴ト共ニ運行スルニアレハ若シ其事件カ公判ニ移ルモノナルトキハ私訴モ共ニ公判ニ移ルヘシ若シ管轄違ナルトキハ私訴モ亦管轄違トナリ免訴タルトキハ私訴ハ消滅スヘキモノトス故ニ更ニ民事裁判所ニ出訴スヘキモノト云ハサルヘカラス

第六十四條

豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル令狀

ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

被告事件カ犯罪ノ性質、場所、被告人ノ身分等ニ依リテ其裁判所ノ管轄ニアラサルトキハ其旨ヲ言渡スヘキモノトス其犯罪ノ種類ノ如キハ決シテ管轄違ノ言渡ヲ爲ス理ナク必ラス第六十六條第六十七條第一項ノ如ク區裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘキモノトス其管轄違ノ言渡ヲ爲シタルトキ公益保護上被告人ヲ拘留スヘキモノトスルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ檢事ニ交付スヘシ之レ或ハ逃走等ヲ恐ル、カ爲メナリ檢事ニ於テ若シモ豫審判事ト意見ヲ異ニシ起訴スヘキモノニアラストセハ如何爲スヘキヤ必ラス豫審判事ノ言渡ヲ守ル義務アルヤ決シテ然ラス別ニ明文ナキモ其令狀ノ執行ヲ止メ被告人ヲ釋放

スルヨリ外途ナキモノト云フヘシ

第六十五條

豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ

受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

- 第一 犯罪ノ證據十分ナラサルトキ
- 第二 被告事件罪ト爲ラサルトキ
- 第三 公訴ノ時効ニ罹リタルトキ
- 第四 確定判決ヲ經タルトキ
- 第五 大赦アリタルトキ

第六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ

本條ハ免訴ヲ言渡スヘキ場合ヲ列記シタリ即チ其第一ノ如キハ被告人タルヘキコト人違ハナルトキモ包含ス第六ノ如キ罪トアルモ刑ニ同シ刑法上刑ヲ全免スル場合ハ第九十二條ノ如キ、第三百二十六條ノ如キ第三百五十六條ノ如シ然レトモ若シモ刑ヲ全免シテ附加刑ヲ加フルカ如キハ免訴スヘキモノニアラス必ラス公判ニ移スヘキモノトス

本條列記ノ外ニ尚ホ新法ヲ以テ刑ヲ廢シタルトキ(一)親告罪拋棄ノ場合(二)ノ二個アリ大審院ニ於テハ其事件ノ消滅シタルコトヲ證スル手續ヲ爲スヘシ(二十二年一月廿八日)トノ判決アリシモノ之レ從フヘカラサルモノナリ親告罪ト雖モ一旦公訴起リシ上ハ訴訟ノ對手人アリ言渡ヲ爲

サ、レハ如何シテ釋放セラル、ヤ知ルヘカラス故ニ必ラス免訴ノ言渡ヲ爲スヲ以テ至當トス只被告ノ死亡セルトキハ實ニ困難ニシテ此場合ハ對手人ナシ對手人ナキニ言渡ヲ爲ス理ナシ元ト言渡ハ對手人ニ對シテ言渡スモノナレハ對手ナキニ言渡スハ不道理ナリ之レ消滅シタリトノ手續ヲ爲シテ終局スルヨリ外途ナシ其虛無ノ人ニ對スルトキモ亦同シ

第六十六條 被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡

ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ  
註釋 被告事件カ違警罪ナリシトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲナスヘシ之レ區裁判所ノ管轄事件ナルヲ以テナリ且拘留セシトキハ釋放ノ言渡ヲ爲スヘキハ違警罪ハ拘留スヘキ性質ノモノニアラサレハナリ

區裁判所ノ管轄事件ナルトキハ豫審判事ヨリ見ルトキハ管轄違ナリ故ニ第六十四條ノ如ク管轄違トノ言渡ヲ爲スヘキヲ至當ナランカ最モ然リ管轄違ヒテ言渡スハ至當ナリシモ如何セシ無益ノ手數ヲ爲スナ即チ管轄違ノ言渡ヲ爲ストキハ區裁判所檢事ハ其裁判所ニ起訴スヘキモノナリ此手數ヲ爲スヨリ豫審判事カ直チニ區裁判所ノ公判ニ付スル言渡ヲ爲スヲ以テ便宜ナリト云フヘシ

第六十七條 被告事件裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリ

ト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ  
被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ

釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲ス可トヲ得若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發スルコトヲ得  
註釋 被告事件カ輕罪ナリシトキハ二個ニ區別セリ即チ

- 第一 裁判所構成法第十六條第二號ノキ即チ本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若シハ附加セサル
- 第二 二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪ナリシトキ
- 第三 以上ノ他ノ輕罪ナルトキ

トス其第一ノ場合ハ區裁判所ニ移シ第二ノ場合ハ地方裁判所ノ輕罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス此區別アルハ地方裁判所ニハ重罪輕罪ノ區別アルヨリ故サラニ輕罪公判ニ付スト記載シタルモノトス被告人ノ罪ノ種類ニ依リ本條第二項若クハ第三項ノ規定ノ如ク差別アリトス

第六十八條 被告事件重罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ重罪公判ニ

付スル言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルトキハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發ス可シ

註釋 被告事件カ重罪ナリシトキハ地方裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス其モノニ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルトキハ其言渡ヲ取消シ拘留ヲ受ケサルモノナルトキハ令狀ヲ發スヘシ之レ其罪狀重キカ故ナリトス

如何ナル被告人ニテモ必ラス保釋、責付ヲ取消スヘキヤ或ハ精神錯亂ノ病狀ニアルモノモアル

ク又大病ニアルモノモアルヘシ茲ニ於テ大審院ハ總會ノ決議ヲ經テ若シ重罪公判ニ付セラレタル被告人精神錯亂シ數年間取調ヲ爲スノ途ナク醫師ノ診斷ニテモ監外ニ出テ療養ヲ加フルニ非サレハ到底治癒ノ見込ナシト云フ如キ場合ニ於テハ裁判官ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得ルモノトス蓋本條ノ明文ハ通常ノ場合ニ適用スル者ニシテ前項ノ如キ事實止ムヲ得サル場合ニ於テ臨機ノ處置ヲ爲スモ憲モ法律ノ精神ニ背戾スルコトナケレハナリ(二十六年一月十六日)

第六十九條 豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留ス可キトキハ其理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト、公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ證據十分ナラザルトキハ其旨ヲ明示ス可シ

區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質、模樣、證據ノ十分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

豫審終結決定ニハ事實ト法律ノ理由トヲ付スヘキハ當然トス蓋シ如何ナル事實ニシテ如何ナル法律ヲ適用スヘキヤヲ認メサルヘカラザレハナリ而シテ其決定ノ種類ニ依リ尙ホ明示スヘキモノ各々異ナルモノアリ即チ左ノ如シ

第一 管轄違ノトキ○管轄違ノ理由ヲ明示シ又拘留スヘキトキモ亦同一タリ第六十四條ノ如シ

第二 免訴ノトキ○免訴スヘキトキハ左ノ場合ニアリ即チ

- 一 被告事件罪トナラザルトキ
- 二 公訴受理スヘカラザルトキ
- 三 犯罪ノ證據十分ナラザルトキ

トス而シテ第一、第二ハ其理由ヲ明示スヘシ即チ云々ナレハ法律ニ正條ナシトカ又ハ云々ニ付時効ヲ經タルモノナリトカ云フニアリ又第三ノ場合ハ只證據カ不十分ナリト云ヘハ可ナリ其理由ヲ示スヘキモノニアラス

第三 區裁判所又ハ公判ニ付スルトキ○此場合ハ何レモ有罪ト認ムルモノナレハ犯罪ノ性質、模樣、證據ノ十分ナルコト、法律ノ正條ヲ明示スヘシ然ラザレハ其管轄ノ裁判所又ハ罪ノ種類ヲ知ルコト能ハサレハナリ

其證據ヲ列記スヘキヤ否ヤニ付論アルモ明文ナキノミナラス大審院ニ於テモ豫審終結ノ言渡ハ犯罪ノ證據十分ナルコトヲ明示スルヲ以テ足レリトス其證據ノ種類及ヒ之ヲ取捨スルノ理由ヲ詳記スルニ及ハス(十九年三月三十日)ト又豫審判事ハ犯罪ノ證據ヲ採集シ其性質模樣及ヒ之ヲ罰スヘキ法律ノ正條ヲ示シ管轄裁判所ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲スヘキ者ニシテ其法條ヲ適用シテ刑ノ言渡ヲ爲スヘキモノニ非ラス(二十二年三月卅日)ト判決シタリ

第七十條 前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

註釋 被告人ノ氏名等ヲケレハ何人ニ對シテ言渡シタルヤ知ルヘカラザレハナリ故ニ必要ナリトス

第七十一條 豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

送達ヲ爲スハ抗告ヲ爲ス準備ヲ爲サシメ且抗告シ得サル事件ト雖モ其豫審ノ結果ヲ知ルニ於テ必要アルカ爲メナリ

第七十二條 檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又ハ免訴若クハ管轄違ノ決定ニ

對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

豫審ノ言渡ニ對シテ抗告シ得ヘキ人ハ檢事、被告人ノ二名ノミ又其抗告シ得ヘキ事件ハ檢事ト被告人トニ依リテ異ナレトモ被告人ノ如キハ自己ノ利益トナルヘキ免訴ノ言渡ニ付テハ抗告ヲ爲スコトナク又管轄違ノ如キハ自己ニ影響ヲ及ホスコトナケレハ是亦抗告手續ヲ要セス檢事ニ在テハ公益上必要ナルモノニシテ抗告ヲ爲シ得ヘキモノナリ只二者何レモ輕罪公判ニ付スル場合ニ於テハ抗告スルコトヲ得ス蓋シ輕罪事件ニ付テハ重罪ト異ナリ其審ノ少ナルヨリ名ヲ抗告ニ托シテ審理ヲ延滞セシムルノ弊アルト輕罪法廷ニ於テ十分辨論ヲナシ得ヘキトニ依リ重罪ト雖モ十分辨論ヲナシ得ヘキモ名譽ノ点ニ於テ大ニ異ナリ且拘束セラル、点ニ於テモ亦審ヲ受クヘシ之レニ者ヲ區別シタル所以ナランカ

抗告手續ニ付テハ第二百九十三條以下ニ其規定アリシカ其抗告申立及ヒ抗告裁判所ノ決定ニ付テハ之ヲ訴訟關係人ニ通知送達スルノ方法ナシ只理論上之ヲ通知送達スルモノト云ハサルヘカラス然ラサレハ知ルコトアラサレバナリ(二十五年十二月七日法曹會決議)

第七十三條 重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被告人ニ送達ス可キ決定ニハ其

決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ其記載ナキト

キハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定ノ送達アルマテ抗告期間ノ經過ヲ停止ス

重罪公判ニ付スル言渡ニ對シテハ前條ノ如ク抗告ヲ爲シ得ヘキモノナレハ被告人ニ對シテ注意ノ爲メニ本條ノ如ク記載スヘシ記載スヘシト命スル上ハ記載ナキトキハ抗告期間ヲ停止スルヲ至當ト云フヘシ

第七十四條 豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間又抗告アリタルトキハ其決定アル

マテ執行ヲ停止ス但保釋責任ノ言渡ヲ取消ス決定ハ其執行ヲ停止セス

豫審終結決定アリシトキハ其抗告シ得ヘキモノニ限リ其期間内ハ待ツヘシ之レ抗告スルヤ知ルヘカラス其抗告シタルトキハ抗告決定アルマテハ執行ヲ停止スヘシ然ラサレハ反對ノ決定トナルヤ知ルヘカラス但保釋責任ノ言渡ヲ取消ス決定ハ停止セス之レ元ト逃走ヲ防クモノナレハ一面抗告シテ一面ニ逃走スルヤ知ルヘカラスレハナリ

第七十五條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確定シタルトキハ

罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アルトキハ此限ニ在ラス

新ナル證據アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヤ決定ス可シ

一事再理ハ之ヲ禁スルモノナレトモ新ナル證據アルトキハ再ヒ訴ヲ受クルモ可ナリ尤トモ免

訴ハ常ニ其犯罪ノ證據十分ナラサルヨリ言渡スヘキモノナレハ後日其罪ノ證據カ十分ナルニ於テハ公益上再ヒ審理スルモ何ノ不可カ之レアラシ公判ノ場合ニ於ケル再訴ト大ニ其性質ヲ異ナラシメタリ

新ナル證據アリヤ否ヤハ檢事ノ一了見ニ任スヘカラス苟モ同一ノ事件ニ付キ審理スルカ如キモノナレハ鄭重ニ鄭重ヲ加ヘサルヘカラス之レ裁判所ニ差出シテ裁判所カ起訴スヘキヤ否ヤヲ決定セシムルニアリトス此再訴ヲ許スヘキヤ否ヤヲ決定スルハ裁判所ノ特權ニ屬シ法律ハ其決定ノ當否ニ付不服ヲ申立ツルコトヲ許サス(二十六年十月廿六日大審院判決)其證據ノ新タナルモノトハ事實參考人ノ供述ヲモ包含セシム(二十七年五月十八日同上)新證據ニ依リ再訴ヲ許シタル上ハ其新證據トセラレタル調書等ニ違法ノ點アルト否トヲ問ハス公訴受理スヘキモノトス又公訴不受理ノ申立ニ對スル判決ハ本案判決ト同時ニナスモ不法ニアラス(同年十二月十三日同上)ト決定セリ

### 第四編 公判

夫レ公判トハ犯罪ヲ捜査シ豫審ヲ經タルモノ又ハ豫審ヲ經スシテ捜査ノ後直チニ起訴シタルモノヲ公開シテ審理判決スルヲ云フ

公開ヲ爲スハ之レ原則タリ即チ憲法第五十九條ノ保障スル所而シテ公開ヲ禁スルハ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキ法律ノ明文ニ依リ或ハ裁判所ノ決議ニ依リ然ルノミ其裁判所ノ決議ハ裁判所構成法第五條ニ規定スル所タリ尤トモ公開ヲ禁スルモ其裁判官言渡ヲ爲ストキハ必ラス公開セサルヘカラス公開トハ公衆ノ入廷ヲ許シ公衆ノ面前ニ於テ審理判決ヲ爲スヲ云フニアリ

#### 第一章 通則

通則トハ公判ニノミ通シ得ヘキ總則ナリ

### 第七十六條 公判ハ判事、檢事、裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス

公判ノ組織ハ判事、檢事、裁判所書記出廷ス其單獨制ト合議制トニ依リ判事ノ數ヲ異ニス單獨制ハ一人ノ判事カ審理判決シ合議制ハ地方裁判所ニ在テハ三人ノ判事、控訴院ニ於テハ五人ノ判事、大審院ニ在テハ七人ノ判事列席審理判決シ其ノ中ノ一人裁判長トス

又檢事ノ員數ハ審級ニ於テ敢テ異ナルコトナシ假令二人列席スルモ可ナリ裁判所書記ト雖モ亦同シ二人列席スルモ敢テ法律ニ反セス併シナカラ一時ニテモ退クコトハ到底爲スコトヲ許サス大審院ノ判決ニ檢事ハ法律通用ニ付意見ヲ陳述スルノ職ニ居ルモノナルヲ以テ公判審理中ハ一時タリトモ退廷スルヲ得ス(二十一年十月廿日)又裁判所ノ構成ハ決シテ自由ニ變更スルコトヲ得ス被告又ハ檢事ニ於テ異議ナシトスルモ裁判所構成法ニ戻リタル處置ヲ爲スヘカラス(二十四年二月

十日)ト判決シテ以テ之ヲ戒メタリ  
公訴ニ附帶スル私訴ノ審判ハ即チ公判ノ一部ナレハ刑事訴訟法第七十六條ニ依リ檢事立會ヲ要ス(三十年二月十五日)

第七十七條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

被告人ハ公廷ニ於テハ身體ノ拘束ヲ受クルコトナキハ當然ニシテ被告人中ハ未タ犯罪人ト云フヘカラス故ニ罪人視スルハ大ニ慎マサルヘカラス殊ニ身體ヲ拘束スルトキハ自由ニ供述スルコトヲ得ズシテ爲メニ辯護權ヲ害スルニ至ルヘシ故ニ拘束ヲ爲サ、ルチ原則トス且逃走、暴行ヲ防クカ爲メニ守卒ヲ置クニアリ守卒トハ必ラスシモ巡査ニ限ラス拘留被告人タルトキハ看守アリ只看守巡査ヲシテ取締ラシムルコアリトス

第七十八條 裁判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀又ハ拘留狀ヲ發スルコトヲ得

元來被告人ニシテ拘引狀又ハ拘留狀ヲ發シテ被告人ヲ自由ナラシメサルハ豫審手續中ニ既ニ明條アルカ如ク(第七十二條第七十五條)被告人ヲ訊問シタル後ニアラサレハ爲ス能ハサルモノナリ然ルニ公判事件タルトキハ「何時ニテモ」トアルヨリ其訊問以前ニ於テモ令狀ヲ發スルコトヲ得ヘシ蓋シ豫審ニ在テハ一應被告人ヲ訊問セサレハ果シテ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノナルヤ否ヤハ知り得ヘカラサルモ公判ニ於テハ既ニ一件記録廻付シタルヲ以テ一見セハ先ツ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノナルヤ否ヤヲ知ルコトヲ得ヘシ之レ本條アル所以ニシテ決シテ無理ニ令狀ヲ發スル

○明治十四年十月四日太政官第八十六號  
警視廳、府縣、東京府、神戶府、梅津府、除  
治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取縮ノ使用ニ供スル爲メ其院長ノ照會ニ應ジ一名又ハ數名ノ巡査爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入リ警護セシムヘシ此旨相違候事

第七十九條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得

辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タルトキハ辯護士ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得  
被告人ニ辯護權ヲ與ヘタルモノニシテ事實ハ兎モ角モ其法律ノ点ニ於テハ被告人自ラ之カ精通セズ故ニ法律ニ精通ナル人ヲ以テ辯護セシムルハ正當ニシテ文明ノ代ニ於テハ必ラス斯クアルヘキモノト云フヘシ  
辯護人ヲ用ユルハ必ラス被告人ノ出席シタルトキニ限ルヘキヤ假令被告人欠席シタル場合ト雖モ辯護人ヲ用ユルコトヲ得ヘシ是レ本條ニ禁止ノ明文ナキノミナラス辯護權ヲ附與スル精神ニ反スルヲ以テナリ

第八十條 辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

辯護ノ爲メニ一件記録ヲ閱覽シ抄寫スルコトヲ許スハ前條ノ結果ヨリ當然ナリトス

第八十一條 被告人ノ法律上代理人ハ其補佐人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得

○刑事訴訟法 第四編 公判 百二十三

○明治十四年十二月廿八日第七十三號布告  
治罪法ニ於テ法律ニ定メタル代人ト稱スル者ハ左ノ通一未丁年者ノ父若クハ母又ハ親族後見人  
二夫タル者  
三白痴癡癡人ノ保管者  
四治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財產管理人  
○裁判所構成法第九條  
又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス



得

辯論ニ與ガルコトヲ得セシメタリ補佐人トハ其被告人ヲ補助シ辯護權ヲ伸張セシムルニアリトス

第百八十二條 被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セサルトキハ對席トシテ裁判ヲ爲ス可シ

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退廷又ハ勾留ヲ命セラレタルトキ亦同シ若シ辯論二日ニ渉ルトキハ更ニ被告人ヲ出頭セシム可シ

辯論ヲ爲スハ自由ナリ裁判所決シテ之ヲ禁セサルノミナラス又妨ケス然ルニ自ラ之ヲ抛棄シテ辯論セサルハ甘受スルモノト云フヘシ故ニ裁判所ハ被告人ニ於テ已ニ辯論ヲ爲サス抛棄シタルモノトシテ對席判決ヲ爲スニアリトス其辯論トハ事實ヨリ證據ニ至リ法律ノ適用マテ及フヘキモノト敢テ理屈ノミヲ云フニハアラサルコトヲ知ルヘシ  
被告人ニ於テ審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲スモノハ裁判長ハ退廷ヲ命シ又ハ勾留ヲ命スルヘキモノトス此場合ニ於テモ自ラ求メタルモノナレハ矢張對席トシテ判決ヲ爲ス  
以上其日一日ニ於テ結局スヘキ場合ハ可ナリト雖モ其二日以上ニ渉ルトキハ更ニ被告人ヲ呼出スヘシ蓋シ其翌日ハ審問ヲ妨ケサルコトナルヘシ又不當ノ行狀ヲ爲ササルヘシ  
其退廷ヲ命シ又ハ勾留ヲ命スル手續裁判所構成法律百九條ノ規定スル所トス

第百八十三條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ

痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ在ラス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ  
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲スコシ

被告人ヲシテ辯護權ヲ與ヘ自由ニ辯論セシメテ後之カ刑ヲ言渡シ無罪ヲ宣告スルハ至當ナリ其辯論ヲ爲サスシテ強テ裁判スルカ如キハ人身ノ自由ヲ害スルモノナリ權利ヲ妨害スルモノナリ故ニ若シモ被告人カ精神錯亂又ハ疾病等ニ依リテ出頭スルコト能ハサルトキハ其全愈マテ辯論ヲ停止スルヲ以テ至當ナリトス  
其辯論ヲ停止スルハ自己自ラ爲スヘキ場合ヲ云フ故ニ法律上代人ヲシテ辯論セシムルコトヲ得セシムル場合ハ敢テ停止スルノ必要ナシ蓋シ代人出頭シテ辯論ヲ爲スカ故ナリトス  
辯論ニ取掛リタル後ニ於テ被告人精神錯亂又ハ病氣ニ罹リタルトキハ何レモ辯論ヲ停止スルモノトス只二者ノ區別アルハ精神錯亂ノ後ハ痊癒ノ後ハ新ニ辯論ヲナシ前日ナシタル辯論ハ空無ニ歸

シ更ニ爲スヘキモ病氣ノ場合ハ其前日ヨリ引續キ以後ノ手續ヲ爲スヘキナリ之レ其病氣ノ性質上然ラサルヲ得サルニアリトス  
又其病氣等ノ爲メ五日間辯論ヲ停止シタルトキハ新ニ辯論ヲ爲スヘシ之レ或ハ前ノ場合ヲ忘却シタルニハアラサルヤノ感アルヲ以テ檢事其他訴訟關係人ノ請求アルトキハ其日數ニ係ラス更ニ辯論ヲ爲スコト當然ナリトス  
以上已ニ被告事件及ヒ法律ノ適用ヲモ終リタルトキハ更ニ取調フヘキ必要ナシ故ニ直チニ裁判ヲ言渡スヘキノミ

若シ病氣ニモアラサルニ五日間辯論ヲ停止シタルトキ例ヘハ証人訊問ノ爲メニ延期シアリシトキノ如キハ假令日數ニ係ラス辯論ヲ更新スル必要ナシ(二十七年一月十八日大審院判決)

**第八十四條**

裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得  
但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

不告不理ノ原則ハ實ニ貴重ナルモノナリ裁判所ハ訴ヲ受ケサル事件ニ付テハ裁判スル權利ナシ即チ檢事ヨリ公訴ヲ起サ、ルトキハ裁判官ハ審理スルコトヲ許サズ只辯論ニ因リテ發見シタル附帶犯罪ノ場合ノミニ付キ別ニ訴ナキモ裁判ヲ爲スコトヲ得セシム而シテ何故ニ附帶犯罪ニ付テハ例外ヲ設ケタルヤ其理由タル第一、証憑集取スルノ便アルニ由ル第二、事實發見ノ利アルニ由ル第三、二重ノ審理及ヒ手續ヲ省クニ由ル第四、日子ト經費トヲ省クニ由ルニアリ其附帶犯罪ト

ハ次條ノ如シ

若シ附帶犯罪ニシテ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本條ノ辯論ヲ停止シ豫審ニ差廻シ其集取ヲ待テサルヘカラス

少シク注意ヲ要スルハ公訴狀ニ指摘スル犯罪成立セサルモ他ニ罪ヲ犯ス事實アルニ於テハ其事實ニ相當セル律ニ擬セサルヘカラス(二十年三月八日大審院判決)又豫審ト公判ト罪名ヲ異ニスルモ其事件同一ナレハ請求ヲ受ケサル事件ニ對シ判決ヲ爲シタリト云フヲ得サルナリ(二十七年四月廿七日同上)

**第八十五條**

左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

- 第一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ
- 第二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタルトキ
- 第三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ

本條ハ附帶ノ犯罪ヲ列記シタリ

第一ノ場合 ○此場合ハ日時場所共ニ同一ニシテ犯罪ハ各別ナルモ其間離ルヘカサル關係ヲ有スルモノナリ例ヘハ甲カ乙ニ怨アリ乙ヲ殺傷シ又其妻子ヲ殺傷スルカ如シ又甲アリ乙ヲ殺傷スルコト當リ偶マ乙ニ怨アル丙來リテ會シ幸ヒトシテ同シク乙ヲ殺傷シタルトキノ如シ何レモ同時ニ審理スルトキハ便利ナリトス故ニ假令其中ノ一罪ニ付公訴ヲ受ケタルモ審理上未ダ公訴ヲ受ケサル他ノ罪ヲモ併セテ裁判ヲ爲スコトヲ許スヘシ

第二ノ場合 ○此場合ハ日時場所ノ關係アラサルモ犯人相互ニ關係アルモノトス例ヘハ甲乙共謀  
レテ甲ハ窃盜ヲナシ乙ハ贓物ノ販賣スルカ如シ窃盜ト盜贓ヲ保ト其犯時場所ヲ異ニスルモ二罪  
併合シテ審理スルトキハ明白ナリトス

第三ノ場合 ○此場合ハ罪ト罪トノ間ニ於テ關係アリ一罪ハ一罪ノ原因ト爲リ他ノ一罪ハ其結果  
タリ例ヘハ窃盜ヲ行ハンカ爲メニ先ツ人ノ家宅等ニ放火シ又ハ人ヲ殺シタル後其犯跡ヲ蔽ハン  
カ爲メ放火シタル場合ノ如シ之レ互ニ離ルヘカテサル關係アルモノナリ他ノ一罪ニ付公訴ナキ  
モ併セテ審理スルニアリトス

然レトモ事物ノ管轄ヲ破ルコトヲ許サス例ヘハ區裁判所ノ事件ニ附帶シテ重罪事件ノ發覺スル  
トキハ假令重罪ハ附帶犯ナルモ區裁判所之ヲ管轄スルコトヲ得ス又假令同審級裁判所ナリト雖  
モ豫審ヲ經ヘキモノナルトキハ必ラス豫審判事ニ交付セサルヘカテサルカ如シ之レ已ニ前條ニ  
於テ説明シタル所ナリトス

第百八十六條

檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ヲ問ハス本案ノ判決アルマテ

何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

○公訴受理シタルトキト雖モ管轄違又ハ公訴受理スヘカテサルノ言渡ハ其審理ノ判決アルマテ  
何時ニテモ爲シ得ヘシ尤トモ檢事又ハ被告人ハ之カ請求ヲ爲シ得ヘク又裁判所ハ職權ヲ以テ爲シ  
得ヘシ

若シ裁判所ニ於テ判決ヲ爲シタルトキハ本條ノ理由ヲ以テ上訴ヲナスコトヲ得ヘシ又甲裁判所  
於テ公訴ヲ受理シ未タ開廷ヲモ爲サ、ル以前ニ於テ其 件ハ已ニ乙裁判所ニ於テ欠席判決ヲ受ケ  
タルコトヲ知ルニ於テハ甲裁判所ハ本條ニ從ヒ公訴受理スヘカテサルノ言渡ヲ爲スヘキヲ以テ正  
當ナリトス

第百八十七條

裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ判決ヲ待

タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止  
ス

○前條ノ場合ニ於テ裁判所カ檢事又ハ被告人ノ請求アルニ拘ラス其申立ヲ却下セシトキハ檢事  
又ハ被告人ハ本案ノ判決ヲ待タスシテ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス若シ控訴  
又ハ上告ヲナシタルトキハ本案ノ辯論ハ之ヲ停止スヘシ然ラサレハ或ハ上訴ニ依リ反對ノ判決ア  
リシトキハ無益ノ手續ヲ爲ス恐レアレハナリ

本條ニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得トアリ故ニ何レヲ爲スモ自由ナリヤ大審院判決ハ本條ニ直ニ  
控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得トアルハ即チ第一審ニ於テハ扣訴ヲ爲シ第二審ニ於テハ上告ヲ爲ス  
コトヲ得ルヲ云フノ法意ニシテ未タ第二審ヲ經サル事件ニ付直ニ上告ヲ爲シ得ルト云フニハアラ  
サルナリ(二十五年三月三日) 檢事ニ於テ本案審理前公訴不受理ノ申立ヲナスモ裁判所ニ於テ何  
等ノ裁判ヲ爲サス直チニ本案審理ヲ進行シタルニ拘ラス檢事ニ於テ異議ノ申立ヲ爲サ、ルトキハ  
陪審ニ公訴不受理ノ申立ヲ抛棄シ本條ノ審理ヲ爲スコトヲ認諾シタルモノト看做サ、ルヲ得ス陪  
審ニ於テ理由トシテ上訴スルヲ得サルモノトス(二十五年十月卅一日)

第百八十八條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

註釋 司法警察官ヲ證人トシテ呼出スコトヲ得ヘキ旨規定シタリ此司法警察官ハ假豫審ヲナシタルモノナレハ之カ証明ヲ要スルコトアルカ故ナリ

豫審判事ヲ證人トシテ呼出スコトヲ得ヘキヤ舊治罪法ニ在テハ裁判所ノ允許ヲ得テ説明ノ爲メニ呼出スコトヲ得ヘキ旨規定シタリシカ本法ニ在テハ之ヲ削除シタリ故ニ法意ニ於テハ豫審判事ヲ呼出スコトヲ許サザルモノトス然ルニ反對アリ曰ク豫審判事ハ其職務上執行シタル事項ニ付証人トシテ呼出スコトヲ得ヘシ(二十九年四月十八日法曹會決議)

第百八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定人ヲ爲シタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ、證人、鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述、鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

註釋 公判ニ於テモ證人又ハ鑑定人ヲ呼出スコトヲ得ヘキコトヲ規定シタリシカ何レモ豫審ニ於ケル證人又ハ鑑定人ニ係ル場合ナリシ故ニ新タニ証人又ハ鑑定人ヲ呼出スコトヲ得ヘキヤ否ヤハ

別ニ規定ナシ或ハ公判判事ハ新ナル證人又ハ鑑定人ヲ呼出スコトヲ得サルカ如キ感アリシ然レトモ假令明文ナシト雖モ刑事ハ民事ト異ナリ干渉主義ヲ以テ公益ヲ維持スルニアレハ被告事件ニ付疑アルトキハ新ナル證人又ハ鑑定人ヲ呼出シ審理スルコトヲ得ヘキハ至當ニシテ決シテ疑ヲ存スルモノニアラストス

第百九十條 第百十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

註釋 公判ノ證人又ハ鑑定人ニ付テハ豫審ノ部ト同一ナレハ之ヲ準用スルニアルノミ

第百九十一條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

註釋 証人疾病ノ爲メ又ハ正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疎明スルトキハ裁判所ハ其部員一名ヲ命シテ出張セシメ又ハ區裁判所判事ニ囑託シテ所在ニ就キ訊問ヲ爲スコトヲ得セシムルトモ區裁判所ノ事件ニシテ單獨判事ナルトキハ自ラ受命判事トナルニ外ナラス只本條ハ合議裁判所ノ場合ヲ規定シタルニアリトス

第百九十二條 檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

証人ノ請求ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ爲スコトヲ得ヘキモノニシテ其人名目録ハ開廷一日前  
 之ヲ各相手方ニ送達スヘキモノトシ蓋シ果シテ如何ナルモノカ証人タルヤ否ヤ覺悟セシムルカ爲  
 メナリ「各相手方」トハ檢事ヨリ請求スル証人ナレハ被告人ニ送達シ被告人ヨリ請求スル証人ハ  
 檢事ニ送達シ若シ私訴ニ關係セル場合ニ在テハ被告人ヨリスルモノハ民事原告人ニ民事原告人ヨ  
 リ請求スルモノハ被告人ニ送達スルモノヲ云フ

**第九十三條** 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又供述前辯論ニ立會フ可カラ  
 ス既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タ  
 ルトキハ此限ニアラス

本條ハ第二百二十七條ノ精神ト同一タリ互ニ雷同ヲ防クニアリ又供述シタルモノヲ法廷ニ留ム  
 ルハ通謀ヲ防クニアリ

**第九十四條** 証人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス  
 陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得  
 訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問  
 ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

法廷内ノ訊問ハ裁判長ノ職權タリ假令陪席判事檢事ト雖モ自儘ニ訊問ヲ爲スコトヲ許サス必  
 ヲス裁判長ニ告ケテ爲スヘキモノトス殊ニ訴訟關係人ハ自ラ証人ヲ訊問スルコトヲ許サス必ラス  
 裁判長ニ求ムヘシ

以上ノ制限ハ法廷内ニ於テハ取縮權ハ裁判長ニ屬シタルヨリ生スルニアリトス  
 訴訟關係人トアルヲ以テ辯護人モ亦包含セシムルモノト知ルヘシ

**第九十五條** 証人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ  
 該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ  
 因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致ス可シ  
 其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權  
 ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

証人又ハ鑑定人ノ供述不實ナルトキハ所謂僞証罪ノ成立スヘキ場合ナルヲ以テ裁判所ハ豫審  
 判事ニ送致スルモノトス其證明ノ材料トシテ證人又ハ鑑定人ノ供述ヲ錄取シ之ヲ送致シ本條ノ辯  
 論ハ場合ニ依リテ停止スルコトヲ得ヘキモノトス  
 本條ヲ觀察セハ僞證ノ罪ノ如キハ公廷内ノ犯罪ニシテ直チニ裁判スルヲ便利ナリシカ如シ然レト  
 モ犯迹顯著ナラス情況歴然タラス一見犯罪タルヤ否ヤ定ムヘカラス故ニ本條ニ於テモ「思料シタ  
 ルトキ」トアリ之レ豫審ニ廻シ以テ犯罪成立スルヤ否ヤ審理セシムルニアリトス然レトモ其供  
 述ノ故意ニ出テタルヤ否ヤ區別シ豫審判事ニ送致スルカ如キハ事實裁判官ノ權内ナリト云フヘ  
 シ(二十五年八月一日大審院判決)

本條ノ豫審判事ニ送致スル場合ハ豫審判事ハ公訴ヲ受ケタルト同一ニ依リテ直チニ豫審ニ取掛ル

ヘキモノトス即チ不告不理ノ原則ノ例外ナリト云フヘシ豫審判事ハ普通ノ手續ニ從ヒ終結スヘシ  
コトハ勿論トス

第百九十六條 被告人聾者、啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第百條第

百一條ノ規定ニ從フ

【註釋】第百條第百一條ニ同シ敢テ説明スルヲ要セス

第百九十七條 裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲ス  
コトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシム  
ルコトヲ得但裁判長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シ  
タル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦チ之適用ス

【註釋】證人ノ供述スル義務ハ公ケコシテ決シテ何人ニ對シテモ遠慮スヘキ理ナク又從テ被告人ニ於  
テモ決シテ怨ムヘキ理ナシ然レトモ被告人等ハ自己ノ不利益ナルヨリ或ハ證人ヲ怨ミ私憤ヲ洩サ  
シコトヲ欲シ證人モ亦被告人ノ憤怒ヲ恐レ後日ノ災ヲ思ヒテ事實有体ニ供述スルコトヲ得サルコ  
トアルヘシ公義務トハ云ヒナカテ人情亦怨ムヘキコトアリ故ニ裁判官ハ之ヲ斟酌シ一時被告人ヲ  
シテ退廷セシメ供述セシムヘシ而シテ被告人ヲシテ辯解セシムルカ爲メニ供述ヲ告知スルヲ以テ  
至當トス

共同被告人互ヒノ間ニ於ケル取調ニ付テモ亦同一ナリ

第百九十八條 裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤ

ヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ

【註釋】各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益トナルヘキ證憑ヲ差出ス  
ヲ得ヘキコトヲ告知スヘシ之レ意見ヲ陳述セシメ被告人ノ無罪タルヘキ證憑ヲモ集取スルニアリ  
トス

大審院判例多シ即チ公廷ニ於テ辯解ヲ爲サシメサル證憑物件ハ斷罪ノ心證ニ供スルヲ得ス(二十  
年一月廿七日)公判始末書ニ證書ヲ示セリトノミ掲ケアリテ何タル證書ニ對シ辯明セシメタルヤ  
之ヲ監査スルニ由ナキトキハ破毀セラルヘキ不法ノ裁判ナリ(廿四年三月廿四日)被告ニ示サス  
且辯解ヲ爲サシメサル偽造印類ヲ以テ證據物ト爲シ私印偽造使用ノ罪アリト斷定スルハ法律ニ違  
背シタル不法ノ裁判ナリ(廿六年一月廿三日)本條ノ規定ハ本案ニ立入り裁判スルトキニ適用ス  
ヘキ法則ナリトス故ニ控訴裁判所カ期間内ニ爲シタル控訴ナルヤ否ヤヲ調査スルニ當リ(第二  
百六十條)書類ヲ被告ニ示シテ辯解ヲ爲サシメス又利益トナルヘキ證據呈出ノ告知ヲ爲サルモ本  
條ニ背キタルモノニアラス(廿六年六月一日)

第百九十九條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ

於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直ニ之ヲ裁判ス可シ

【註釋】辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキ例ヘハ証人請求ヲ爲シタルトキニ之カ採用

セスト却下セラル、トキ之ニ對シ不服ナリト異議ヲ申立テ又ハ証憑ヲ取調ヘタルニ被告人ニ意見ノ有無ヲ問ハサルヲ以テ異議ノ申立テ爲スカ如キ又ハ証人訊問ヲ爲シタルトキ其供述ノ筆記ヲ讀ミ聞カサ、ルヲ以テ異議ヲ申立タルトキノ如シ以上何レノ場合ニ於テモ裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判スルモノトス

此場合ニ於テ其裁判ニ不服アルトキハ如何スヘキヤ直チニ上訴ヲナシ得ヘキヤ本條別ニ明文ナシ故ニ獨立シテ上訴ヲ爲スコトヲ得ス本案ト共ニ上訴ヲ爲スヘキモノトス

第二百條 裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲スコシ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

註釋 判決ハ公訴ノ判決ト私訴ノ判決トヲ包含スルモノナレハ同時ニ言渡スヘキヲ以テ本則トス之レ附帶セシメタル利益ノ結果ナリトス然レトモ私訴ハ同時ニ取調ヲ終ルモノト云フヘカラス或ハ後ニ取調ヲ要スルコトアリテ同時ニ終了スルコト能ハサルヘシ此場合ニ於テハ公訴ノ判決ノ後ニ判決セサルヘカサルモノトス

第二百一條 被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル

訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲スコシ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス

私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

註釋 公訴私訴ノ費用ニ付テノ規定ニシテ何レモ原則ニ依リテ敗訴者ノ負擔タルヘキモノトス而シテ刑事ニ付テハ有罪ノ言渡ヲ受クヘキ之レ敗訴者タリ然レトモ原告官タル檢事ニ於テ又ハ裁判官ノ職權ヲ以テ取調ヲ爲スコトアリテ其取調力無益ノ手數トナルコトアリ此費用モ亦被告人ニ負擔セシムルハ酷ナリト云フヘシ故ニ其部分ヲ定メテ負擔スルコトヲ言渡スニアリトス

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタルトキハ被告人ハ勝訴者タル地位ニアリ故ニ訴訟費用ハ國庫ニ於テ負擔スヘキモノトス

私訴ニ付テハ性質民事ナレハ民事訴訟法ノ第七十二條以下ノ規定ヲ準用シ負擔方法ヲ定ムルコアリトス  
大審院判決ニ告訴狀認料ハ公訴裁判費用中ニ包含セス又犯罪ニヨリ直接ニ生シタル損害ニモアラサルナリ(十九年六月五日) 公訴附帶ノ私訴ニ付テハ刑事訴訟法中特ニ民事訴訟法ノ規定ヲ適用ストアル場合ノ外民事訴訟法ノ規定ヲ適用スヘキモノニアラス故ニ民事訴訟法第五十條ノ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ノニ確定スヘキ場合ニ該當スル事件ト雖モ上告期間ヲ懈怠シタルモノハ其懈怠セサルモノニ代理ヲ任シタルモノト看做スコトヲ得ス(二十六年五月廿五日) 公訴裁判費用負擔ノ言渡ハ刑ノ言渡ニ非サルヲ以テ法律ニ依リ其理由ヲ附スルヲ必要トセス故ニ此點ニ付キ法律ノ適用ヲ誤ルモ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス(刑法第四十五條、第四十七條及ヒ本法第二百三條、第二百六十九條參看)(二十六年十一月十三日)  
私訴ノ訴訟費用額確定ノ決定ハ刑事部ニ於テ之ヲ爲スヘキモノトス(二十五年七月六日法曹會議)

第二百二條 被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ

所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

差押物件ハ被告事件ト共ニ處分スルモノトス然レトモ刑ノ言渡ニアラザレハ同時ニ爲スヘキト云フヘキモノニアラザルハ大審院判決ノ如シ而シテ差押物件ヲ處分スルハ所有者ノ請求有無ヲ問ハス必ラス還付スルノ言渡ヲ爲スヘキモノトス但沒收スヘキモノニアラザルコト論ヲ俟タザルナリ其所有者ノ中ニハ正當ノ占有者ヲ包含スルモノナリ(二十九年二月十七日大審院判決)其他判決ハ押收物件還付ノ言渡ハ必ス刑ノ言渡ト同時ニ爲スヲ要セザルヲ以テ裁判官言渡書中ニ其還付ノ言渡ナキモ破毀ノ原由トナラス(二十一年五月廿六日)沒收ニ係ラザル物品ノ處分ハ刑ノ言渡ニアラザルヲ以テ公訴ノ裁判ト同時ニ言渡ス限リニ在ラス且其所有者ハ何時ニテモ還付ノ請求ヲ爲スコトヲ得(二十四年九月廿四日)沒收ニ係ラザル物件ハ何時ニテモ本人ヨリ還付ノ請求ヲ爲シ得ルモノニ付本案ト共ニ還付ノ言渡ヲ爲サ、ルモ違法ニ非ラス而シテ還付ノ言渡ハ法律ヲ適用セザルモ上告ノ理由トナラス(二十四年十月廿五日)證據物件ハ差出人ニ還付シ夫ヨリ更ニ所有主ニ還付スルハ格別ナレトモ直チニ差出人ニ非ザル所有主ニ還付スヘキモノニアラス(二十五年八月一日)

豫審免訴ノ場合ニ於テハ差押物件ハ如何ニ處分スヘキヤ明文ナシ故ニ論アルモ本條ヲ準用シ下付ノ決定ヲ爲スヲ至當トス(二十五年一月十七日法曹會決議)

第二百三條、刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且犯罪ノ證據ヲ明示ス可シ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ

釋義 刑ノ言渡、無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲ス條件ヲ規定シタリ即チ刑ノ言渡ニハ左ノ事項ヲ明示スヘキモノトス

- 一 事實
- 二 法律
- 三 犯罪ノ証憑

是ナリ其一ハ事實ニシテ其中ニ包含スルモノハ年月日時場所方法物件等ナリ例令ハ窃盜ナルトキハ明治三十年十月五日午後五時大阪市東區備後町四丁目吉岡平助方表戸ヲ明ケ忍ヒ入り法律大全五冊ヲ窃取シタリト云フカ如シ其殺人罪ナルトキハ明治何年何月何日午前何時頃兼テ何々ノ爲メニ怨ヲ懷キ居ル何所何某ヲ何ノ所ニ於テ刀ヲ以テ切付ケ終ニ殺害シタルモノナリ云々ト云フカ如キ類ナリ其二ハ法律ノ理由ニシテ窃盜罪ナルトキハ刑法第三百六十六條第三百七十六條ニ依リ云々ト云ヒ再犯加重ナレハ刑法第九十二條ト記シ酌量減輕ヲ與フヘキトキハ第八十九條第九十條ニ依リ本刑ニ一等ヲ減シト記載シ數罪俱發ナルトキハ第一百條ヲ適用スト明示スルコトアリ其三ハ証憑ニシテ先ツ普通ハ被告人ノ自白若クハ供述、告訴狀、告發書、証人何某ノ供述、參考人某ノ供述、飯下受書、保管書、證據物件タル刀、鋸等列記スルカ如シ無罪又ハ免訴ノ場合ニ於テモ其事實ナリ法律ナリヲ記載ス其法律トハ刑事訴訟法第二百二十四條ヲ示スコトアリ

本條ハ大審院判例多シ左ニ列記スヘシ

刑ノ言渡ヲ爲スニハ如何ナル証憑ニ因リ其事實ヲ認定シタルヤヲ明示セザルヘカラス裁判官言渡書ノ冒頭ニ控訴趣旨事實ノ申立檢察官ノ意見被告人及ヒ辯護人ノ陳辯ヲ聽キ證據書類ヲ閱シ一件遂審理處トノミ掲ケタルハ審判ノ手續ヲ示シタルニ過キスシテ一切ノ証憑ヲ明示シタルモノ



ト云フヲ得ス(二十年一月廿七日) 數多ノ証人參考人ノ調査ニ依リ罪ヲ斷スル際各証人參考人ノ調査ニ依リトノニ掲ケ証人參考人ノ誰レタルヤヲ明示セサル者ハ事實理由ノ不備ノ裁判ナリ(二十年五月五日) 犯罪ノ原由意思目的如何ノハ必ラス之ヲ明示セサルヘカラス(二十二年一月三十一日) 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ証憑十分ナラスト掲クルヲ以テ足ル者ニシテ逐一其理由ヲ明示スルヲ要セス(二十二年五月廿五日) 刑期ノ範圍ヲ明掲セサルモ其適用スヘキ法條ヲ明示スレハ足レルモノニシテ必ラス長期短期ノ範圍ヲ掲クルニ及ハス(二十三年第二百五十一號) 刑事ノ裁判ハ裁判官ノ心証ニ據テ爲スモノニシテ判文ニ証據ヲ列記スルハ唯其心証ノ憑ル所ヲ示スニ過キカレハ其種類性質ヲ詳記スルニ及ハス(二十四年二月廿八日) 事實ノ認定ハ承審官ノ權内ニ屬スト雖モ存在セサル証憑ヲ以テ架空ノ認定ヲ爲スヲ得ス(二十四年五月四日) 判文ニ唯証據物件ト記シテ其物件ノ何タルヲ明示セサルモノハ違法ナリ(同年六月十五日) 從犯者ノ犯罪ヲ斷定スルニ當リ正犯者ニ對スル被害者ノ告訴狀ヲ証憑トスルモ妨ケナシ(同年九月廿四日) 刑ヲ適用スルニ法律ノ理由ヲ付スヘキハ勿論ナレトモ刑法ノ總則ニ至リテハ一々之ヲ明示スルヲ要セス法律上事實ノ理由ヲ附スヘキ規定アルハ犯罪構成上必要ノ點ニ止マリ不必要ノ點ニ對シテハ之ヲ付セサルモ違法ニアラス(同年十月五日) 刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及法律ニヨリ其理由ヲ明示スヘキハ勿論犯罪ノ場所ハ裁判管轄ニ關係ヲ有スルモノニ付之ヲ明示セサル判決ハ理由不備ノ裁判ナリトス(二十五年九月十日)

**第二百四條** 判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス

可シ

判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡上

**同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ**

判決ノ言渡ハ即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス其次ノ開廷日ハ接着スル日ニ限ルニアラスト知ルヘシ又言渡ヲ爲スハ主文即チ刑期ノミハ之ヲ朗讀スヘシ之ノ間違ヒナカラシメンカ爲メナリ其理由ハ或ハ朗讀シ或ハ要領ヲ告クルヲ以テ足ルヘシ

大審院判決ニ曰ク辯論ヲ終リタル即日又ハ次ノ開廷日ニ判決ヲ言渡サス遲レテ之ヲ言渡シタリトテ其裁判ヲ無効ナリトシ破毀スルノ限ニ在ラス何トナレハ法律ノ明文ハ辯論ノ終リタル即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ言渡サナスヘシトノ規定ナルヲ勿論ナレトモ其事件錯雜ニ涉リ特ニ久シク思慮ヲ費シテ議決ヲ爲サルヲ得サル等ノ場合ニハ其言渡ノ遲延スルヲモ亦止テ得サルモノナレハナリ(二十四年四月九日) 裁判宣告書ニ一ノ憲字アレハトテ之ヲ以テ其裁判ヲ破毀スル程ノ瑕瑾トナスニ足ラス若シ之ヲ以テ全体ノ取調粗漏ナリトシテ上告ヲナサンニハ粗漏ノ點ヲ精確ニ指示セサルヘカラス(二十五年三月十四日) 判決ノ理由ヲ判決ノ言渡ト同時ニ朗讀セス又口頭ニテ其要領ヲ告知セサルハ本條第二項ノ規定ニ違反シタル不法ノ判決ナリ(二十六年十二月四日) 判決ノ言渡ニ辯護人ノ立會ナキモ不法ニアラス(二十七年九月十八日) 本條第二項ハ判決言渡ノ手續ヲ示シタルモノニシテ即チ判決ノ言渡ハ主文ノミニ止マラス必ラス其判決ノ理由ヲ告知スヘシト規定シタルニ過キス(二十七年六月)

**第二百五條** 判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、其事件ニ干

與シタル檢事ノ官氏名ヲ記載シ判事、裁判所書記共ニ署名捺印ス可シ

判決原本ノ製調方法タリ

○明治十四年  
司法省甲第七  
號

治罪法第三百  
十五條裁判書  
渡書ノ原本又  
ハ其拔書ヲ求  
ムル者ハ其用  
紙一枚金三錢  
ノ費用ヲ上納  
スル證ト可心  
得此旨相違候  
事

判決原本ニ記載シタル檢事ノ名前ト公判始末書ニ記載シタル檢事ノ名前ト異ナルトキハ效力アリ  
ヤ否ヤトノ問題ハ大審院ニ在テハ檢事ハ同一体ノ運用ヲ爲スモノナレハ上告ノ理由トナラス(二)  
十四年五月十五日)ト判決シ又花押ハ以テ實印ニ代用スルコトヲ得(同年十月十九日)セシメ又  
判決ノ原本ハ公訴私訴ヲ包含スルモノナリト論決(二十八年十一月三十日法曹會決議)ヲ爲シタ  
リ之レ至當トス

**第二百六條** 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムル  
コトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下  
付ス可シ

註釋 訴訟關係人ハ自費ヲ以テ判決ノ寫ヲ得ヘシ但上訴ノ爲メナリトセハ其時間ヲ定ム之レ本人ノ  
準備ノ爲メナリトス訴訟關係人中檢事ハ包含セス當然檢事ヘハ寫書ヲ廻送ス之レ執行指揮スル必  
要アレハナリ

**第二百七條** 對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受  
ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期  
間ヲ告知シ又對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ  
爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ  
若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經

**過ヲ停止ス**

註釋 世人ハ一般ニ法律規則ハ之ヲ知ルヘキモノト推知スヘシト雖モ尙ホ之カ注意ノ爲メ上訴シ得  
ヘキコト其期間ハ幾日ナリトノ事ヲ告知シ前條ノ寫ヲモ請求シ得ヘキ旨ヲモ示スニアリ  
其欠席ニ係ルトキハ故障ヲ爲スコト及ヒ其期間ヲモ記載スヘシ

以上ノ告知又ハ記載ナキトキハ更ニ通知アルマテハ上訴又ハ故障ヲ爲ス期間ハ停止セラル、モノ  
トス蓋シ既ニ法律カ告知シ又ハ記載スヘシト命シタル上ハ之レカ告知セス又ハ記載セサルトキノ  
制裁ヲ加ヘサルヲ得ス然ラサレハ效ナキニ至ルヘシ殊ニ此規定ハ被告人ノ爲メニ利益ナルモノナ  
レハ告知セス記載セサル爲メニ其利益ヲ奪フルコトヲ得スシテ却テ之ヲ保護セサルヘカラス恰モ  
第七十三條ト同一ノ理由トス

**第二百八條** 裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ  
記載ス可シ

- 第一 公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ禁シタルコト及ヒ其事由
- 第二 被告人ノ訊問及ヒ其供述
- 第三 證人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲ササル  
トキハ其事由

**第四 證據物件**

第五 辯論中異議ノ申立アリタルコト其申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ裁判

第六 辯論ノ順序及ヒ被告人ナシテ最終ニ供述セシメタルコト

公判始末書ヲ作り其記載スヘキ事項ヲ示シタリ

本條列記ノ事項ニ付テハ一々説明スヘキ必要ナシ只從來履行セサルヘカテサルモノ即チ事項中ニ於ケル要件トモ云フヘキモノハ印刷シテ不動文字トシタリシカ大ニ議論ヲ生ジタリシ佛國ノ如キハ之ヲ印刷シ置クヘカラストノ法令ヲ發シタリトス之レ眞實ニ行ハスニテ既ニ書ニ見ハル、ノ不都合ヲ避ケントスルニ之レ由リシナリ我邦ニ在テハ未タ其法令ナク却テ大審院ニ於テハ公判手續上一定ノ法式ニシテ必ラス履行セサルヘカテサル要件ハ豫メ印刷ニ附シ筆記ニ代用スルモ違法ニアラス(二十六年十月十二日)ト判決シタリ然レトモ實ハ筆記スルヲ以テ可トス  
裁判公行ハ之レ原則ナリ故ニ之カ記載ナキハ原則ニ依リテ公行シタリト推察スルヤ否ヤ然レトモ公判始末書ニ其事ヲ記載セサルトキハ果シテ公行シタリヤ否ヤ認メ難シト判決シタリ(二十六年十月五日大審院)

第二百九條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ記載ス可シ  
辯論數日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シ  
辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其旨ヲ記載ス可シ

公判始末書ニ記載スヘキ事項タリ

大審院判決ニ一旦陪席ヲ去リタル判事カ再ヒ裁判言渡ニ陪席干與スルハ裁判所構成法規則ニ違背シタルモノナリ(十九年四月十六日)審問中列席判事ノ變更アルニ當リ裁判長ハ假令被告ノ承諾アルモ新ニ審問ヲ爲サスシテ續審スルヲ得ス(二十五年十一月十日)審問及ヒ評議ニ干與セサル判事ニシテ言渡ノミニ干與シタルハ不法ナリ(二十七年六月五日)

第二百十條 公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可シ

公判始末書ヲ調製シ整頓スル時日ヲ規定シ裁判長ノ檢閲手續ヲ示シタリ之レ公判始末書ノ正確ヲ保障スルカ爲メトス

公判始末書ニ裁判長ノ署名ノミニテ捺印ナキトキハ法律ニ違背シタル文書ナレハ破毀ノ原因タリ(二十六年七月十日)公判始末書ニ裁判長差支アルトキニ其公判ニ干與シタル陪席判事代テ署名捺印シ其公判始末書ノ正確ナルコトヲ証スルハ不法ニアラス(二十七年六月廿五日)公判二回ニ涉リ前後立會書記ヲ異ニシタル場合ニ公判始末書ハ之ヲ整頓シタル書記一名ノ署名捺印アレハ足レリトス(同年十月二日)

第二百十一條 判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴訟記録ニ添付シ其裁判所ニ保

存ス可シ若シ上訴アリタルトキハ之ヲ上訴裁判所ニ送付ス可シ

後日証明ノ用ニ供スルモノナレハ之ヲ保存スルハ正當トス其上訴シタルトキハ上訴裁判所ニ送付スヘキハ勿論ニシテ敢テ異議ナキモノトス其上訴裁判所ニ於テハ第二百四十九條ノ手續ヲ爲スニアリトス

### 第二章 區裁判所公判

公判ヲ區別シテ區裁判所公判及ヒ地方裁判所公判トス控訴上告モ亦一ノ公判ニ外ナラサレトモ本法ハ之ヲ特ニ上訴トシテ區別シタルシカ其審理手續ニ付テハ敢テ公判ノ場合ト異ナルコトナシト知ルヘシ

第二百十二條 區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス

第一 檢事ノ起訴アリタルトキ

第二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ

區裁判所ハ當然違警罪及ヒ輕罪事件ヲ審理スルモノナリ而シテ違警罪ハ違警罪即決例ノ設ケアリテ今日ハ其所轄警察署又ハ分署ニテ裁判スルモノナレハ其即決ヲ受ケタル被告人ヨリ正式ノ裁判ヲ請求シタル時ニ受理スルモノナリト知ルヘシ其輕罪トハ裁判所構成法第十六條ニ依リ本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪

二年以下ノ禁錮又ハ單ニ參百圓以下ノ罰金ニ該リ其情第壹ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ

其受理スル場合ハ本條列記ノ如ク第一ハ檢事ノ起訴アリタルトキ即チ第六十三條ノ如ク第二ハ豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ即チ第六十二條ニ依リ原裁判所トシテ差戻シタルトキ第九十條ニ依リ裁判所ヲ指定シテ移シタルトキ第三十一條ニ依リ管轄裁判所ノ指定申請ニ因リ指定セラレタルトキ第三百七條ニ依リ再審ノ爲メ裁判所ヲ指定シテ移シタルトキ第三百十五條第二項ニ依リ裁判所ヲ指定シテ送致シタルトキニアリトス

第二百十三條 檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シ

裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシム可シ

檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出アランコトヲ裁判所ニ請求シ裁判所ハ被告人ニ對シテ呼出狀ヲ發スルモノトス  
被告人ニ對スル公訴ノ提起ハ必ラス書面ヲ以テスヘキコトヲ規定シタルモノニアラサレハ已ニ呼出テ受ケ出頭シアル被告人ニ對シ公訴ヲ提起スル場合ハ更ニ呼出狀ヲ發スルニ及ハス(三十年三月六日法曹會決議)

第二百十四條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名、職業、住所、出頭ノ日時、場所及ヒ被告事件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ナル

トキハ代人ヲシテ出頭セシムルコトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ

若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサ  
リシトキハ辯護準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

呼出狀書式ヲ規定シタリ而シテ第二項ノ場合ニ在テハ被告人ヲシテ利益ノ爲メニ猶豫スルモ  
ノトス

第一項ニ代人ヲシテ出頭セシムルコトヲ得セシムルハ其刑財産ナレハ本人ヲ要セス蓋シ勾束セザ  
ルカ爲メナリ其代人ニ於テモ未丁年者ハ其資格ナク明治六年第二十五號ノ代人規則ニ從フヘキ  
モノトス即チ心術正實ニシテ滿二十歳以上ノモノヲ撰ムヘシト云フ是ナリ其他ハ男女ヲ論セス代  
人タルヲ得ヘシト云ハサルヘカラス

第二百十五條 呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

本條ノ猶豫日數ハ辯護準備ノ爲メナリ第六十九條ノ猶豫日時ト誤ルヘカラス

第二百十六條 判事ハ豫審ヲ經サル被告事件急速ヲ要スルトキハ公判ニ取掛

ル前檢證處分ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ノ立會ヲ  
要セス

檢證處分ハ公判開廷ノ上ニテ之ヲ爲スヘク其前ニ之ヲ爲スヘキハ不當ナルカ如シ然ルニ區裁  
判所ノ管轄スル事件ニ付テハ豫審ヲ經サルヲ以テ豫メ檢證處分ナキハ勿論若シモ必テ開廷後ナ  
ラサルヘカラサルモノトスルトキハ急速ヲ要スル場合ニ於テモ止テ得ス開廷ヲ待タサルヲ得ス爲

メニ証據湮滅スルノ恐レアリ實ニ不都合ヲ生スヘシ故ニ例外トシテ本條ノ如ク規定スルコアリト  
ス

豫審ヲ經タル事件ハ假令檢證處分ヲ爲サ、リシモノト雖モ本條ヲ適用スヘカラス之レ豫審ニ於テ  
檢證ヲ必要ト爲サ、リシモノナレハナリ併シ開廷後檢證處分ヲ爲スニ於テハ決シテ妨ケト爲ラザ  
ルヘシ

檢事等ノ立會ヲ要セサルハ時機ヲ失ハシメサルカ爲メナリ其他ノ檢證手續ハ豫審判事ノ檢證スル  
手續ト同一トス

第二百十七條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ  
以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出頭シタル者ト雖モ異議ノ申立ナキトキハ裁判所ニ於  
テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得

開廷前証人ヲ呼出スヘキ場合ハカリ規定セリ即チ本條ニ依リ二十四時ノ猶豫ヲ以テ呼出  
スヘク開廷ニ際シ呼出ヲ受ケスシテ出頭シタル証人アリテ異議ノ申立ナキトキハ裁判所ハ證人ト  
シテ供述ヲ聽クコトヲ得ヘシ之レ便宜ニシテ微罪ナレハ可成簡易ノ手續ヲ爲スコアリトス

第二百十八條 判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所、出生ノ  
地ヲ問フ可シ

檢事ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

○明治六年第  
三十号布告  
自今年起計  
罪候檢年數  
月ト可相數事

公判審問ノ順序ニシテ先ツ第一着ニ判事ヨリ被告人ニ對シテ第一項ノ問ヲ發スヘキモノトス之レ人違ヒナキヲ確ムルニアリ

次ニ檢事ハ被告事件ヲ陳述スルモノトス  
判事ハ第一項ノ外ニ尙ホ勳章位記等ヲ有セサルヤ否ヤ年金ヲ得タルヤ否ヤヲ問フヘク之レ身分ニ付テノ必要アルカ爲メナリ

檢事ハ事件ヲ陳述シタル後ハ判事ハ被告人ニ向テ事實ヲ審理スルコト次條ノ如シ

**第二百十九條 判事ハ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問ス可シ**

必要ナル調書其他證憑書類ハ書記ナシテ朗讀セシメ又證人ノ供述ヲ聽キ其他證憑ノ取調ヲ爲ス可シ

若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、民事原告人ノ異議ナキトキハ他ノ證憑ヲ取調フルニ及ハス

檢事ニ於テ被告事件ヲ陳述スルトキハ之ニ序テ被告人ヲ訊問スヘキモノトス其訊問ヲ終リタルトキハ証據徵憑ヲ取調フルニアリ即チ本條ノ第二項ノ如シ假令被告人自白スルモ他ノ證憑ヲ取調フルヲ以テ正當ナリト雖モ檢事民事原告人ニ於テ異議ナキトキハ敢テ他ノ證憑ヲ取調フルニ及ハサルニアリトス

証據書類ハ書記ヲシテ朗讀セシムルヲ以テ原則トス然ルニ元ト此朗讀ハ被告人ノ利益ノ爲メナレハ既ニ其書類ヲ熟知シ居リ又ハ異議ナキトキハ朗讀セサルモ敢テ法律ニ違ヒタルモノニアラス大

審院ニ於テハ判決アリ即チ証據書類ノ朗讀ハ單ニ被告人ノ利益ノ爲メニスルモノナレハ被告人異議ナキトキハ之ヲ畧スルモ違法ニアラス(二十四年四月八日)書類朗讀ノ目的ハ被告人ヲ保護スルノ精神ナレハ假令朗讀セシメサルモ第九十八條ニ從ヒ其証憑書類ヲ被告人ニ示シテ意見ヲ問ヒ辯護ヲ爲サシメタル以上ハ朗讀セシメサルノミヲ以テ上告ノ理由トナスコトヲ得ス(二十四年第九號)被告人ニ於テ証據書類ヲ熟知シ讀ミ聞ケサルモ充分辯解シ得ヘキ者ニ付テハ故ヲ朗讀ヲ爲サ、ルモ違法ニアラス(二十六年十月十二日)証人ノ供述ハ讀聞ケサルモ不法ニアラス(二十七年十二月十一日)

**第二百二十條 證憑調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ**

被告人及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得

檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ナシテ供述セシム可シ

前條ノ如ク証憑ヲ取調ヘタル後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付意見ヲ陳述スヘキモノトス即チ事實ニ付辯論ヲナシ法律ノ適用ニ付正條ヲ示スニアリ次ニ被告人及ヒ其辯護人ハ之ニ對シテ辯論ヲ爲ス而シテ最終ニハ被告人又ハ辯護人ナシテ供述セシム遺憾ナカラシム  
第二審ニ於テ檢事カ原判決相當ニシテ控訴理由ナキヲ以テ棄却ヲ望ムトノ意見ハ本條ニ從ヒ法律適用ニ付意見ヲ陳述シタルモノナリト云フヘシ(二十七年八月十六日大審院判決)

**第二百二十一條 公訴ニ付キ辯論終リタル後民事原告人ハ被害ノ事實ヲ證明**

○刑事訴訟法 第四編 公判 百五十一

シ且私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ

被告人、辯護人及び民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得

前條ニ於テハ公訴事件ニ付既ニ辯論終了シタルモノナリ故ニ本條ニ於テハ私訴ニ付キ辯論ヲ爲スモノトス而シテ私訴ニ付テハ先ツ民事原告人ハ事實ヲ證明シ且私訴ニ付テ請求ヲ爲ス即チ一定ノ申立ヲ爲スニアリ之ニ對手人タル被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯スヘキモノトス  
檢事ハ法條ニ於テハ別ニ意見ヲ陳述スヘキコトヲ規定セサルモ其意見ヲ陳述スルモ可ナリ法律放  
テ禁セス

右ノ如ク私訴ニ付テハ公訴辯論ノ後ニ進行スヘキモノナルヲ以テ若シ公訴辯論終結前ニ民事原告人チシテ私訴ニ付被害ノ事實ヲ證明セシメタルハ不法ナリ(二十六年六月十五日大審院判決)  
辯論ハ一旦閉チタルトキハ再開スルコトヲ得サルヤ民事訴訟法第二百二十四條ニ於テハ既ニ明文アリ然ルニ刑事訴訟法ハ之カ明文ナシ故ニ再開ヲ禁スルカ如キ解釋ヲ爲ス人アラン然レトモ不干涉主義ヲ以テ私益ヲ保護スル民事訴訟法スラ辯論再開ヲ命スルニ公益ヲ保護スル刑事訴訟法ニ於テ之ヲ許サルノ理ナシ故ニ假令終結シタル後ト雖モ訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ再ヒ辯論ヲ爲サシムルコトヲ得ヘキモノトス(二十七年五月十八日同上)

第二百二十二條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲スコシ若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲スコシ

本條ノ場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

本條以下ハ判決ヲ爲スコトヲ規定ス本條ハ管轄違ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ナリトス而シテ管轄違ノ言渡ヲ爲ストキハ其裁判所ノ關係ヲ離脱スルコトアレハ被告人ヲ放免スルコト勿論ナリトス若シ拘留ヲ要スルモノナルトキハ既ニ拘留セラル、身分ナレハ前拘留狀ヲ存シ又未ダ拘留セラレサルノ人ナルトキハ拘留狀ヲ發スヘシ

第二百二十三條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ證據十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スコシ

第二百二十四條 犯罪ノ證據十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第六十五條第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲スコシ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ニシテ無罪ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ハ左ノ如シ  
一 犯罪ノ證據十分ナラサルトキ  
二 被告事件罪トナラサルトキ  
是ナリ即チ第六十五條第一第二號ニ於テ之ヲ説明シタリ

免訴ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ハ左ノ如シ

- 一 公訴ノ時効ニ罹リタルトキ
  - 二 確定判決ヲ經タルトキ
  - 三 大赦アリタルトキ
  - 四 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ
- 以上ハ第六十五條第三號以下ノ場合ニシテ尙ホ他ニ其同一ノ場合アルコトハ第六十五條ニ於テ説明シタリ參看スヘシ

證憑十分ナラサル場合ニ在テハ別ニ其理由ヲ示スニ及ハス（十九年四月一日太審院判決）又免訴ノ言渡ヲ爲スヘキニ公訴受理スヘカラサルノ言渡ヲナスハ失當ナレド被告人ノ利害ニ關係ナケレハ破毀ノ原由トナラス（二十二年一月十五日同上）トス

**第二百二十五條** 前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付キ其請求價額ノ多寡ニ拘ハラズ判決ヲ爲ス可シ

**註釋** 私訴ハ其請求ノ金額ニ付キ多寡ヲ論セス公訴ニ附帶シテ爲スコト已ニ第四條ノ規定ノ如シ從テ判決ヲ爲スニ於テ其多寡ヲ論セス即チ區裁判所ハ民事ニ付テハ金額百圓未滿ナルモ百圓以上ノ私訴ノ裁判ヲモ爲シ得ラル、カ如シ

前二條ノ場合トアルヲ以テ第二百二十二條ノ場合ハ如何爲スヘキヤ別ニ明文ナシト雖モ私訴ニ付テモ亦管轄違ノ言渡ヲ爲スヘキヲ正當ト爲ス（二十八年十月十九日法曹會決議）然レトモ現行例ハ公訴ニ於テ既ニ管轄違ノ言渡ヲナシタル以上ハ從テ私訴ニ於テモ當然管轄違ト爲リ別ニ言渡ヲ爲ス可トス

**第二百二十六條**

呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

**私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ闕席判決ヲ爲ス可シ**

**註釋** 本條欠席ヲ爲シタルトキノ手續ヲ規定ス即チ檢事ノ請求ニ依リ其請求スル所ヲ聽キ以テ欠席ノ規定ニ依リ原告人ノ請求ニ因リ其供述ヲ聽キ以テ欠席判決ヲ爲スモノトス尤トモ私訴關係人ノ双方期日ニ出頭セス若クハ一方出頭スルモ欠席判決ノ申立ヲ爲サ、ルトキハ民事訴訟法ヲ準用シテ少シク注意ヲ要スルハ刑事事件ニ在テハ假令判決ノ言渡ノ期日ノミニ欠席スルモ尙ホ本條ニ依リ欠席判決ヲ爲サ、ルヘカラサルモ民事事件ニ在テハ既ニ審理終結ノ後ハ判決言渡ノミニハ假令當事者出頭セサルモ對席ト同一ノ效力ヲ以テ判決ヲ言渡スモノトス之レ二者ノ區別アル所トス（二十八年五月十六日法曹會決議）

**第二百二十七條**

禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ非サレハ闕席判決ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ



於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親屬又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ一月間裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ公示ス可シ

〔註釋〕 欠席判決ヲ爲スヘキ順序ヲ定ム禁錮ノ刑ニ該ルヘキ事件ナルトキハ其豫審ヲ經タル事件ナレハ其終結言渡書又豫審ヲ經サル事件ナルトキハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニアラサレハ欠席判決ヲ爲スヘカラス

其送達スルコト能ハサルトキハ告知書ヲ發シテ後ニアラサレハ欠席判決ヲ爲スヘカラス何レモ其自由刑ナレハ鄭重ナラシムルニ外ナラス故ニ罰金ニ該ル事件ナルトキハ假令本人ニ送達セスト雖モ有效ナル送達(第十九條ニ基キ民事訴訟法第三百二十八條乃至第四百十八條、第五百十六條)ナルトキハ欠席判決ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

本條第二項ニ依レハ告知書モ本人ニ送達スル能ハサルトキノ規定ナレハ告知書ヲ本人ニ送達シタルトキハ如何スヘキヤ其規定ナキカ如シ然レトモ假令告知書ヲ本人ニ送達シタルニモ拘ラス期日ニ被告人出頭セサルトキハ欠席裁判ヲ爲スコトヲ得ヘキハ論ヲ俟タサルナリ

**第二百二十八條** 闕席判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席者ニ送達ス可シ

闕席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ得

〔註釋〕 欠席判決ハ欠席者ニ送達ス然ラサレハ判決ヲ知ラシムル途ナシ又欠席者モ判決ヲ知ルコトナシ

欠席判決ヲ受ケタルモノハ其判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ民事原告人欠席シタルトキハ其判決ヲ如何スヘキヤ第一項ニ從ヒ被告人ノ請求ニ因リ民事原告人ニ送達スルモノトス

**第二百二十九條** 故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮ノ刑ヲ

言渡シタル判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

〔註釋〕 故障申立ハ三日内ニ爲サ、ルヘカラス其期間起算方法ハ刑ノ種類ニ依リテ異ナリトス

- 一 罰金以下ノ刑ノ判決
- 二 私訴ノ判決

此二個ノ場合ハ欠席判決ノ送達ヲ以テ始マル

- 三 禁錮ノ刑ノ判決

此場合ニ於テハ左ノ二個ニ區別ス

- イ 被告人自ラ送達ヲ受ケタル日ヲ以テ始マル
- ロ 被告人判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

モノトス  
逮捕狀ハ刑ノ執行ヲ遅レタル者ニ對シテ發スル所ノモノナリ故ニ逮捕狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕スル

ハ即チ判決執行ノ處分ナリトス隨テ右ノ處分ニヨリ被告人ニ於テ刑ノ言渡アリタルコトヲ知ルハ勿論ナレトモ欠席判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知セザレハ其告知アルマテ故障期間ノ經過ヲ停止スルモノトス(二十五年十二月十五日、二十六年三月一日、同年五月十八日法曹會決議)私訴判決ノ故障期間ハ本條ノ如ク民事訴訟法ノ期間ト異ナレハ對審ノ時モ本案公訴判決ト同時ニ確定シ民事訴訟法ノ期間ヲ與ヘス(同年十月四日同上)欠席判決ニ對スル故障申立ハ刑ノ期滿免除ヲ得ヘキ期間ヲ經過シタル後ト雖モ尙ホ之ヲ爲スコトヲ得何トナレハ故障ヲ爲シ得ヘキ期間ニ付別ニ之ヲ制限ナケレハナリ(二十七年三月七日同上)故障期間起算點ハ幾年ノ後ニ至ルモ生シ得ヘキナリ而シテ法律ハ別ニ其年月ヲ限ラサルヲ以テ數十年ノ後ニ至ルモ尙ホ故障ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ又家族ヨリ判決ノ送達アリシコトヲ聞キ知ルモ本人直接ニ送達ヲ受クルニアラサレハ故障期間ハ尙ホ逮捕ノ日ヨリス(二十八年十一月三十日同上)

**第二百三十條** 故障ヲ申立テントスル者ハ關席判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可シ

〔註釋〕 故障申立書ハ其欠席判決ヲナシタル裁判所ニ差出スヘシ之レ上訴ニアラス更ニ審理ヲ求ムルモノナレハナリ

**第二百三十一條** 裁判所ニ於テハ故障ノ申立アリタルコトヲ相手方ニ通知シ

且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟關係人ヲ呼出ス可シ

〔註釋〕 故障ヲ申立タルトキハ更ニ審理スヘキモノナレハ本條ノ手續ヲ爲スコアリ

**第二百三十二條** 裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又故障ノ

期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ

〔註釋〕 故障申立アリテ前條ノ手續ヲ履行シタル後ハ本條ノ如ク裁判所ハ職權ヲ以テ

第一 故障ヲ許スヘキヤ否ヤ

第二 故障ノ期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤ

ヲ調査ス其第一ハ其判決カ故障ヲ許スヘキモノナラサルベカラザルヲ調査ス對席判決ニ對シテハ故障ヲ許スヘキモノニアラス又第二ハ第二百二十九條ノ期間内ナルヤ否ヤヲ調査スルコニアリ若シ其一ヲ欠クトキハ故障ノ申立ヲ棄却スルコニアリトス  
其棄却シタルトキハ如何ナル結果ヲ生スヘキヤ棄却セントキハ本案ハ欠席判決ノ如ク確定スルヲ以テ上訴ヲ爲スコトヲ得ヘキモノト云ハサルヘカラス即チ第二百五十條第二百六十七條ノ如シ而シテ上訴裁判所ニ於テ其上訴正當ナリトスルトキハ更ニ本案ノ判決ヲ爲ス必要アルヲ以テ第二百六十二條ヲ準用シ其事件ヲ欠席判決ヲナシタル裁判所ニ差戻スヲ以テ相當ト云フヘシ(二十六年九月廿一日、二十七年十二月七日法曹會決議)之ニ反シ故障ヲ許スヘシト云フトキハ如何スヘキヤ別ニ受理スヘシトノ判決ハ之ヲ爲スヲ要セス唯次條ニ因リテ通常ノ手續ヲ以テ本案ヲ審理スヘキノミ(二十六年十月四日同上)

**第二百三十三條** 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

前條ノ場合ニ於テ故障申立人關席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

【註釋】 故障ノ申立カ正當ニシテ受理シタルトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ス即チ欠席判決ハ空無ニ屬シ新テ取調フニアリ別ニ受理スヘシトノ判決ヲ爲スヲ要セス  
故障申立人其日欠席シタルトキハ尙ホ欠席判決ハ之ヲ爲スモ更ニ故障ヲ爲スコトヲ許サズ即チ控訴ヲ爲スノ途アルノミ

第二百三十四條 第二百四十七條 第二百四十八條ノ規定ハ闕席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ準用ス

【註釋】 第二百四十七條 第二百四十八條ハ期間ノ回復ノ場合ヲ規定シタリ同條ニ於テ其詳細ヲ知ルヘシ即チ故障ノ場合ニ於テモ同條ノ事項ニ出會スルトキハ故障ノ期間ハ之ヲ延長セシムルコアリト云フコ外ナラス

### 第三章 地方裁判所公判

【註釋】 地方裁判所ノ公判手續ヲ定ム此手續ハ第二百五十八條ニ依リ控訴ノ裁判ニ付テ適用シ第二百十六條ニ依リ特別事件ニ付テノ裁判ニモ準用セラル、モノトス

第二百三十五條 地方裁判所ニ於テハ豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪ノ公訴ヲ受理ス  
又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受理ス

【註釋】 地方裁判所ニ於テハ輕罪及ヒ重罪ノ公判ヲ受理スルモノトス其輕罪ニ在テハ區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノヲ除ク外ノモノナルコト論ヲ俟タス

一 檢事ノ起訴○此場合ハ豫審ヲ經サル簡易ノ輕罪ナリ

二 豫審判事ノ事件ヲ移ス裁判○重罪ハ勿論輕罪事件ニ付テモ同シ

三 上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判○既ニ區裁判所ニ於テ論シタルカ如ク第二百六十二條第二項ノ差戻シ事件第二百八十六條ノ移ス事件第三百十五條第二項ノ送致事件ナリトス

第二百三十六條 前章ノ規定ハ此章ニ別段ノ定メナキモノニ限り地方裁判所ノ輕罪、重罪ノ公判ニ準用ス

【註釋】 區裁判所ノ公判手續ハ地方裁判所ノ公判手續ニモ準用スルモノナリ故ニ前第二章中第二百三條乃至第二百三十四條ヲ準用ス但シ第二百十九條第三項ニ於テハ自白アレハ他ノ証憑ヲ取調フルニ及ハサル旨ナレトモ本章中第二百三十九條ニ依リ自白シタルトキモ尙ホ証憑ヲ取調ヘサルヘカササルモノトス之レ二者ノ相違スル所トス

第二百三十七條 重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタルヤ否ヤヲ問フ可シ  
若シ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ異議ナキトキハ辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得  
書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ

重罪事件ハ實ニ公益上ニ於テ重大ナルモノナリ同時ニ被告人ニ於テモ榮譽、財産、身体上ニ大關係ヲ來タシ若シ無辜ヲ罰スルトセハ回復スヘカラサル汚辱ヲ受ク故ニ可成的鄭重ニ爲シ免スヘキモノハ之ヲ免シ罰スヘキモノハ之ヲ罰スル等明ヲカニ爲サ、ルヘカラス之レ重罪ニ付テハ特ニ本條ヲ設ケ辯護人ヲ付スルヲ以テ一ノ條件ト爲シタル所以ナリ

夫レ重罪ニ付テハ必要辯護ノ主義ヲ採用シ刑事訴訟上必要ナル法式ト爲シタル以上ハ假令被告人ノ明ヲニ拋棄スルモ又ハ暗黙ノ拋棄即チ欠席スルモ必ラスヤ裁判官ハ本條ノ規定ニ從ヒ辯護人ヲ撰任セサルヘカラス大審院モ其主義ヲ是認シ被告人欠席シテ自ラ辯護人ヲ選定セサルトキト雖モ尙ホ裁判長ハ辯護人ヲ選任セサルヘカラス(二十七年二月一日)ト判決シタリ

第二百三十八條

裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ檢事其

他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲

シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

臨檢處分ヲ爲シ報告ヲ爲スハ事實ノ發見上必要ノモノナリ區裁判所ニ在テハ第二十六條ニ依リ公判前ニ檢証處分ヲ爲スコトヲ許シタリシカ地方裁判所ニ於テハ其明文ナシ然レトモ第二十六條ニ依リ準用スルコトヲ得ヘケレハ豫審ヲ經サル事件ニ付テハ公判前ト雖モ檢証シ得ヘク且本條ハ豫審ヲ經タルモノト否トヲ論セス臨檢處分ヲ爲スコトヲ得ヘキヲ示シタリトス

第二百三十九條

裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ自白シタルトキト雖モ仍ホ證

憑ヲ取調ヘサル可カラズ

區裁判所

區裁判所ノ事件ト異ナリ何レモ輕々ニ看過スヘカラス故ニ假令自白アルモ尙ホ他ノ証憑ヲ取調ヘサルヘカラス例ヘハ身貧ニシテ故サヲニ盜ヲ爲シテ入監シ糊口ヲ凌ク徒アリ又他人ノ罪ヲ引受ケテ以テ入監スルアリ俠客ノ徒此類多シ斯ノ如キハ十分之ヲ取調ヘサルヲ得ス即チ假令盜ヲナシタリト云フモ果シテ被害者アルヤ否ヤ假令其罪ヲ引受ケ來ルモ實際其モノナリヤ否ヤ必相手方ヲ取調フルノ類ナリトス

第二百四十條

裁判所ニ於テハ被告事件區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト認

タルトキト雖モ第一審ノ判決ヲ爲スコシ

私訴ニ付キ其請求ノ價額通常民事上區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキ亦同シ

大ハ小ヲ包含ス殊ニ同審級ノ裁判所ニ於テハ尤トモ然リトス故ニ假令區裁判所ノ管轄事件ナリト雖モ管轄違ヲ言渡スヘカラス必ラスヤ其裁判所ニ於テ第一審ノ判決ヲ爲サ、ルヘカラス私訴ニ於テモ亦同シ殊ニ私訴ハ公訴ニ附帶スルモノナレハ公訴事件重罪ナリシトキモ其贓物ノ返還損害ノ賠償ハ百圓未滿ノモノアルヘシ一々管轄違ヲ言渡ストキハ附帶セシメタル效ナキニ至ルヘシ

第二百四十一條

裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスル

トキ又ハ檢事ヨリ更ニ其事件ヲ重罪トシテ訴追スルコトヲ申立タルトキハ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲スコシ但被告人勾留ヲ受ケタルトキハ勾留狀ヲ發スコシ

其被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ  
受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ事件ヲ受理シ審判スルニ際シ左ノ場合ヲ生スヘシ

- 一 輕罪トシテ受理セシ事件重罪ナリトスルトキ
  - 二 檢事ヨリ更ニ事件ヲ重罪トシテ訴追スルトキ
- 此二個ノ場合ニ於テ元ト其事件カ豫審ヲ經タルモノナルト否トニ依テ手續ヲ異ニス
- 一 豫審ヲ經サルトキ ○此場合ハ其事件ヲ豫審判事ニ送附スル決定ヲ爲スヘシ被告人若シ拘留ヲ受ケサルトキハ拘留狀ヲ發スヘシ
  - 二 豫審ヲ經タルトキ ○此場合ハ公判ヲ停止シ更ニ重罪事件トシテ裁判スル旨ヲ決定シ受命判事ヲシテ其事件ノ下取調ヲ爲サシメ報告ヲ爲サシムルニアリ
- 以上受命判事ニ在テハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得ヘシ之レ恰モ豫審ヲ爲スニアレハナリ

### 第五編 上訴

上訴トハ控訴、上告、抗告ヲ總稱ス之ヲ細別スルトキハ控訴トハ第一審ノ裁判ヲ再々

裁判スルニアリテ所謂覆審ナリ故ニ事實ノ審判トス之ヲ第二審ト云フ上告ハ第二審ノ判決ニ對シテ裁判スルモノナレトモ事實ニハ立入ラス只法律ノ點ニ於テモ當否ヲ判斷スルモノトス之ヲ第三審ト稱ス抗告ハ訴訟ノ手續上ニ付キ改正ヲ求ムル手續ナリ前二者ト其性質ヲ異ニスルモノトス

### 第一章 通則

上訴ノニ關スル一ノ總則ナリ

第二百四十二條 檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ許シタル上訴ヲ爲スコトヲ得  
檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メニモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得

上訴ヲ爲ス權ヲ有スルモノハ檢事其他訴訟關係人ナリ即チ被告人、民事原告人、民事擔當人等是ナリ而シテ其上訴ハ法律ノ許シタルモノナラサルヘカラス即チ控訴ニ付テハ第二百五十條、上告ニ付テハ第二百六十七條抗告ニ付テハ第二百九十三條ナリトス其他ハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス上訴ヲ爲スニアリ社會中ニハ其被告人モ亦包含セラル、一分子タリ故ニ被告人ノ利益ノ爲メニモ亦上訴ヲ爲スヲ得ヘシ例ヘハ無罪又ハ免訴タルヘキモノニ有罪ノ判決ヲ下シタルトキノ如シ之レ被告人ノ爲メニ不利益ノ裁判ナレハ檢事ハ之カ上訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

然レトモ私訴ニ付テハ民事原告人又ハ被告人ノ爲メニモ上訴ハ之ヲ爲サス蓋シ檢事ハ公益上ニ付テハ保護權ヲ有スルモ私益上ニハ保護スル權ナシ否ナ必要アラサルナリ私訴ニ付テ上訴ヲ爲スハ

民事原告人、被告人、民事擔當人ニアリトス

大審院ノ判決ニ檢事ハ私訴ニ付上訴スル權ナシ(二十二年四月廿四日、同年五月廿二日)

第二百四十三條 辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ノ明言

シタル意思ニ反スルコトヲ得ス

辯護人モ被告人ノ爲メニ被告人ニ代リテ上訴ヲ爲ス權ヲ有ス尤トモ辯護人ハ被告人ヲ代表スルニアレハ被告人ニ於テ明言シテ上訴ヲ爲サスト云フトキハ獨立シテ上訴スル權ナシ而シテ本條ニ「明言シテ」トアルハ被告人ハ明ラカニ上訴ヲ爲サスト云ハス只暗黙ニ付シ去リ辯護人ノ爲スカ儘ニ爲シ置クトキハ法律ハ辯護人ハ被告人ノ利益ノ爲メニ爲シタリト看做セリ故ニ明言セサル以上ハ被告人モ同意ヲ表シタリト云フニ外ナラス

被告人自ラ上訴ヲ爲シタルトキハ辯護人其依頼ヲ待タズ獨立シテ之カ上告ヲ爲スコトヲ得ス(二十五年五月三十日大審院判決)又本條ハ被告人ノ委任ナキモ辯護人ニ於テ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スヲ得ヘキ特例ニシテ特ニ此條ヲ設ケタルハ辯護人トシテ訴訟ニ關係シタルモノハ事實ヲ知悉スルニ仍リ法律上代理權ヲ與フルハ被告人ノ利益ナリト認ムルヲ以テナリ故ニ第一審ノ判決ニ對シ主タル上訴ヲ爲シ得ヘキモノハ第一審ノ時既ニ選定シタル辯護人ニ限り第二審ノ辯護人ハ代理權ヲ有セサルモノトス(二十九年十二月十四日同上)

第二百四十四條 被告人ノ法律上代理人ハ獨立シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

被告人ノ法律上代理人ハ勿論獨立シテ上訴シ得ヘシ之レ被告人ノ一身ヲ保護シ代表スルモノナレハ彼ノ後見人ノ如キ管財人ノ如キ是ナリ

第二百四十五條 拘留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ監獄署ニ

差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ

上訴手續ハ上訴ノ申立書ヲ裁判所ニ差出スニアリ控訴ナレハ控訴申立書ヲ其裁判所ニ送致ス可シ所ニ差出スモノトス其拘留セラレタル被告人ハ自ラ差出スコトヲ得サレハ監獄署ノ長即チ典獄ノ取次ヲ受クヘキモノトス

上訴申立書ハ裁判所ニ差出スト雖モ上訴ヲ管轄スル裁判所ニ宛テ、爲ス故ニ區裁判所ノ控訴ナレハ地方裁判所長ニ宛テ地方裁判所ノ控訴ナレハ控訴院長ニ宛テ控訴院ノ上告ニ係レハ大審院長ニ宛ツルカ如シ

上訴申立書ハ其上訴ノ期間内ニ裁判所ニ差出サ、ルヘカラス然ルニ其拘留セラレタルトキハ其申立書ハ期間内監獄署長マテ差出スト雖モ其效アリ大審院ハ上訴期間内ニ監獄長マテ申立書ヲ差出シタルトキハ其上訴ハ有效ナリトス(二十七年十二月十四日)ト判決セリ

第二百四十六條 檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決アルマテ何時ニテ

モ之ヲ取下クルコトヲ得

檢事ハ上訴ヲ取下クルヲ得サルハ勿論ナリ檢事以外ノ上訴ヲ爲シタル人ハ何時ニテモ其上訴ヲ取下クルコトヲ得ヘキモノトス殊ニ取下ハ本條ニ於テ上訴人ニ與ヘタル權利ナレハ裁判所ハ取下ヲ許否スル職權アルコトナシ又一度上訴ノ取下ヲ爲シタルトキハ假令未タ上訴期間ノ經過セサル内ト雖モ更ニ上訴ヲ爲スコトヲ許サス蓋シ一度上訴ヲ爲シタルトキハ之ト同時ニ上訴期間ハ消滅スルモノナレハナリ(二十七年九月廿日法曹會決議)

又一旦取下願ヲ差出シタル上其取下願ヲ引戻スコトヲ得ヘキヤ大審院ハ此場合ニ付判決セリ即チ上告取下願ヲ差出シタル上ハ其取下願ノ引戻ヲ願出ツルモ上訴ノ權ハ右引戻願ヲ差出ス前ニ於テ

已ニ喪失シタル者トス何トナレハ上訴ノ取下ハ當事者ノ特權ニ屬シ一旦當事者ヨリ其取下ノ旨ヲ公言シタル上ハ當然其時ヨリ取下ノ效力生シ即チ前ノ上訴申立ハ全ク無効トナルヘク隨テ上訴ノ期間仍ホ存スルコト非サルヨリハ再ヒ上訴申立ヲ爲スヲ得サルコト至レハナリ左レハ申立人ノ主張スル如ク取下願引戻願共ニ同時ニ原院ニ到達シタリトスルモ其取下願ハ引戻願ニ先ツテ勿論ナレハ上訴ノ權ハ右引戻願ヲ差出スノ前ニ於テ既ニ喪失シタルモノトナサルヘカラス(二十五年三月十七日)ト以テ一旦取下願ヲ出セハ上訴權ノ消滅シタルコトヲ知ルヘシ

**第二百四十七條** 訴訟關係人天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ疏明シタルトキハ期間ヲ經過シタルニ因リ失

ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間内ニ其疏明方法ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲ス可シ

註釋 上訴コハ各期間アリ控訴ハ五日ニシテ上告、抗告ハ三日トス故ニ第十七條ニ依リ此期間ヲ經過シタルトキハ上訴權ヲ喪失スルコト勿論ナリトス只第二百七條ノ場合ニ於テノミ故障期間ノ經過ヲ停止スルナリ

然ルコト天災又ハ避クヘカラサル事變ノ爲メニ上訴期間ヲ經過シタルトキハ之レ自己ノ過失懈怠ニアラサルカ故ニ其權利ヲ回復セシメサルヘカラス其方法ハ其旨ヲ疏明スルニアリ故ニ障礙ノ止ミタル日ヨリ右ノ五日若クハ三日内ニ其疏明方法ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲スヘキモノトス例ヘハ洪水ノ爲メ通行遮斷セラレタルトキハ町村長ノ証明書ヲ以テ何時ニテモ証明スル旨ヲ記載スルカ如シ天災又ハ事變ノ爲メト限レルカ如キモ彼ノ定期航海ノ外便船ナキ小笠原島ノ如キハ其定期航

海ヲ待ツ日數ハ之レ天災又ハ事變ノ中ニ包含セシメサルヘカラス之レ注意ヲ要スヘキ点ナリトス

**第二百四十八條** 前條ノ申立アリタルトキハ裁判所書記速ニ其申立書ヲ相手方ニ送達ス可シ相手方ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ先ツ其申立ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

註釋 裁判所書記ノ手續及ヒ上訴裁判所ノ決定ヲ規定セリ大審院ハ上訴期間ヲ經過シタル上告申立ニシテ特別ノ場合(第十七條第百四十七條)ニ適スルトキハ其當否ハ上訴ヲ裁判スヘキ裁判所ニ於テ決定スヘキモノニシテ原裁判所ノ裁判スヘキニ非ラス(二十五年一月四日)ト判決セリ

**第二百四十九條** 上訴完結ノ後其訴訟記録ハ上訴審ニ於テ爲シタル裁判ノ附本ト共ニ第一審裁判所ニ之ヲ返還ス可シ

註釋 一件記録ハ原裁判所ニ於テ保存ス之レ第一審裁判所ニ於テ總括保存スルヲ便宜ナレハナリ其上告ヲ爲シタルトキハ審級ノ順序ヲ經テ還付スヘキモノトス之レ第二百五十六條第一項第百七十七條ノ規定ニ依リテ知ル

**第二章 控訴**

控訴

註釋 本章ハ上訴中第一着ノ控訴ニ付テ規定シタリ

控訴ハ豫納金ヲ要ス輕罪ニ付テハ拾圓重罪ニ付テハ貳拾圓トス其手續上欄ニ列記シタリ

○明治十八年  
一月六日第二  
号布告  
明治十四年十  
二月第七十四  
号布告ヲ廢シ

旨令控訴ニ係  
ル控訴ハ左ノ  
規則ニ從ヒ之  
ヲ爲スコトヲ  
得但治罪法中  
此規則ニ抵觸  
スル條件ハ當  
分ノ内施行セ  
ス

第一條(削除)

第二條(削除)

第三條 被告  
人公訴ノ我  
判言渡ニ對  
シ控訴ヲ爲  
サントスル  
トキハ裁判  
費用ノ保證  
トシテ金拾  
四ヲ豫納ス  
ヘシ

第四條 被告  
人ニ於テ證  
人鑑定人ノ  
呼出ヲ請求  
スルトキ前  
條保證金ニ  
テ不足ト認  
ムル場合ニ  
於テハ別段

且注意ヲ要スヘキハ豫納金ハ控訴成立ノ一條件ナレハ豫納金ヲ出サス又ハ免除ヲ得タルモノ、外  
ハ控訴ヲ爲スモ其效ナキモノトス  
大審院判例ニ曰ク重罪控訴豫納金規則ニ從ヒ一旦保證金ノ免除願ヲ爲シ後日其願ヲ取消シ保證金  
ヲ上納スルモ元來免除ノ條件ヲ具ヘス且其上納ノ時期既ニ控訴期間經過後ニ係ルトキハ其控訴ハ  
不成立ナリトス(二十六年六月一日)以テ証スヘシ

第二百五十條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル本案  
ノ判決及ヒ第百八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ  
得

控訴ヲ爲スヘキ判決ハ左ノ如シ

- 一 區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル本案ノ判決  
是ナリ
- 二 第百八十七條ノ本案前ノ判決

第二ハ本案ノ判決ニアラサルモ言渡ヲ以テ終局スルカ故ニ本案前ト雖モ控訴ヲ爲スコトヲ得セリ  
ムルナリ第一ハ本案ノ判決ナレハ無論ナリシカ本案ニ關スル判決モ亦包含セシメサルヘカラス彼  
ノ管轄違ノ言渡不法ナルトキノ如シ例ヘハ公判ノ手續ヲ盡サス單ニ一件書類ノミニ依リ管轄違ノ  
言渡ヲ爲シタルトキノ類ナリ若シモ此場合ニ上訴スヘカラスナルモノトセハ不法ノ判決ニ甘シセザ  
ルヘカラスナルノミナラス終局判決ト爲リ訴訟關係人ノ迷惑トナルヲ以テナリ

第二百五十一條 控訴ハ判決ノ一分ニ限り之ヲ爲スコトヲ得若シ之ヲ限ラサ  
ルトキハ判決ノ全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノト看做ス可シ

費用ヲ豫納  
スヘシ

第五條 治安  
裁判所ニ於  
テ爲シタル  
釋罪ノ裁判  
言渡ニ對ス  
ル控訴ハ管  
轄罪裁判  
所ニ之ヲ爲  
スヘシ其控  
訴ヲ受ケタ  
ル裁判所ニ  
於テハ治罪  
法中釋罪ノ  
控訴ニ付キ  
定メタル規  
則ニ從ヒ之  
ヲ裁判スベ  
シ

右奉勅官布告  
候事

○明治二十三  
年二月八日法  
律第七號

重罪控訴豫  
納金規則

第一條 重罪  
ノ刑ノ言渡

單ニ控訴ヲ爲スト云フトキハ判決全部ニ對シ控訴ヲ爲スモノト看做スナ當然トス其明ラカ  
一部ノミチ控訴スルトキハ其限リタル部分ニ於テノミチ控訴ヲ爲シタルモノト云フヘシ  
大審院ニ於テ第二審ニ於テ第一審ノ判決ノ一部ニ瑕瑾アリト認メ之ヲ取消ス場合ハ其判決ノ全部  
ヲ取消シ更ニ判決スルヲ相當ナリトス(二十七年十月廿三日)ト判決シタリ

第二百五十二條 控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日トス  
闕席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間内故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲ス  
コトヲ得

控訴ノ期間ハ判決ノ言渡アリタル日ヨリ五日トス而シテ總則第十五條ニ依リ其日ノ翌日ヨリ  
起算スルモノナリ其私訴ニ付テモ主タル公訴期間ニ從フヘキハ勿論ナリ(二十八年十一月十七日  
法曹會決議)

欠席判決ハ故障ノ期間内直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得ヘキモノナレハ其時ノ控訴期間ハ故障ノ期間  
ナリトス之レ故障ノ期間内トアルヲ以テ知ルヘシ(二十九年二月廿九日同上)尙ホ控訴期間ハ五  
日ヨシテ故障期間ハ三日ナレハ其餘地二日間ニ付テハ仍ホ控訴ヲ爲シ得ヘキヤ如何ト此問題ニ  
付テハ法曹會ハ左ノ如ク議決シタリ

欠席判決ヲ受ケタル者故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴スルトキハ普通ノ控訴期間ニ依ラス故障ノ期  
間即チ三日内ニ於テ之ヲ爲サ、ルヘカラス蓋シ本條ニ「故障ノ期間内云々」ト規定シタルヲ  
見レハ單ニ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得ト云フノ意ニアラス併セテ其控訴ヲ  
爲スニハ普通ノ控訴期間ニ依ラス故障ノ期間即チ三日内ニ之ヲ爲スヘキコトヲ示シタルモノト解  
セサルヘカラス且此場合ニ於ケル控訴ノ期間ヲ五日ナリトスルトキハ第二百二十九條ノ規定ヲ無



カ受ケタル者控訴ヲ爲シトスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金貳拾圓ヲ豫納スヘシ

第二條 重罪ノ刑ノ音渡チ受ケタル者貧困ニテ保證金ヲ豫納スル能ハサルトキハ

控訴ノ申立ト同時ニ保證金ノ免除ヲ請求スルコトヲ得

第三條 保證金ノ免除ヲ請求シタル者ハ其請求ヲ爲シタル日ヨリ十四日以内ニ控訴ノ意思書ト共ニ裁判費用支拂ノ宜

效ナラシムルニ至ル何トナレハ同條ニ依レハ欠席判決ヲ受ケタル者判決ノ送達アリタルヨリ三日以内ニ故障ヲ爲サレハ其判決スルモノナリ然ルニ故障ノ期間三日ヲ經過スルモ尙ホ五日以内ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ルモノトセハ三日ヲ經過スルモ尙ホ其判決ハ確定シタルモノトシテ之ヲ取扱フコトヲ得サレハナリ(二十五年四月十六日)故障申立人公判期日ニ欠席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得サルモ控訴ハ之ヲ爲スコトヲ得(二十九年一月廿五日法曹會議)欠席判決ヲ受ケタル者故障ヲ爲サスレテ直チニ控訴ヲ爲ストキハ普通ノ控訴期間ニ依ラス故障ノ期間ニ依ルヘキモノトス(二十九年二月二十九日同上)

第二百五十三條 本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間内及ヒ控訴アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停止ス

第二百五十四條 控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

裁判所ハ控訴ノ申立アリタルユトテ速ニ相手方ニ通知ス可シ

控訴ヲ爲スニハ其控訴ノ申立書ヲ原裁判所ニ差出スモノトス其差出スヘキノミニシテ宛名ハ控訴ノ裁判所ナリ例ヘハ地方裁判所ノ事件ナルトキハ控訴院長ニ宛テ區裁判所ノ事件ナルトキハ地方裁判所長宛ナリトス

裁判所ハ控訴ノ申立アリタルトキハ書記ヨリ其相手方ニ通知スルモノトス即チ檢事ノ控訴ナルトキハ被告人ニ通知シ被告人ナルトキハ公訴ニ付テハ檢事ニ私訴ニ付テハ民事原告人ニ通知スルヲアリトス

通知ヲ怠リタルトキハ如何大審院ハ本條第二項ノ規定ハ控訴ノ相手方ヲシテ辯護ノ準備ヲ爲スコトヲ得セシムルノ手續法ナルヲ以テ之カ通知ヲ怠リタルモ相手方ニ於テ辯護ヲ爲スニ差支ナク且異議ノ申立アラサル限りハ之カ通知ヲキナ甘諾シタルモノト看做サルヘシ(二十四年七月廿三日)ト判決シタリ

第二百五十五條 原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル控訴ノ申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

期間ヲ經過シタル控訴ノ申立ハ控訴成立セサレハ棄却スルモノトス而シテ原裁判所ニ於テ之ヲ爲サシムルハ手數ヲ省ク爲メナリ

第二百五十六條 訴訟記録ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ檢事ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監獄ニ移ス可シ

訴訟記録ハ檢事ヨリ檢事ヘ送致シ檢事ヨリ又裁判所ニ差出スヘキモノトス被告人拘留セラレタルモノナルトキハ扣訴裁判所ノ所在ノ監獄ニ移付スル手續ヲ爲スヘキモノトス

第二百五十七條 控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

カナキコトヲ設スヘキ住居地市町村長ノ證明書ヲ差出スヘシ但此市町村役場三里以外ニ在ルトキハ治罪法第十九條ニ規定シタル猶豫ヲ與フ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

【註釋】 扣訴裁判所即チ控訴院又ハ地方裁判所ニ於テハ扣訴ノ審理ヲ爲スカ爲メニ訴訟關係人ニ呼出スニアリ其準備ノ爲メニ二日ノ猶豫ヲ與フヘキモノトス  
本條第二項ノ規定ヲ怠ルモ開廷ノ當日辯護ニ差支ナク且異議ノ申立ナキ以上ハ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス(二十四年七月廿三日大審院判決) 辯護人ニ對スル呼出狀モ亦本條ニ依ラサルヘカラス(三十年一月廿二日同上)

第二百五十八條 控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス

【註釋】

第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリトセサルトキハ之ヲ呼出ササルコトヲ得  
【註釋】 控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用スルニアレハ第二百三十六條ニ基キ第二百十八條第二百十九條第二百二十條第二百二十一條ノ手續ヲ準用シ尙ホ第二百三十九條ニ從フヘキモノトス而シテ其少シク異ナルハ檢事ノ控訴ニ係ルトキハ控訴ノ趣旨ヲ陳述シ被告事件ノ陳述ニ代ヘ被告人ノ控訴ニ係ルトキハ先ツ被告事件ノ陳述ニ先テ被告人ヨリ控訴ノ趣旨ヲ陳述スルヲ以テ審理上自然ノ順序ナリトス(二十七年三月廿九日大審院判決)  
証人鑑定人モ新メニ呼出スコトヲ得ヘキノミナラス第一審ニ於ケルモノモ亦再度呼出スコトヲ得ヘシ然レトモ必要ナラサルトキハ呼出サ、ルコトヲ得ヘキハ敢テ明文ヲ要セサルニアリトス

明治二十三年十月三十一

シ但控訴ノ事由ナシト認ムルカ又ハ事由アルモ實益ナシト認ムルトキハ免除ナリトス  
第六條 保證金ノ免除ナキトキハ控訴ノ申立ハ其効ナキモノトス  
第七條 被告ハニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ第一條ノ保證金ニテ不足ト認ル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第二百五十九條 控訴ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

【註釋】 附帶控訴ハ主タル控訴サヘアルトキハ何時ニテモ爲スコトヲ得ヘシ其爲シ得ラル、人ハ被告人ハ勿論民事擔當人民事ニ於ケル民事原告人ノ如キ原裁判所ノ檢事ハ控訴裁判所ノ檢事ヲシテ附帶控訴ヲ爲サシムルコトヲ得ヘク假令對手方コアラサルモ控訴裁判所ノ檢事亦獨立シテ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

主タル控訴ノ期限内外ヲ論セサルヲ以テ主タル控訴ノ成立不成立ニ付其影響附帶控訴ニ及ホスコトアルヘシ左ニ大審院ノ判決ヲ示ス  
主タル控訴有效ニ成立セサルトキハ期間外ニ爲シタル附帶控訴モ亦其效ナシ何ナレハ本條ニ控訴期間外ト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ許シタルハ要スルニ他ノ有效ニ成立シタル控訴ノ在ルアリテ之ニ附帶スルノ故ニ外ナラサレハ其附帶スヘキ主タル控訴ノ消滅シタル以上ハ從テ附帶控訴ノ成立セサルヲ推シテ知ルヘク特ニ法律ノ明文ヲ俟タサレハナリ(二十四年六月十九日、同年九月廿八日) 數個ノ所爲中第一審ヲ經サル所爲アリ之ニ對シ附帶控訴ヲナスコトヲ得ルヤ曰ク爲スコトヲ得ス何ナレハ控訴ノ事實ノ覆審ヲ求ムルモノニシテ第一審アツテ始メテ起ルモノナレハ附帶控訴モ亦第一審ヲ經タル事件ニ對スルコアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得サレハナリ(二十四年第四號事件) 第一審裁判所檢事ノ控訴アリタル場合ハ控訴裁判所檢事ハ其對手方コアラサルモ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得(二十六年五月廿二日) 附帶控訴ハ其事件ニ對スル主タル控訴アル場合ニ於テ之ニ附帶シテ提起スヘキモノナレハ其對手方及其事件ハ必ラス同一ナラサルヘカラス若シ其一ヲ異ニスル場合ニ於テハ附帶控訴トシテ提起スルヲ得サルモノトス(二十六年十二月十八日) 對手人

日內務省令第五号  
重罪輕罪ノ公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ハ上告ニ由リ他ノ裁判所ニ移スノ旨渡アリタル場合ニ於テ被告入拘留中ノ費用並ニ裁判確定ノ後囚人ニ係ル費用ハ總テ最前裁判所言渡アリタル地方ノ監獄費ヲ以テ交還シ其費用ハ一日金ニ拾錢トス但裁判確定後囚人ハ減車又ハ減船ニ依リ最モ移送ニ便ナル地方ニ在テハ原地方廳ノ請求ニ依リ送還スルコトヲ得此場合ニ於テ

カ其通常期間外ニ爲シタル附帶ノ上訴ハ其主タル上訴ノ取下ト爲リタルトキハ自然ニ消滅スルヲ至當ナリトス(二十五年七月六日法曹會決議)

**第二百六十條** 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期間ノ經過後ニ係ルモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

**註釋** 控訴ハ其期間内ニ申立テサルトキハ效ナキコト勿論ナリ故ニ先ツ之カ調査ヲ爲サ、ルヘカラス若シ其控訴ニシテ期間ヲ經過シタルモノナルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ爲スニアリ之レ本案ニ入ルニ先ダテ控訴ヲ爲ス手續已ニ其效力ナキカ故ナリトス

第二百五十五條ト如何ナル差異アルヤヲ疑ハシム然レトモ同條ハ原裁判所ニ於テ棄却スルモノヨシテ未タ記録カ控訴裁判所ヘ送付セサル以前ニ於テ明ラカニ認メ得ヘキ場合ニアリシカ本條ハ已ニ控訴裁判所ニ於テ呼出ヲ爲シ審理ニ取掛ルトキニ於テ調査ヲ爲ス場合ニ發見シタルモノナリ故ニ二者ノ區別アルヲ知ルヘシ

**第二百六十一條** 控訴裁判所ニ於テハ控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ控訴ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲ス可シ

**註釋** 控訴裁判所ニ於テ事件ヲ審理シ左ノ二個ノ内一ニ判決ヲ爲スヘキモノトス即チ一 控訴ノ理由ナキトキ○此場合ニ於テハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却スヘシ之レ控訴不當ナルカ故ナリトス

二、控訴ノ理由アリシトキ○此場合ニ於テハ原判決ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲スニアリ之レ控訴正當ニシテ原判決カ不當ナルヲ以テナリ

大審院ニ於テハ本條ノ場合ニ判例多シ第二審ニ於テ第一審ト異ナル事實ノ判定ヲナシタルトキハ本條後段ニ依リ第一審裁判ヲ取消シ更ニ相當ノ判決ヲ爲サ、ルヘカラス然ルニ原院カ第一審ト異ナル事實ノ判定ヲ爲シナカラ第一審判決ヲ認可シタルハ不法ナリ(二十三年第二百四十號事件)控訴裁判所ハ原裁判所ノ認定シタル事實ト其之ニ適用シタル刑トヲ分別シ其一方ヲ認可セスシテ他ノ一方ノミヲ認可スルヲ得ス事實認定ノ變更ハ刑ノ適用ニ影響ヲ及ホサ、ルヲ得ス控訴裁判所ニ於テ原裁判ト異ナリタル事實ヲ認メタルトキハ必ラス之ニ刑ヲ適用シ其宣告ヲ爲サ、ルヲ得ス(二十三年十月廿七日)控訴裁判所ニ於テ控訴事件ヲ審判スルニハ其訴旨ノ如何ヲ問ハス必ラス判決ヲ以テセサルヘカラス決定ヲ以テスヘキモノニ非ラス(二十五年三月十四日)請求ヲ受ケタル事件ニ付判決ヲ爲サ、リシ第一審判決ヲ不當トシ控訴シタルトキハ控訴裁判所ハ其當否ヲ審理シ其判決ナキヲ不當ト認メタルトキハ原判決ヲ取消シ更ニ相當ノ判決ヲ爲サ、ルヘカラス此場合ニ於テ第一審ニ於テ判決ヲ爲サ、リシ部分ハ初審ナルカ故ニ控訴裁判所ニ於テ裁判スヘキモノニ非スト言渡シタルハ不當ノ判決ナリトス(二十六年一月十六日)本條後段ハ扣訴ヲ爲シタル者ノ控訴ノ理由アルトキハ其者ニ言渡シタル判決ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲スヘキ注意ナレハ共犯者ノ中ノ一人ノ控訴カ理由アリトシ他ノ共犯者ニ對スル判決ヲ取消スヘキモノニ非ス(同年四月廿四日)第二審ニ於テ共同被告ノ氏名ヲ更正スルモ違法ニアラス何トナレハ犯罪ノ事實ヲ更正シタルニ非ス又他ノ被告ノ利害ニ關係ヲ及ホサ、レハナリ(二十七年四月廿日)酌量減輕ハ裁判官ノ適宜ニシテ決シテ法律上裁判官ヲ拘束スルモノニアラス故ニ假令酌量減輕ヲ與ヘサルトテ決シテ控訴ノ理由トナスヘキモノニアラストノ論者アリシカ法曹會ハ反對ノ意見ヲ

以テ決議シタリ抑モ控訴ヲ爲スニハ上告ヲ爲スカ如ク若干ノ原因ニ拘束セラル、一ナク被告人ハ唯第一審ニ服シ雖シトノ一語ヲ以テ足レリ控訴裁判所モ亦毫モ第一審ノ爲メニ掣肘セラル、一ナク唯不當ナリトノ一語ヲ以テ之ヲ取消スコトヲ得ルモノナリ特ニ第一審裁判所モ第二審裁判所モ同シク事實裁判所ナレハ其間權限ニ廣狹アルノ理ナク其審判ノ途ニ於テ些ノ徑庭アルヘキノ理ナクハナリ(二十五年三月二日)ト云ヘリ

第二百六十二條

控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

原裁判所ニ於テ不當ニ管轄違ヲ言渡シタルトキハ其判決ヲ取消シ事件ヲ其裁判所ニ差戻ス可シ

控訴裁判所ニ於テ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ發見スルトキハ原判決ヲ取消スヘキモノトス此場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認ムルトキ即チ他ノ正當管轄裁判所ニ於テ必ラス有罪判決ヲ受クヘキモノト見認ムルトキハ已ニ勾留ヲ受ケツ、アルモノニアリテハ前勾留狀ヲ存シ又未ダ勾留狀ヲ受ケサルモノナルトキハ新ニ勾留狀ヲ發スヘシ而シテ其事件ハ之ヲ檢事ニ交付シ相當ノ處分ヲ爲サシムルニアリトス  
原裁判所ニ於テ管轄違ナリトシテ棄却シタルトキニ於テ其控訴カ正當ニシテ管轄スヘキモノナリトキハ其判決ヲ取消シ事件ヲ其裁判所ニ差戻スヘシ之レ更ニ審判セシムルカ爲メナリトス

第二百六十三條

前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一審トシテ裁判權ヲ有スルトキハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

前條第一項ノ場合ニ於テ控訴裁判所カ地方裁判所ニシテ第一審タル區裁判所カ地方裁判所ノ管轄事件ヲ裁判センカ爲メニ前條第一項ノ裁判ヲ爲スニ至リシトキハ地方裁判所ハ自ラ其裁判權ヲ有スルヲ以テ更ニ判決ヲ爲スヲ以テ便宜ナリトス  
但其事件カ重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ豫審判事ニ送付スル決定ヲナスヘシ其勾留ヲ受ケサルトキハ勾留狀ヲ發スルコト當然ナリ

第二百六十四條

控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ  
受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セサルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

【註釋】 控訴院即控訴裁判所カ控訴院ナルトキ詳細ニ云ヘハ第一審カ地方裁判所ニシテ第二審カ控訴院ナルトキ此場合ニ於テ第一審ハ輕罪ナリト判定シタルニ第二審ニ於テ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶ノ控訴アリタルトキハ其公判ハ之ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判スヘキ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲サシメ受命判事ヲシテ報告ヲ爲サシムヘシ恰モ第二百四十一條第二項及ヒ第三項ト同一トス

本條ノ場合ニ於テモ第二百三十七條ノ規定ヲ準用スヘシ

**第二百六十五條** 被告人、辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ許サス

被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

【註釋】 檢事ノ控訴ハ之レ公益上ノ爲メナレハ常ニ被告人ノ爲メニ不利益タルコト多シ然レトモ第二百四十二條第二項ノ如ク利益ノ爲メニモ控訴ヲ爲スコトアルヘキハ勿論ナリトス

又被告人辯護人又ハ法律上代人カ控訴ヲ爲スハ其主意トスル所ハ刑ノ輕カランコトヲ欲シ又ハ全ク刑ナキモノト思慮シ自己ノ欲望ヲ達セントシテ控訴ヲ爲スコト外ナラス然ルニ控訴審理上却テ不利益ノ結果ヲ來ダサシムルモノトセンカ意思ニ反スルハ勿論或ハ爲メニ躊躇シテ控訴ヲ爲スコトナキニ至リ折角ノ法律モ徒勞ニ屬シ寧ロ上訴ノ方法ヲ設ケサルニ優ルヘシ蓋シ法律ハ斯ノ如キ豫想ヲ以テ設ケタルコトヲサレハ假令彼等ノ控訴ニシテ却テ法律上ノ不利益ノ結果ヲ生スヘシト雖モ原判決ハ之ヲ變更セスト制限シタル所以ナリ

被告人ノ利益ノ爲メニ檢事ヨリ控訴ヲナシタルモ亦同一タリ

大審院判例ニ曰ク第一審裁判ニ被告人カ不服ヲ申立テ控訴シタルニ第二審裁判所カ第一審裁判所

ノ認メタル繼續犯ヲ取消シ數罪俱發トナシタリトテ現實ノ刑期ニ差等ナキ限リハ被告人ニ不利益ノ點ナキヲ以テ本條ニ違反シタル判決ナリト云フコトヲ得ス(二十四年九月十七日) 原裁判ヲ取消更正スルトキハ刑期計算上被告人ニ利益アル場合ト雖モ現ニ言渡スヘキ刑、原裁判ノ科シタル刑ヨリ重カルヘキトキハ本條ニ所謂被告人ニ不利益ナル場合ナリトス(同年九月廿四日) 本條ニ所謂不利益ノ變更トハ刑ノ適用ノミヲ指シタル者ニシテ事實ノ認定ヲモ變更スルコトヲ得ストノ法意ニアラス(二十六年六月廿二日)

**第二百六十六條** 控訴申立人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セサルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ闕席判決ヲ爲スコシ

【註釋】 本條ノ場合ハ第二百五十八條ノ規定ニ依リ第二百三十六條ヲ適用シ第二百二十八條ヲ準用スルモノトス

控訴申立人欠席判決ヲ受ケタルトキハ故障ヲ爲スモ上告ヲ爲スモ自由ナリヤ否ヤ第二百六十七條以下ノ條文ヲ關スルニ第二百五十二條第二項ノ明文ト同一ノ明文ナシ果シテ然ラハ故障ヲ爲スコトヲ得ヘキハ當然ナルモ上告ヲ爲スコトヲ得サルモノト解スヘキヲ正當ナリトス

**第三章 上告**

【註釋】 上訴中ノ第二位タル上告ノコトヲ規定ス夫レ上告ハ事實ニ付テ不服ヲ唱フルモノニシテアラスシテ法律上不服アルトキニ上訴ヲ爲スモノナリ故ニ上告ハ法律ノ解釋ノ統一ヲ謀ルニ外ナラス現今各控訴院ニ於テ區裁判所ノ判決ニ對スル上告ヲ受クルヲ以テ法律解釋ノ統一ヲ謀ルコト難シ之レ目下法曹社會ニ在テ上告裁判所ハ全國一ヶ所ニ限ルヘシトス

○勅令第四十六號  
罰金追及徴ノ  
管渡ヲ受ケタ  
ル者上告ヲ爲  
サントスルト  
キハ其罰金及  
追徴金ノ十分  
ノ一ニ當ル金  
額ヲ上告趣意  
書ニ添ヘ原裁

論ヲ主張スル所以ナリ

上告ニ二種アリ一テ通常上告ト云ヒ一テ非常上告ト云フ其通常上告ハ判決確定前コ於テ之ヲ爲シ非常上告ハ判決確定後ニ爲スモノトス之レ大略ノ區別トス

控訴ニ付テハ第二百五十條以下ニ之ヲ規定シ上告ニ付テハ第二百六十七條以下ニ之ヲ規定ス即チ同一ノ筆法ニ之レ依レリ故ニ別ニ茲ニ於テ説明セス

刑事訴訟法中私訴ノ上告ニ關シ民事訴訟法ノ規定ヲ適用スヘキ規定ナシ(二十六年五月廿五日大審院判決)

**第二百六十七條**

上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトナ

得

上告裁判所ハ大審院ト控訴院トス左ノ如シ

大審院ニ在テハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ

控訴院ニ在テハ地方裁判所ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ノ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ

テ之ヲ爲スコトナ得ヘキモノトス

大審院判例ニ曰ク公訴私訴同時ニ判決ヲ受ケタル場合ニ於テ被告カ此判決ノ全部ニ對シテ不服ナリトシテ上告申立タルハ公訴私訴ノ判決ニ對スル者ト見ルヘキハ當然ナリ(廿七年九月廿七日)

**第二百六十八條** 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ

限り之ヲ爲スコトナ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トシテ爲スニ限ル其法律ニ違背シタルモノトハ如何ナルモノナルヤ本條第二項ニ於テ法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキト云ヘリ而シテ其場合ハ千差萬別一々明記スルコトナ得サレトモ次條ニ明記スルヲ以テ常ニ法律ニ違背シタルモノト看認メタリ

上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルトキニ限レリ故ニ事實上ニ付テハ決シテ上告ヲ爲スコトナ許サス殊ニ原裁判ノ認定セサル事實ニ付キ上告スルヲ得サルハ勿論ナリ(十九年三月廿九日大審院判決)

**第二百六十九條** 裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除外ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトナ得ス

第三 判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラヌ裁判ニ參與シタルトキ

判所書記局ニ  
預リ置ク可シ  
否ラサレハ上  
告ヲ爲スコト  
ナ得ス若シ上  
告不當ナルト  
キハ大審院ニ  
於テ其全部又  
ハ幾分ヲ没入  
スルノ言渡ヲ  
爲スヘシ  
明治十九年  
六月九日  
內閣總理大  
臣伯田  
伊藤博文  
司法大臣  
伯田  
山田顯義

第四 裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五 法律ニ背キ公判ヲ受理シ又ハ受理セサルトキ

第六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カサルトキ

第七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ

第八 判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセサルトキ

第九 裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ

第十 擬律ノ錯誤アルトキ

註釋 本條ハ常ニ法律ニ違背シタルモノト看認メタル裁判ナリ

第一ノ場合 ○例ヘハ地方裁判所ハ刑事定員三名ナルニ二名若クハ一名ニテ裁判シタルカ如キ檢事若クハ書記ノ立會ヲ爲サス裁判シタルカ如キ代理ノ命ナキ區裁判所刑事カ列席シタルカ如キハ皆構成ヲ欠キタルモノトス

第二ノ場合 ○此場合ハ刑事訴訟法第四十條ノ列記ノ如シ

第三ノ場合 ○此場合ハ刑事訴訟法第四十一條ノ場合ニ於テ忌避スヘキモノナリト爲スニ拘ラズ其裁判ニ參與スルニアリ

檢事又ハ書記ニ付テノ規定ナキハ如何ト尤トモ檢事ハ原告官ナレハ常ニ被告人ノ爲メニハ不利益ナル地位ニアリ裁判官ハ之カ裁判ヲ爲スモノナレハ檢事ニ對シテハ法律ハ忌避ヲ爲スコトヲ許サス書記ハ第四十五條ニ於テ刑事ト同シク除外及ヒ忌避ヲ準用スルモノナレハ書記ニシテ果シテ本號ニ該ルトキハ破毀スルヲ至當トス法文ハ之ヲ解釋シテ本號ヲ書記ニモ適用シテ可ナリ

第四ノ場合 ○管轄ニ不當ニ認メタルトキハ區裁判所カ重罪事件ヲ自己ノ管轄ナリト認メテ裁判シタルカ如キハ之レ裁判權ヲ有セサル事件ニ裁判ヲ與ヘタレハ不當トス又管轄違ヲ不當ト認メタルトキハ裁判所ハ自己ノ管轄ナルニモ拘ラス管轄違ヲ言渡シタルハ責任ヲ行ハサルニ等シ之レ破毀ノ原由アルモノト云フヘシ

第五ノ場合 ○法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルトキトハ例ヘハ公訴權消滅シタルモノナルニ公訴ヲ提起シタルトキノ如キ之ニ反シ公訴ヲ受理セサルトキトハ例ヘハ正當ニ檢事ヨリ起訴シタルヲ却下シタルトキノ如シ

第六ノ場合 ○本法中檢事ノ意見ヲ聽ク個所多シ其場合ニ檢事ノ意見ヲ聽カスシテ裁判シタルトキノ如シ例ヘハ第二百二十條ノ陳述ヲ爲サシメシテ判決ヲ爲シタル類ナリ

第七ノ場合 ○裁判所ハ請求ヲ受ケタル事件ハ必ラス相當ノ判決ヲ爲サ、ルヘカラス然ルニ裁判ヲ爲サ、ルハ責任ヲ盡サ、ルモノナリ之ニ反シ附帶犯罪ノ如キ職權上公訴ナキモノト雖モ裁判ヲ得ヘキハ冤モ角モ其訴ヘナキ事件ニ付テハ決レテ裁判スヘキ權ナキニモ拘ラス裁判シタルトキハ之レ裁判權ナキニ裁判シタルモノニシテ不當ト云フヘシ

ス之レ憲法第五十九條裁判所構成法第百五條ノ規定ナリシニモ拘テス之ヲ爲サ、ルトキナリ  
 第九ノ場合 ○裁判ノ理由ハ第二二三條ノ如ク事實及ヒ法律ナリト理由ヲ附セサル裁判ハ如何ナ  
 ルモノニ對シテ刑ヲ言渡シタルヤチ知ルコト雖シ又理由ノ齟齬セルトキ例ヘハ事實ノ理由ハ竊  
 盜ニシテ法律ノ理由ハ詐欺取財ノ如キ又ハ借用シタルコトヲ認メツ、アルニ其終リニ贓物ト知  
 リテ寄藏シタリト記載シタルカ如キ類ナリ

第十ノ場合 ○或ル事實ヲ認メナカラ刑ノ適用ヲ間違ヒタルカ如シ事實ハ竊盜ナリト認メナカラ  
 法律ヲ列記スルニ強盜ノ條ヲ用ヒタルカ如キ委託物費消ニ詐欺ノ所爲アルヲ單ニ刑法第三百九  
 十條ヲ適用シテ第三百九十五條ヲ援用セサルトキノ如キ敗罪俱發ナルニ第百條ヲ用ヒサルカ如  
 キ類ナリ

以上上告シ得ヘキ點ナリト雖モ第二百九十一條アリテ被告人ノ爲メニ不利益ナル判決ヲ下スコト  
 ナ許サ、レハ假令場合ニ依リ原判決ヲ破毀スルモ原判決ノ如ク刑ハ依然タルコトアルヘキヲ知ル  
 ヘシ

大審院ノ判例多シ左ニ之ヲ示シ説明ヲ補ハントス

犯罪ノ構造ニ緊要ナル條件ヲ舉示セサルモノニシテ擬律ノ如何ヲ鑑査スルニ由ナキ裁判ハ破毀ナ  
 免レス(十九年四月廿二日)犯罪ノ年月日ハ公訴期滿免除ノ期限ニ關シ判文上欠クヘカヲサル要  
 點ナリ此年月日ヲ欠キタル裁判ハ事實ノ理由ニ不備アルモノニシテ上告ノ理由アリトス(十九年  
 四月廿九日)擬律ノ錯誤トハ原裁判官カ認定シタル事實ト其事實ニ當行シタル法律ノ適用ニ錯誤  
 アルヲ云フモノニシテ上告人ノ思想ト原裁判官カ適用シタル法律ト相違シタルヲ云フモノニ非ラ  
 ス(廿九年一月廿九日)大審院ノ移送ニ係ル事件ニ對シテハ管轄ニ疑ヲ生ズヘキ筈ナキニヨリ裁  
 判言渡書ニ犯罪ノ地ヲ明示セサルモ破毀ノ原因トナラス(廿一年三月八日)被告ノ所爲ヲ斷スル

ニ年月日ノ如何ニカ必要ナル場合ニ於テ其年月ヲ誤リタル裁判ハ破毀ヲ免レス(廿三年十一月廿  
 日)理由ノ齟齬トハ事實若クハ法律ノ理由中彼此相齟齬シテ何レカ是ニシテ孰レカ非ナルヤ更テ  
 判別シ難キノ謂ニシテ事實ノ理由ト法律ノ理由ト相當ヲサルノ謂ニアラス(廿四年八月六日)原  
 判文被告住所ニ誤謬ノ兼アルモ是等ハ以テ上告ノ理由トナスコ足ラス(同年十一月十二日)家資  
 分散ノ際藏匿脱漏罪ノ構成ヲ認ムルニハ必ラス家資分散ノ言渡ヲ爲サ、ルヘカヲ然ルニ其言渡  
 ナ明示セサルトキハ擬律ノ當否ヲ鑑査スルニ由ナキヲ以テ理由ヲ附セサル裁判ニシテ破毀ノ理由  
 アルモノトス(二十五年十二月一日)減輕ノ場合ニ於テ本刑ニ一等ヲ減シタルカ將タ二等ヲ減シ  
 タルカヲ明示セシテ刑ノ範圍ヲ知ルニ由ナキモノハ理由不備ノ裁判タルヲ免レス(廿六年十月  
 十二日)判事ノ補職ハ官報ニ登載スルヲ以テ定マルモノニアラス本人其辭令書ヲ收受シテ始メテ  
 其補職ノ定マルモノナレハ未タ轉補ノ辭令書ヲ收受セサル前ハ現在ノ法衙ニテ職務ニ從事スルモ  
 判決裁判所ヲ構成セスト云フコトヲ得ス(廿七年一月十八日)對審ノ公開ヲ停止スル決議并ニ其  
 理由ノ言渡ナキハ不法ナリ(廿七年四月九日)廷丁ハ裁判所ヲ構成スル職員ニ非サルヲ以テ公判  
 始末書ニ廷丁カ公廷ニ出頭シタルコトヲ記セサルモ原院公廷ノ組織ニ於テ欠點ナシトス(同年八  
 月廿三日)

第二百七十條

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲  
 メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ上告ノ理由ト  
 爲スコトヲ得ス

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタルトキハ之レ被告人ノ爲メニ利益ナル判決ナリ然ルニ尙ホ被告人  
 ノ利益ノ爲メ設ケタル規定例ヘハ第二百二十條ノ末項第二百三十七條ノ如キニ背キタルトキ(一)



土地ノ管轄違アリトスルトキ例ハ甲地方裁判所ノ管轄ナルニ乙地方裁判所ニ於テ判決アリシトキノ如キ(二)ハ何レモ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス蓋シ何レニ爲スモ元ト免訴又ハ無罪タル利益ノ判決ニアレハ假令其欠点アリトスルモ更ニ之ヲ破毀スルトキハ或ハ有罪ノ判決アルヤ知ルヘカラス好シ假リニ無罪又ハ免訴ノ言渡アリトスルモ再ヒ法廷ニ立ツノ不利益アルヘシ故ニ本條ニ於テハ之ヲ許サルモノトス

大審院判決ニ曰ク凡ソ被告人ノ上告ハ必ラス被告人自己ノ利益ノ爲メニ關スルコトナラサルヘカラス其不利益若クハ犯罪構成上處刑上影響ヲ生セサル事項ニ對シ爲シタル上告ハ成立セサルモノトス(廿六年七月十日)

第二百七十一條 上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

上告期間ナリ而シテ其翌日ヨリ起算スルコトハ控訴ト同一タリ其控訴ト短カキハ熟考スヘキ事柄ニ付テ難易アルヘキカ控訴ハ事實上及ヒ法律上ニ付テ考案ヲ下スヘク上告ハ單ニ法律上ノミノ考案ナレハナリ故ニ短カク爲スモ大ナル害ナシト認メタルニ外ナラサルヘシ

本條ハ公訴ノ期間ナリト雖モ附帶私訴ノ上告期間モ之ト同一ナルコト勿論ナリ別ニ私訴ニ付上告期間ノ定メナキヲ以テ私訴モ公訴ニ附帶セハ公訴ト同一ニ爲スコト既ニ始メニ於テ説明シタルカ如シ

第二百七十二條 本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告ノ申立アリタルトキハ勾留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

本條ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告ノ申立アルトキハ刑ノ執行ヲ停止スルハ至當ニシテ控訴判決果シテ正當ナルヤ否ヤ知ルヘカラス第百八十七條ト同一ノ旨趣ナリトス而シテ本案ト

アルヲ以テ本案前ノ判決即チ公訴不受理ノ判決又ハ管轄違ノ申立ヲ却下シタル判決ハ判決ノ執行ヲ停止セサルモノト云ハサルヘカラス其他尙ホ拘留及ヒ放免ノ言渡ハ之ヲ停止セスシテ其執行ヲ爲ス其拘留ノ言渡ハ被告人ヲ自由ナラシメ後有罪ト決シテ執行セントスルニ際シ逃走スルカ如キ又ハ証據湮滅ノ恐レアルカ故ナリ又放免モ以上ノ疑ナキニ非サルモ已ニ控訴ニ於テ事實ヲ審理シテ放免セシニ尙ホ自由ヲ拘禁スルカ如キハ酷ナリト云フヘシ故ニ何レモ執行ヲ停止セサルモノトス其他保釋責任ノ如キハ明文ナキモ之カ執行ヲ停止セス執行セシムヘシ本文ニ明文ナケレハ反對解釋ヨリ其他ハ何レモ執行ヲ停止セスト云フヘシ殊ニ保釋責任ノ如キハ判決ヲ以テ言渡スモノニアラサルヘナリ

第二百七十三條 上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタル日ヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取りタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ

上告ヲ爲スノ手續ヲ規定ス別ニ説明スルコトナシ只上告申立書ヲ差出シタルノミニシテ其趣意書ヲ差出サ、レハ上告ノ效ナシ(廿四年二月十八日大審院判決)辯護人ノ上告申立ハ法定ノ期間内ナルモ既ニ被告人自ラ其前日ニ上告申立ヲ爲シタルトキハ辯護人ノ資格ニテ獨立シテ再度申立ヲ爲スコトヲ得サルヲ以テ辯護人ノ申立ハ其效ナキモノトス故ニ此場合ニ於テ辯護人ノ上告申立ヲ爲シタル日ヨリ起算シテ被告人ノ趣意書差出シノ日ハ未ダ法定ノ期間即チ五日ヲ經過セサルモノト爲スコトヲ得ス(廿六年五月十一日同上)ト判決アリ

第二百七十四條 相手方ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取りタル日ヨリ五日内

ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得  
裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス  
可シ

**第二百七十五條** 相手方ハ必ラス答辯書ヲ差出スヘキ義務ナシ差出スト否トハ本人ノ隨意トス若シ答辯書ヲ出  
シタルトキハ上告申立人ニ送達スルハ義務ナリ何レモ上告ノ準備ナリトス

通ヲ作り一通ヲ上告裁判所ニ差出シ一通ヲ相手方ニ送達ス可シ  
私訴ノ判決ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ハ一  
辯書ニ付テモ亦同シ

**第二百七十六條** 原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル上告ハ決定ヲ以テ之ヲ  
棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

**第二百七十七條** 訴訟記録ハ檢事ヨリ上告裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之  
ヲ裁判所ニ差出ス可シ

**第二百七十八條** 上告ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶上告ヲ爲スコトヲ得  
上告裁判所ノ檢事モ亦附帶上告ヲ爲スコトヲ得

**第二百七十九條** 上告申立人及ヒ相手方ハ辯護士ヲ差出スコトヲ得  
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ  
モノトシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ辯護士ヲ  
選任セサルトキハ上告裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ  
之ヲ選任ス可シ

**第二百八十條** 裁判長ハ受命判事ヲ定ム可シ  
受命判事ハ訴訟記録ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カ

ラス

【註釋】 大審院又ハ控訴院ハ其判事多シ一々書類ニ據テ調査スルコトヲ得ス故ニ受命判事一名ヲ定メ以テ報告セシム受命判事ハ訴訟記録ニ依テ原裁判所、上告人、年月日、等ヲ記載シテ報告ス又決シテ自己ノ意見ヲ加フヘカラス若シ意見ヲ加フルトキハ他ノ判事ハ一々意見ニ基キ輕忽ニ裁判ヲ爲スノ恐レアリ又豫斷ヲ懷キ反テ被告人ニ不利ヲ生スルコトアリトス故ニ之ヲ禁ス

第二百八十一條 上告申立人及ヒ相手方ハ受命判事ノ報告書ヲ差出スマテハ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得

受命判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルトキハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

【註釋】 趣意書ノ擴張ヲ許スハ僅カニ五日間ニ於テ十分盡シ得サルモノト認メ猶豫ヲ與ヘタルナリ

第二百八十二條 裁判所書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ノ辯護士ニ報知ス可シ

【註釋】 開廷ヲ通知スルハ辯論ヲ爲サシムルカ爲メナリ

第二百八十三條 開廷ノ日ニハ受命判事先ツ其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事及ヒ辯護士ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

【註釋】 開廷ノ日ニ於ケル順序ヲ定ム

第二百八十四條 上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出ササルトキハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

【註釋】 上告ニ辯護士ヲ用ユルト否トハ隨意ナレハ若シモ差出サ、ルトキハ其儘ニ判決ヲ爲スヘシ

第二百八十五條 上告裁判所ニ於テハ上告ノ理由ナキトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間内ニ於テ起ササルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

【註釋】 棄却ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ヲ定ム即チ左ノ如シ  
一 上告ノ理由ナキトキ  
二 法律上ノ方式及ヒ期間内ニ起サ、ルトキ

是ナリ

第二百八十六條 上告ヲ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破

毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可シ但後二條ニ記載シタル場合

ハ此限ニ在ラス

【註釋】 上告ヲ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シテ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヘシ其如何ナル裁判所ナルヤ否ヤハ第二百九十條ノ規定ニアリ

但第二百八十七條及ヒ第二百八十八條ノ場合ハ他ノ裁判所ニ移スコトナキ手續ヲ定ム之レ但書アル所以ニシテ原則ノ例外トシタリ

第二百八十七條 擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁判所ニ於テ直ニ判決ヲ爲スコシ

【註釋】 本條ノ擬律ノ錯誤（一）法律ニ背キ公訴ヲ受理シタル（二）ニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ他ノ裁判所ニ移サス直チニ判決ス之レ別ニ審理ヲ爲ス必要ナケレハナリ  
私訴ノ場合ニ於テモ擬律ノ錯誤アリ彼ノ刑法附則ノ正條ヲ適用スルニ當リテ誤リタルカ如シ  
若シ私訴ニ付キ法律ニ背キ受理シタルトキハ如何本條明文ナシト雖モ公訴ト同一ノ決定ヲ爲スコトヲ得ヘシ蓋シ事實裁判所ニ移ス必要ナケレハナリ

第二百八十八條 公判ノ手續規定ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホササルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ

【註釋】 公判ノ手續規定ニ背キタルトキハ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホスト否トニ依リテ上告裁判所自ラ裁判スルト否トノ區別ヲ生スヘシ其後ノ手續ニ利害ノ及ハサルトキハ上告裁判所自ラ裁判ス即チ其手續ヲ破毀スルノニ若シ其後ノ手續ニ利害ノ及ホストキハ之ヲ破毀シテ原則ニ從ヒ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲スヘキモノトス

第二百八十九條 判決ノ一分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係

アルトキハ其部分ヲモ破毀ス可シ

擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ被告人ノ利益ノ爲ニ判決ヲ破毀シタルトキハ其利益ハ上告ヲ爲ササル共同被告人ニモ及ホス可シ

【註釋】 判決ノ一部例ヘハ沒收ノ言渡ノミニ對シテ不服アリトシ上告セシトキハ他ノ本案ニ關係ナケレハ單ニ沒收ノ部分ノミニ破毀シテ更ニ裁判スルコトヲ得ヘシト雖モ反對ノ場合ニ於テハ不服ヲ申立テサル沒收ノ部分ヲモ破毀スルモノトス之レ關係スルカ爲メナリトス  
第二項ハ不告不理ノ原則ノ例外ナリ上告ヲ爲サルモノハ之レ其判決ニ服シタルモノナリ然ルニ第二項ノ場合ニ限リ他ノ共犯人ニ及ホスヘキハ之レ例外トシテ適用スルニアリ蓋シ元ト不當ノ判決ナンハ之ニ屈服シタルハ事理ヲ辨ヘサル所ダレハ同一ノ犯人ニシテ一ハ無罪トナリ一ハ有罪ト爲ルカ如キ不權衡不當ナル理アルヘカラス之レ其利益ヲ共犯人ニ及ホス所以ナリ

第二百九十條 上告裁判所ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲スコトキハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所ノ民事部ニ移スコシ

【註釋】 上告裁判所カ他ノ裁判所ニ移ストキノ手續ヲ示ス其場合ハ公訴ト私訴ト區別アリ公訴及ヒ私訴ナルトキハ共ニ同一ノ裁判所ヲ指定シ若シ單ニ私訴ナルトキハ其民事部ヘ移スヘシ之レ原則ニ回復セシムルヲ至當ナリトス此結果ヨリ論スルトキハ大審院ニ在テハ私訴モ公訴ト同一ニ刑事部ノ擔當ト爲リ居ル事論ヲ俟タス